續國譯漢文大成

文學部 十九

309
65

始

續國譯漢文大成

文學部第十九册（第五帙の三）

杜少陵詩集　中の三

吉田徳郎氏　寄贈本

於昭和廿三年　寄贈

309
65

杜少陵詩集　卷十

漫成二首

野日荒荒白。春流泯泯清。
渚蒲隨地有。村徑逐門成。
只作披衣慣。常從漉酒生。
眼邊無俗物。多病也身輕。

漫成　二首

野日、荒荒として白く、春流、泯泯として清し。
渚蒲、地に隨つて有り、村徑、門を逐うて成る。
只披衣に慣るるを作す、常に漉酒に從りて生く。
眼邊、俗物無し、多病なるも也身輕し。

【字解】〔一〕野日　田野を照す太陽。〔二〕荒荒　すこしく不明なる貌。〔三〕春流　春の川のながれ。〔四〕泯泯　ささにごりの貌。〔五〕渚蒲　みぎはにはえた「がま」。〔六〕隨地　どこにでも。〔七〕逐門　門の形勢につれての義。〔八〕披衣　披は手にてかきわけて著ること、これは人を訪はんとてなり、陶潤明が詩の相思則披衣、言笑無二已時一の意を用ふ。〔九〕漉酒　潤明は頭巾にてにごりさけを漉して、またその頭巾をかぶりしといふ、是は同志にして酒を愛するものをいふならん。〔一〇〕俗物　俗人をいふ。〔一一〕也　「亦」に同じ、俗語なり。〔一二〕身輕　飄然と家からでかけることをいへり。

【題義】そぞろにふとできあがりたる詩なり。上元二年春成都浣花溪の草堂に居りしときの作。

【詩意】野らをてらす太陽はうすぼんやりと白く、春の水流はささにごりしながら清らかである。みぎはの蒲は到る處に有るし、門のある所のままに村のこみちができてをる。自分は陶淵明の樣に頭巾で酒をこしてくれるものがあるおかげで生きてをるのであり、ただそんな人のところへ著物をはおつてゆくになれてゐるのである。そこでは眼のそばにすこしも俗人がをらぬ、だから多病な自分も身輕にそこへたづねゆく次第である。

〔一一〕

江皐已仲春。花下復清晨。
仰面貪看鳥。回頭錯應人。
讀書難字過。對酒滿壺頻。
近識峨嵋老。知余懶是眞。

〔一一〕

江皐已に仲春、花下復清晨なり。
仰面鳥を看るを貪り、回頭錯つて人に應ず。
書を讀むに難字過す、酒に對して滿壺頻なり。
近識る峨嵋の老、余が懶是れ眞なるを知る。

【字解】〔一〕江皐　皐は水流をおびたる岡、浣花溪のあたりをいふ。〔二〕仲春　二月。〔三〕清晨　はれたあさげ。〔四〕仰面　うへをむく。〔五〕貪　むさぼる、熱中すること。〔六〕回頭　ふりむく。〔七〕錯　まちがふ。〔八〕應　返答する、挨拶する。〔九〕難字過　難解の字にあへばそれをやりすごす、あまりに詮索せぬこと、異說は皆之を取らず。〔一〇〕滿壺頻　顏とは之を傾むくることしきりなるをいふ。〔一一〕近識　近來しりあひになる。〔一二〕峨嵋老　「原注」に東山隱者とあり、峨嵋山に隱れてゐる老人とみゆ。〔一三〕知　老人が知るなり。〔一四〕懶是眞　ぶしやうがもちまへ。

【詩意】江ぞひの岡ももはや二月になり、花の樹蔭も清きあしたである。あまり熱心に空とぶ鳥をみてゐたので、人からものを言ひかけられてとんちんかんの返事をしてゐる。書物を讀みかけるとむつかしい字はほつておくし、酒にむかふときはなみなみあふれた壺もしきりと傾けつくす。近來峨嵋山の老隱士をみしつたが、その男は、わしはぶしやうなところがもちまへなのだといふことを知つてくれた。

春夜喜雨

好雨知時節。當春乃發生。
隨風潛入夜。潤物細無聲。
野徑雲俱黑。江船火獨明。
曉看紅濕處。花重錦官城。

春夜雨を喜ぶ

好雨、時節を知り、春に當つて乃ち發生す。
風に隨つて潛に夜に入り、物を潤して細にして聲無し。
野徑雲に俱に黑く、江船火獨り明なり。
曉に紅濕ふ處を看れば、花は重し錦官城。

【字解】〔一〕知時節　春になれることを知りてゐる。〔二〕潛　音なたてぬこと。〔三〕雲俱黑　雲黑く雨も亦くろし。〔四〕火　船夫のたく火。〔五〕紅　花のくれなゐ。〔六〕重　雨にぬれるゆゑにしほたれておもさうにみえる。〔七〕錦官城　成都の城をいふ。

【題義】春の夜、雨のふりしことをよろこびて作る。上元元年春の作なるべし。

【詩意】よい雨がさすがにふるべき時節だと心得がほに春にあたつてふりだした。その雨は風のまにまに音をもたてずにそのまま夜までふりつづき、さまざまの物をしめらせはするが、こまかなきりさめですこしもふるこゑはせぬ。雨の色は野らのこみちに雲とともに黒ずんでみえるが、江にういてゐる船のあたりは、その焚き火だけがあかるくみえる。曉にもなつて紅の色のしめつてゐるあたりいづくぞとながめると、それは錦官城で花がしほたれてゐるところなのである。

春水

三月桃花浪。江流復舊痕。
朝來沒沙尾。碧色動柴門。
接䋲垂芳餌。連筒灌小園。
已添無數鳥。爭浴故相喧。

【字解】〔一〕桃花浪　桃花のさくとき出る水のなみ。〔二〕復舊痕　水かさがふえて舊水位のところまでくる。〔三〕沙尾　沙洲のすゑ。〔四〕碧色　江水の色。〔五〕柴門　自家の門。〔六〕接䋲　絲のすぢをつなぐ、釣絲にするなり。〔七〕芳餌　いいにほひのあさ。〔八〕連筒　かけひの竹つつをつなぐ、（釣車の竹筒なりとの說あれどもそれにては灌小園の語とにあはぬ）。〔九〕園　はたけ。〔一〇〕無數鳥　鳥は「さぎ」なるべし。〔一一〕故　ことさらに、わざと。

【詩意】三月桃花水の浪がおこり、江の流れももとの水痕のところまで水かさがふえてきた。朝からかけて中洲の沙のしつぽはかくれて、碧の色が我家の柴門のあたりに動いてきた。それで自分は絲すぢをつないで釣竿で餌を垂れたり、竹筒をなん本もつらねて江水を引いて小さなはたけに水をそそぐ。また早くもかぞへきれぬほどたくさんの水鳥がやつてきて、爭うて浴してわざとがやがやさわぎたてゐる。

【題義】春の出水のことをのべたり。前詩と同年の作。

江亭

坦腹江亭暖。長吟野望時。
水流心不競。雲在意俱遲。
寂寂春將晚。欣欣物自私。
故林歸未得。排悶强裁詩。

【字解】〔一〕坦腹　腹を平にして仰ぎ臥す。〔二〕江亭　江のほとりの亭、江は錦江、浣花の江亭をいふ。〔三〕長吟　ながくこゑを引いて吟する。（この詩を吟するをいふ。）〔四〕野望　田野をながめる。〔五〕不競　心の流るるにまかせて之と爭はず。〔六〕雲在　雲がひとりでに存在してゐる。〔七〕遲　おそし、ゆつたりとしてゐる。〔八〕物自私　私とは自己の生を遂げつつあるをいふ。

江亭

江亭の暖なるに坦腹して、長吟す野望の時。
水流れて心競はず、雲在り意俱に遲し。
寂寂春將に晚れむとす、欣欣物自ら私す。
故林歸る未だ得ず、悶を排し强ひて詩を裁す。

【八】故林　故郷の園林。【一〇】歸未得　未ゞ得ゞ歸に同じ。【一一】排悶　心中のもだえをおしのける。【一二】費　つくること。

【題義】浣花草堂の江邊の亭の春の心もちをのべたり。前詩と同年の作。

【詩意】江べりの亭のあたたかなところに仰臥して、長吟しながら野らをながめるとき、水はかつてに流れてゐるが我が心は之と爭ふつもりもなく、雲はひとりでに横はつてゐるが我がこころはそれとともにゆつたりとしてゐる。しづかに春はくれかかつてゐる。どの物をみても彼等はうれしさうに自己の生活をとげつつある。このとき自分はまだ故郷の林へかへることができぬ。それで心中のもだえをおしのけんがためにむりにこの詩をつくるのである。

早起

春來常早起。幽事頗相關。
帖石防隤岸。開林出遠山。
一丘藏曲折。緩步有蹠攀。
童僕來城市。瓶中得酒還。

【字解】【一】幽事　しづかなしごと、次の帖石・開林等のことをさす。【二】相關　そのことにかかりあふ。【三】帖石　石をたたみあげる。【四】隤岸　江岸のくづれること。【五】開林　しげつた林をきりひらく、枝などすかすなり。【六】出　あらはれいでしむること。【七】一丘　自己の園丘をいふ。【八】曲折　路のなれまがること。【九】緩步　ゆつくりあるく。【一〇】蹠攀　よぢのぼること。【一一】童僕　しもべ。【一二】來城市　成都のまちからもどりくる。

【題義】庭仕事のため早く起きしことをのぶ。前詩と同年の作。

【詩意】春からこのかた自分はいつも早く起きる。それは庭仕事にかかりあふためである。すなはち石をたたんで江岸のくづれるのを防いだり、林の枝をすかして遠方の山を見える樣にあらはしだす。ただ一つの丘であるが折れ曲つた路があり、ゆつくりあるくとよぢのぼつたりするところもある。ちやうど城の方からしもべがもどつた、彼は瓶のなかに酒を得てかへつてきたのである。（それをのんで庭のさまでもながめよう。）

落日

落日在簾鉤。溪邊春事幽。
芳菲緣岸圃。樵爨倚灘舟。
啅雀爭枝墜。飛蟲滿院遊。
濁醪誰造汝。一酌散千愁。

【字解】【一】簾鉤　すだれを巻きあげてとめておくかぎ。【二】溪邊　溪は浣花溪。【三】春事幽　春事とは下の四句のこと、園

は幽靜。【四】芳菲　花がかんばしくにほふ。【五】緣岸圃　江岸によりそうたはたけ。【六】擔露　しぼきなかりてごはんをたく。【七】倚灌舟　はやせによつてゐる舟。【八】啅　とりのさわぐこゑのさま。【九】爭枝　多くのものが一つの枝にとまらんとする。【一〇】酡　おくには。【一一】醪　にごりさけ。【一二】汝　濁醪をさす。

【題義】草堂の春の夕ぐれのさまをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】すだれの鈎に夕日のひかりがさしてきて、溪邊の春げしきは幽靜である。すなはち江岸にそうたはたけには草花がにほひ、はやせによつて泊つてゐる舟では柴刈りしてごはんをたいてゐる。庭先きでは同じ枝にとまらうとして多くの雀がかやがやいひながら墜ち、奥庭ぢう蟲がとんで遊んでゐる。之をながめて自分は酒をのむ。いつたいにごりさけはだれがこしらへたものか、感心な物をこしらへたものではある。それを一どくんでのめば千萬の心配ごとがみなちりうせるではないか。

可惜

花飛有底急。老去願春遲。
可惜歡娛地。都非少壯時。
寬心應是酒。遣興莫過詩。
此意陶潛解。吾生後汝期。

惜む可し

花は飛ぶこと底の急か有る、老い去つては春の遲からむことを願ふ。
惜む可し歡娛の地、都て少壯の時に非ず。
心を寬うするは應に是れ酒なるべし、興を遣るは詩に過ぐるは莫し。
此の意、陶潛解す、吾が生汝が期に後る。

【字解】【一】底　何に同じ、俗語なり。【二】春遲　遲とは早くすぎぬことをいふ。【三】歡娛地　うれしくたのしむべき場所、即ち春をいふ。【四】非少壯時　老年なるをいふ。【五】寬心　心をくつろげる。【六】此意　詩酒によりて自己が慰むることをさす。【七】解　さとる。【八】吾生　自己の生れしとき。【九】汝期　汝は陶潛をさす、期は生存せし時期。

【題義】老年春にあへることをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】いかなる急用があつて花ははやく飛び散るのか。老の身にとつてはなるたけ春がゆつくりしてゐてくれるのをのぞんでゐるのだ。本來ならばおもしろをかしくすごすべき處であるが、少壯の時でなく老衰の時であるのが惜しいことだ。今の身では心をくつろげるものとては酒だらうし、興をやるには詩にこしたものはない。このこころもちはむかし陶淵明が知つてゐた。自分の生れ樣が彼よりおそまきなことは殘念なことである。

獨酌

步屧深林晚。開樽獨酌遲。
仰蜂粘落絮。行蟻上枯梨。
薄劣慙眞隱。幽偏得自怡。
本無軒冕意。不是傲當時。

獨酌

步屧、深林晚る、樽を開きて獨り酌むこと遲し。
仰蜂、落絮に粘し、行蟻、枯梨に上る。
薄劣、眞隱に慙づ、幽偏、自ら怡しむことを得。
本軒冕の意無し、是れ當時に傲るならず。

【字解】〔一〕歩屧　草履なり、草履なはきて散歩するをいふ。〔二〕仰蜂　うへをむいてゆく「はち」。〔三〕粘　ねばりつく。〔四〕蓉繫　おちくる柳の花、繫の字或は蓉に作る。〔五〕行蟻　行列をなす「あり」。〔六〕枯梨　梨の枯木。〔七〕薄劣　才徳なきこと。〔八〕眞隱　まことの隱遁者。〔九〕幽僻　住地の幽靜にしてかたよりたること。〔一〇〕自怡　他人にかかはらず自己のみをたのします。〔一一〕軒冕意　仕官富貴の意をいふ、軒は馬車、冕は「かんむり」、貴人の用ふるものなり。〔一二〕做當時　時世に對してゐばる、隱者は世俗を卑しとし自己を高しとする。

【題義】春一人にて酒をのむことをのぶ。上元二年の作か。

【詩意】草履ばきでぶらぶらしてゐるうちに深い林も夕ぐれになり、酒樽を開いてひとりでゆつくりのむ。みれば蜂がうはむきになつてゆくと柳の花が落ちてきてそれにねばりつき、蟻は行列をなして梨の枯木にはひのぼつてゐる。自分ごとき才徳なくつまらぬものは眞の隱遁者に對してはづかしくおもふのであり、ただこんな幽靜なかたよつた場所を得て自分ひとりでたのしめるといふだけのことである。自分には本來高位高官にならうなどの意は無いので、眞の隱者のやうに當世に對してゐばるなどといふわけのものではない。（自分の無能がすなはち隱者らしくさせてゐるだけのことだ。）

徐歩

徐歩

整履歩青蕪。荒庭日欲晡。
芹泥隨燕觜。蘂粉上蜂鬚。
把酒從衣濕。吟詩信杖扶。
敢論才見忌。實有醉如愚。

【字解】〔一〕徐歩　そぞろあるき。〔二〕整履　はきものをきちんとはく。〔三〕青蕪　青いくさはら。〔四〕荒庭　くさだらけのには。〔五〕晡　たそがれ。〔六〕芹泥　「せり」のどろ。〔七〕隨燕觜　つばめのくちばしにくはへらるるをいふ。〔八〕蘂粉　花粉をいふ、蘂粉一に花蕊に作る。〔九〕鬚　ひげ。〔一〇〕從、信　みな「まかす」義なり。〔一一〕衣濕　さけをこぼすためにうるほす。〔一二〕杖扶　つゑにたすけらるること。

【題義】自宅の園にぶらつきしことをのぶ。上元二年春の作ならん。

【詩意】はきものをきちんとはいて青い草はらにぶらつくと庭ははや日がくれかけてゐる。さうして燕のくちばしのまにまに芹の泥はくはへてゆかれ、蜜をすふ蜂のひげには花蘂の粉がふりかかる。こんな樣子をみながら自分は酒杯を手にとつて衣がぬれてもかまはず、詩を吟じながら杖のたすけるままにあるく。自分の才が他人から忌まれてこんな境遇に居るのだなどとは決していふまい。ただただ醉うて愚人の如くなつてゐるといふのが實際である。

寒食

寒食江村路。風花高下飛。
汀煙輕冉冉。竹日淨暉暉。
田父要皆去。隣家問不違。
地偏相識盡。雞犬亦忘歸。

【字解】〔一〕寒食　冬至節のうち一百五・六・七日を寒食といふ。〔二〕江村　浣花村。風花　風をうけたる花びら。〔三〕汀煙　みぎはのけむり。〔四〕冉冉　次第に生ずるさま。〔五〕竹日　竹林をてらす太陽。〔六〕暉暉　かがやくさま。〔七〕田父　ひやくしやう。〔八〕要　こちらを招きむかへる。〔九〕去　こちらが先方へでかけてゆく。〔一〇〕問　問遣なり、こちらの樣子ききに品物をおくつてくれること。〔一一〕不違　贈つてくれた意に從ひ之を受くるないふ。〔一二〕偏　かたよる。〔一三〕相識盡　盡相識の意、みんなしりあふ。〔一四〕忘歸　仙家にゆくも自家の樣におもひかへることをわする。歸を一に機に作る、忘機とは世間のからくりのこころをもたぬないふ。

【題義】寒食の節のさまをのぶ。上元二年浣花溪にての作。

【詩意】寒食の節の江ぞひの村の路では、風に吹かるる花びらが高くひくく飛びかはす。みぎはの煙はかろらかに次第にのぼり、竹林を照らす太陽はきよらかにかがやきわたる。たとへ農夫でもきてくれといふものがあれば自分はみなそこへでかけてゆく、となりどうしでおくりものをもつてきてくれればありがたくそれをうける。地がかたゐなかであるからみんなしりあひのなかで、鷄や犬までもよそのうちへでかけていつてもどるのを忘れてゐる樣なありさまである。

石鏡

蜀王將此鏡。送死置空山。
冥寞憐香骨。提攜近玉顏。
衆妃無復嘆。千騎亦虛還。
獨有傷心石。埋輪月宇間。

【字解】〔一〕石鏡　成都の北角に武擔といふ塚あり、塚上に厚五寸、徑五尺の石あり、楚徹にして鏡の如し、是卽ち此詩の詠ずる所のものなり。傳によるに武都山に大丈夫あり化して女子となる美にして艷なり、蓋し山の精なり。蜀王之を納れて妃となす、いくばくもなく妃死す、王、五丁をつかはし武都にゆき土を擔ひ塚を作らしむ、廣さ數畝、高さ七丈、石鏡を以て其の門に表す、卽ち武擔の石鏡なりと。〔二〕送死　死せる妃を葬送するなり。〔三〕冥寞　死のさまをいふ。死すればくらくはつきりせぬ境遇に在り。〔四〕香骨　美しき妃の骨。〔五〕提攜　この石鏡をもつてゆくこと。〔六〕近玉顏　死者の肉體のそばへおいたこと。〔七〕衆妃　他の多くの王妃たち。〔八〕無復嘆　これは死者を送りて哭し了るをいふ。〔九〕千騎　葬送の行列にたてる多くの騎兵。〔一〇〕傷心石　看る人をしてその心をいたましむる石、卽ち石鏡をさしていふ。〔一一〕埋輪　輪とは石鏡の圓形をさす。〔一二〕月宇　月の世界、石鏡の圓きを月にみたて、その横はる場所を月の世界にみたてて言を設けたり。

【題義】成都の石鏡の古迹を見てよめり。此篇と次の「琴臺」の詩は竝に上元二年の作。

【詩意】むかし蜀の王はこの石鏡をもて、死んだ妃を葬送してそれをだれも居らぬ山に置いた。美しい妃が死んでさびしからうとおもうて、この石のかがみをもっていつてうつくしい顏のそばへ立ててやつた。葬儀はすんで送りに來た多くの妃等も哭禮を了つてもはやなげきのこゑをやめ、多くの騎馬の兵もいたづらに墓のところからもどつてしまつた。さうしてただこの人のあはれを催させる石だけが月の世界ともいふべきこの山間にその圓形を埋めてをるのである。

琴臺

茂陵多病後。尙愛卓文君。
酒肆人間世。琴臺日暮雲。
野花留寶靨。蔓草見羅裙。
歸鳳求凰意。寥寥不復聞。

琴臺

茂陵多病の後、尙愛す卓文君。
酒肆人間の世、琴臺日暮の雲。
野花、寶靨を留め、蔓草、羅裙を見る。
歸鳳求凰の意、寥寥として復聞かず。

【字解】【一】琴臺　成都城外の浣花溪に近きところにあり。漢の司馬相如の遺迹なり、相如未だ榮達せざりしとき家貧なり、卓王孫といへる富人の女文君のやもめなるを琴歌にことよせていどみけるに、文君夜にげて相如がもとにゆく、つひに臨邛といふ處にいたり、酒肆をはじめ文君は壚（へっつい）にて酒を賣り、相如はそのそばにて食器などをあらひ居たり。相如はのち出世して高官となり、また多病の故を以て官をやめ茂陵といふところに居れり。【二】茂陵　漢の武帝の陵の名、相如そこに居りしを以て相如をさしていへり。【三】卓文君　相如が妻。【四】酒肆　さかや。【五】人間世　相如等の在世中をいふ、此句過去をいふ。【六】琴臺日暮雲　此句現在をいふ、仇氏之をも過去のこととせるは誤ひがたし。【七】野花　臺のあたりの野生の花。【八】留　いまもむかしのままをのこす。【九】寶靨　靨はエクボのことなれどもここは唐時の慣用により花鈿（額にあてる花かざし）の義とす。【一〇】蔓草　はびこれる草、これは色にていふ。【一一】羅裙　うすぎぬのはかま、文君のつけしもの。【一二】歸鳳求凰　相如が文君をいどみたりといへる琴歌に、鳳兮鳳兮歸故鄉、遨遊四海求其凰とあり、凰（雄）が四海にあそんで鳳（雌）をもとめてゐるがあてもないから故郷へかへらう、といへるなり、詩は歌辭を切りとりて用ひたり。【一三】寥寥　さびしき貌。

【題義】琴臺について懷古の情をのべたる詩なり。

【詩意】司馬相如は多病の後までもまだ卓文君を愛してゐた。そのわかいころには俗界で夫婦ともかせぎで酒肆までひらいたのであるが、今やこの琴臺にきてみるとただ日暮の雲がさびしくよこたはつてをる。野生の花をみると、それはありしむかしの卓文君の花かざしがのこつてをるかの樣であり、はびこれる草の色には文君のうすもののはかまの色がうかがはれる。しかし相如がうたうた歸鳳求凰のこころもちはたえてふたたびきくことはできぬ。

春水生二絕

二月六夜春水生。　春水生ず　二絕

二月六夜、春水生ず、

【字解】【一】春水生　生とはあ

門前小灘渾欲平。
鸕鷀鸂鶒莫漫喜。
吾與汝曹俱眼明。

門前の小灘渾て平ならむと欲す。
鸕鷀鸂鶒、漫りに喜ぶこと莫れ、
吾、汝が曹と俱に眼明なり。

なんぢら。【七】眼明　眼力分明にしてよく之を知るをいふ。

【題義】春のでみづがしたことについてのぶ。上元二年春の作。

【詩意】二月六日の夜に春のでみづがして、わがやの門の前の小さいはやせはすつかり平にならんばかりになつた。うだのをしどりだのにいふが、おまへたちはこの水のましたのをみてやたらにうれしがるなよ。吾吾もおまへたちとおなじくはつきりと水がでてきて喜ぶべきことをこころへてゐるのである。

〔二〕

一夜水高二尺強。
數日不可更禁當。
南市津頭有船賣。

一夜水高し二尺強、
數日更に禁當す可からざらむ。
南市津頭に船の賣る有り、

【字解】【一】二尺強　二尺あまり。【二】禁當　俗語「こらへる」、不可禁當とは「とてもたまらぬであらう」の義。【三】有船賣　賣らるべき船あること。【四】買　船をかふこと、船を買はんとするは草堂のもたにわきでてきたことをいふ。【二】漲　はやせ。渾　すべて。【三】鸕鷀　「う」のとり。【四】鸂鶒　なしどりの類。【五】莫漫喜　やたらによろこぶな。【六】汝曹　なんぢら。

無錢卽買繫籬旁。

錢の卽ち買ひて籬旁に繫ぐべき無し。

後せんことを恐るるなりとの仇氏說は恐らくは當らず、これ舟遊を試みんと欲するのみ、作者水を恐るる念なきこと次の「短述」をみても知るべし。

【詩意】ひとばんのうちに水かさが二尺あまりたかくなつた。二三日したらもつとたまらぬくらゐまことであらう。南市のわたりばに賣りものに出てゐる船はあるが、それを買うてわがやのまがきのそばにつないでおけるだけの錢の無いのが遺憾だ。

〔三〕

江上値水如海勢聊短述

江上水の海勢の如くなるに値ひ聊か短述す

爲人性僻耽佳句。
語不驚人死不休。
老去詩篇渾漫興。
春來花鳥莫深愁。
新添水檻供垂釣。
故著浮槎替入舟。

人と爲り性僻にして佳句に耽る、
語人を驚かさずんば死すとも休せず。
老い去つて詩篇渾て漫興なり、
春來花鳥深く愁ふること莫れ。
新に水檻を添へて垂釣に供し、
故より浮槎を著けて入舟に替ふ。

【字解】【一】江上　錦江のほとり。【二】値　であふ。【三】如海勢　さかんなさまをいふ。【四】短述　八句の詩でのべしが故に短といふ。【五】性僻　僻は「かたよる」。【六】漫興　漫如・漫然といふに同じ。とりとめもなくふとつくること。興の字を或は興に作る。【七】花鳥莫深愁　作者に造化の工を奪ふの力あ

焉得思如陶謝手。　焉んぞ思ひ陶謝の如くなる手を得て、
令渠述作與同遊。　渠をして述作せしめて與に同遊せむ。

れば花鳥も恐怖し愁ひないだくならん、因つて愁ふるを用ひざるをいふ。一説に「花鳥ニモ深ク愁フルコトナカレ」とし、花鳥の二字を副詞とみ、愁の字を作者にかけてみる、両して莫三深愁一とは苦吟愁思することなかれの義なりととく、今従はず。【八】水檻　檻は板にてつくりしてすり。【九】故　ふるくから。【一〇】浮搖　うかべたるいかだ。【一一】替入舟　替は代なり、いかだを以て舟に乗るにかへる。【一二】渠　「かれ」、俗語なり。【一三】思　文學上の藻思。【一四】陶謝　陶淵明、謝靈運。【一五】述作　文辭をつくること。【一六】江のほとりで海の水の勢のやうに水がましてくるのにであうたので、聊かこの短篇を作つた。上元二年春の作。

【詩意】自分は人となりかたよつた性質でただよい詩句を作ることにふけつて、人を驚かす様な語を吐きだすまでは死んでも休まないといふ風であつた。ところが年よつてからは作りだす詩篇はただ漫然とよむのであつて深刻なところがうせた。だから春かけて花や鳥も深く心配するには及ばぬよ。もとから水邊にはいかだをつないで舟に乗るのにかへてゐるが、この水につれて自分は水ばたにてすりを新に設けて釣りを垂れる用に供する。こんなとき文藻の豊富な陶謝の如き文筆の手を得て彼等をして名篇を作らせてともにあそんだならばいかにおもしろからうかとかんがへるのである。

水檻遣心二首

去郭軒楹敞。無村眺望賒。
澄江平少岸。幽樹晚多花。
細雨魚兒出。微風燕子斜。
城中十萬戸。此地兩三家。

水檻にて心を遣る　二首

郭を去つて軒楹敞なり、村無くして眺望賒なり。
澄江平にして岸少く、幽樹晚に花多し。
細雨に魚兒出で、微風に燕子斜なり。
城中は十萬戸、此の地は兩三家。

【字解】【一】去郭　城のくるわからはなれる。【二】軒楹　のき、はしら、家の建物をいふ。【三】敞　からりとしてゐるさま。【四】賒　はるか。

【題義】前詩に見えたる水檻なり、そこであたりをながめてうさばらしをせしことをのぶ。

【詩意】ここは城郭からはなれて我が家のさまもからりとあかるい。村落とてもないからとほくまでながめられる。江はすんで平らで岸もなく、幽靜な樹にはくれにあたつて花がたんとさいてゐる。また小さめに魚の兒がうかびだし、そよふく風につばくらがななめに飛びわたる。城中は十萬戸といふが、ここはただ人家が二三軒あるばかりである。

〔二〕

蜀天常夜雨。江檻已朝晴。

蜀天常に夜雨る、江檻已に朝晴なり。

葉潤林塘密。衣乾枕席清。葉潤ひて林塘密に、衣乾いて枕席清し。
不堪秖老病。何得尚浮名。堪へず秖老病なるに、何ぞ得む尚浮名あるを。
淺把涓涓酒。深憑送此生。淺く涓涓たる酒を把つて、深く憑りて此の生を送る。

【字解】〔一〕蜀天　蜀のそら、作者の居る成都地方の天をいふ。〔二〕江檻　即ち水檻。〔三〕密　樹木のしげりあふをいふならん。〔四〕衣乾　ながあめなればしめつた衣をきてをりしならん、いまそのかわけるをよろこぶなり。〔五〕淺把　すこしばかり手にする。〔六〕涓涓　すこしのさま。〔七〕深憑　この深くは心からいふ、憑はたよること。〔八〕送此生　くらすこと。

【詩意】蜀の天はいつも夜あめがふる、ところが我が水檻はけふは朝はれた。みると木の葉がしめつて、林やいけのあたりがしげりあひ、きものもかわいて枕席のあたりもさつぱりとしてゐる。自分はただ老病であるのさへたへきれぬ、どうして空虛な名譽などをもとめる必要があらうぞ。ただひとしづくばかりの酒を少し手にして、それに深くたよつてこの生涯を送つてゐるのだ。

江漲

江發蠻夷漲。山添雨雪流。江は發す蠻夷の漲、山は添ふ雨雪の流れ。
大聲吹地轉。高浪蹴天浮。大聲、地を吹いて轉じ、高浪、天を蹴つて浮ぶ。

魚鼈爲人得。蛟龍不自謀。魚鼈人に得らるるを爲す、蛟龍も自ら謀らず。
輕帆好去便。吾道付滄洲。輕帆好し去ること便なり、吾が道滄洲に付す。

【字解】〔一〕江漲　錦江のみなぎり。〔二〕江發　この江は發源地の江をさすなるべし、發とはそこからおしだすをいふ。〔三〕蠻夷漲　蠻夷の境に於ける漲なり。〔四〕山　江の通過する地方の山山をいふ。〔五〕雨雪流　雨水、雪とけの水のながれ。〔六〕吹地轉　風の如く地面を吹きながらうつりゆく。〔七〕蹴天　たかくうちあげるさま。〔八〕鼈　すつぽんの類。〔九〕爲人得　爲人所に得の略。〔一〇〕不自謀　自己の身の安全を謀るを得ざるをいふ。〔一一〕輕帆　はやく走る舟をいふ。〔一二〕吾道付滄洲　滄洲は海上の仙境なり、付は附託なり、吾道は自己のふみゆく道程をいふ、一句の意は前途は仙境に託せんといふなり。

【題義】錦江のみなぎりしことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】江の源からは蠻界の增水をみなおしだし來り、その通過する山山からはさらに雨水や雪どけの水の流れを添へてながす。だからすばらしい水聲が地面を吹いてうつりゆき、高い浪は天を蹴んばかりたかく浮ぶ。魚もすつぽんも人につかめられるし、蛟龍の樣な不思議なはたらきを有するものでも身の安全を謀ることができぬ。之について自分はおもふ、吾が前途は海上の神仙境に託さうと考へるので、輕帆をとばしてはやくそこへ去つた方が都合がよい、と。

涼氣曉蕭蕭。江雲亂眼飄。
風鳶藏近渚。雨燕集深條。
黃綺終辭漢。巢由不見堯。
草堂樽酒在。幸得過清朝。

【字解】【一】蕭蕭　しづかにさびしき貌。【二】風鳶　風に吹かるる「とび」。【三】近渚　そばのなぎさ。【四】雨燕　雨をうけたつばめ。【五】深條　しげみの小枝。【六】黃綺　漢の初に居た商山の四皓と稱する四人の老人の中の人、夏黃公と綺里季とをいふ。【七】巢由　巢父、許由なり、巢父は許由が堯から天下を讓られんとしたことをききて之をせむ。由乃ち清冷の水にいたりて其の耳を洗ひたりと。二人共に隱者なり。【八】草堂　浣花の草堂をさす、これは草堂を以て世外の境に比するなり。【九】清朝　さつぱりとしたあさ。

【題義】草堂の朝雨のをりのことをのぶ。上元二年の秋の作。

【詩意】あかつきにしづかにすすけがおこり、江の雲がめさきをみだりてとんでゐる。鳶は風をおそれてそばのなぎさにかくれ、燕は雨にぬれるをきらうて木深き小枝に集つてゐる。むかし夏黃公や綺里季はつまり漢に仕へず之を辭した、また巢父・許由の輩は堯といふ聖君を見ずに隱遁してゐた。自分も或はそんな人のなかまらしい。この草堂には酒樽があるによつて幸にその酒をのんでこのあしたをすごすことができるのである。

晩晴

村晚驚風度。庭幽過雨霑。
夕陽薰細草。江色映疎簾。
書亂誰能帙。杯乾自可添。
時聞有餘論。未怪老夫潛。

【字解】【一】驚風　つよき風。【二】度　渡に同じ。【三】過雨　とほりあめ。【四】帙　書衣なり、そのなかに收めるをいふ。【五】添　酒をつぎそへる。【六】時聞　聞とは自仙ともにきくなり。【七】餘論　潛夫の論をさす。【八】未怪　怪とは自仙ともに怪むなり。【九】老夫潛　老夫は作者自らさす、後漢の王符、隱居して書を著はし時世を諷す、之を「潛夫論」といふ、作者自ら王符に比するなり、」　宋尾の二句、仇氏之を解きて「時聞＝外人之論、未＝嘗怪＝此一潛夫一也」といへるは余之を取らず。仇說は論も怪も共に之を外人に屬せしめたるなり。

【題義】草堂の晩に晴れしことをのぶ、前詩「朝雨」とあれば殆ど同日の晩晴なるべきか。

【詩意】村がくれかけてはげしい風がやつてきた。さうして庭はしづかにとほりあめにうるほされた。夕日のてるところ細かなくさばななどがかをり、江水の碧がめあらなすだれにうつろふ。讀みさしの書物はみだれてゐるがだれがそれを帙のなかにとりかたづけてくれう、杯がのみほされればそれは自分の手でつぎそへる。このおやぢはひそんで隱居はしてゐるが時として時世を論ずることあるを聞

くであらう。してみればこのおやぢはひそんでゐるとしてもなにも不思議がるにはあたるまい。

高柟

柟樹色冥冥。江邊一蓋青。柟樹色冥冥たり、江邊一蓋青し。
近根開藥圃。接葉製茅亭。根に近く藥圃を開き、葉に接して茅亭を製す。
落景陰猶合。微風韻可聽。落景にも陰猶合し、微風にも韻聽く可し。
尋常絶醉困。臥此片時醒。尋常絶だ醉困するも、此に臥すれば片時に醒む。

【字解】【一】柟　楠なり、樹の名、草堂の傍にあり、杜詩屬。この樹に言及べり。【二】冥冥　くらつぼし。【三】一蓋　蓋は傘のかさ、樹形傘狀をなすなり。【四】藥圃　藥草のはたけ。【五】接葉　接は接近。【六】落景　夕日のひかり。【七】陰　樹のかげ【八】合　頷すといふの類なり。【九】韻　樹葉の風になるおと。【一〇】絶　甚。【一一】醉困　わるあひ。【一二】此　樹下をいふ。【一三】片時　しばらくのま。

【題義】草堂のそばの高い楠樹のことをよめり。上元二年の作。

【詩意】楠の樹がくらくしげつて、江邊に青く車の傘の樣な形をして立つてゐる。自分はその根もとにちかく藥草ばたけを設け、またその葉にくつつくばかりにかやぶきの亭をこしらへた。この樹は夕日のときにもかげがとざしあひ、そよふく風にも葉のおとがおもしろくきかれる。ふだん酒をのんで非常にわるあひしたときでも、この樹のところでねころぶとすぐにそれがさめてしまふ。

惡樹

獨遶虛齋徑。常持小斧柯。獨り遶る虛齋の徑、常に持す小斧柯。
幽陰成頗雜。惡木剪還多。幽陰成る頗る雜なり、惡木剪れば還多し。
枸杞因吾有。雞棲奈汝何。枸杞因つて吾が有とす、雞棲汝を奈何せむ。
方知不材者。生長漫婆娑。方に知る不材の者、生長するも漫に婆娑たるを。

【字解】【一】惡樹　わるい木。【二】虛齋　だれも居ぬ書齋。【三】徑　こみち。【四】斧柯　斧は「をの」、柯は斧の柄なり、斧柯にて「をの」をさす。【五】幽陰　ふかき樹のかげ。【六】雜　錯雜すること。【七】剪　きる。【八】枸杞　樹の名、千年をふれば根形狗に似る、之を食すれば身輕しと。【九】因　剪伐するによつて。【一〇】吾有　吾が所有とす。【一一】雞棲　樹名、一に皂莢樹といふとぞ、これは惡木なり。【一二】汝　雞棲樹をさす。【一三】不材　よい材木でないもの。【一四】婆娑　舞ふ貌。

【題義】庭中の惡木をきりはらふことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】ひとりで書齋のそばのこみちをめぐりながら、自分はいつも小さな斧を手にもつてゐる。だいぶさまざまなこかげができた。惡い木はきつてもきつてもなかなかきりつくせぬ。これでやつと枸

杞の木は自分のものになつたが、「雞棲」などいふやつはどうしたものだらう。これでみるとやくざな樹は生長してみたところで、いたづらにがさがさ風にうごかされてゐるだけのことである。

江畔獨步尋花七絶句　江畔獨り步して花を尋ぬ七絶句

江上被花惱不徹。　江上花に惱まされ徹せず、
無處告訴只顚狂。　告訴するに處無く只顚狂す。
走覓南隣愛酒伴。　去りて南隣愛酒の伴を覓むれば、
經旬出飲獨空床。　經旬出飲して獨り空床のみ。

【原注】解斯融吾酒徒

【題義】江のほとりをひとりあるいて花をたづねてつくつた詩。上元二年の作なるべし。

【詩意】自分は江べりで花になやまされきらず、もつとなやまされたいとおもうたが、そのことをだれにいふべきばしよもないのでただくるひまはつてゐる。それで走つて南鄰の酒のみなかま（解斯融）は居ぬかとさがしてみたところ、彼は十日あまりも飲みにでかけてゐてただあいたねだいばかりのこつてゐた。

【字解】〔一〕江畔　詩中の「江上」も同じ、錦江のほとりをいふ。〔二〕被惱不徹　なやまされきらぬ、甚しもつとなやまされたしといふことならん。〔三〕告訴　ものたらぬこころもちを仙人につげるなり。〔四〕顚狂　くるひまはる。〔五〕經旬　十日にわたりて。〔六〕出飲　よそへでかけてのむ。〔七〕空床　主人の居らぬねだい。

〔二〕

稠花亂蘂裹江濱。　稠花亂蘂、江濱を裹む、
行步攲危實怕春。　行步攲危、實に春を怕る。
詩酒尙堪驅使在。　詩酒尙驅使せらるるに堪へて在り、
未須料理白頭人。　未だ白頭の人を料理するを須ひず。

【字解】〔一〕稠花　多くの花。〔二〕亂蘂　みだれた花蕊。〔三〕裹　兩岸をかこむをいふ。〔四〕行步攲危　あるきつきがかたむき、あやふい。〔五〕怕春　あしもとのあぶないのも春のためなれば春をおそろしといふなり。〔六〕尙　春をおそれはするがそれでもなほ。〔七〕堪驅使　詩酒に驅使せらるることにたふるなり。〔八〕在　自己の身が存在すること、「在」の字の文法上の主辭は次句の「白頭人」なり。〔九〕料理　俗語なり、始末する、「かたづけてしまふ」などの義、ここは生命を終了せしめる意に用ひたり。〔一〇〕白頭人　自己をさしていふ。

【詩意】多くの花、みだれた花蕊が江のほとりをつつみかこんでゐる、それをながめあるく自分の足つきはちどりあしのあぶなげであつて春をおそろしいものとおもふ、しかしながらそれでもまだ自分は詩や酒におひつかはれるには十分で存在してをるのである、まだこのしらがのおやぢをくたばらせてしまふ必要はないぞ。

〔三〕

江深竹静兩三家。
多事紅花映白花。
報答春光知有處。
應須美酒送生涯。

江深く竹静なり兩三家、
多事なり紅花、白花に映ず。
春光に報答するは知んぬ處有るを、
應に須らく美酒、生涯を送るべし。

【字解】〔一〕多事　よけいなこと、おせつかい、などの義。〔二〕報答春光知有處　吾知レ有レ處ニ於報答ニ春光ニ　この義、報答はあいさつすること、春光ははるげしき、處はばしよのことなれどもここは手だてない。

【詩意】このあたりは江水ふかく竹林しづかにして二三軒の家があるばかりだ。それにくれなゐの花が白い花にうつろうたりしてゐるのはなんといふよけいなことだ。この春げしきにあいさつするには自分はその手だてを心得てをる。それは外ではない、うまい酒をのんでこの生涯を送ることである。

〔四〕

東望少城花滿煙。
百花高樓更可憐。
誰能載酒開金盞。
喚取佳人舞繡筵。

〔四〕

東少城を望めば花滿煙なり、
百花の高樓更に憐む可し。
誰か能く酒を載せて金盞を開き、
佳人を喚取して繡筵に舞はしめむ。

【字解】〔一〕少城　小城なり、即ち成都の西南の城にして錦官城。〔二〕花滿煙　煙が花にみつるをいふ、花に「滿てる煙」あるをいふ。〔三〕百花高樓　百花のなかにある高樓、城内にあるそれをいふ。〔四〕載酒　酒を車にのせてはこびこむ。〔五〕金盞　黄金でかざつたさかづき。〔六〕佳人　美人。〔七〕繡筵　ぬひをしたむしろ、家二句は城内富貴の人に乗むなり。

【詩意】自分の家から東のかた少城をながめると花にいつぱい煙がみちてゐる。その百花のなかの高樓こそいかにけしきがよからうかとうらやましくおもはれるのである。だれが自分のためにそこへ滿載した酒をもつてきて金の盃を開き、美人をよんでそのうつくしいむしろで舞をさせて見せてくれるであらうぞ。（そんなひとがほしいの義。）

〔五〕

黄師塔前江水東。
春光懶困倚微風。
桃花一簇開無主。
可愛深紅愛淺紅。

〔五〕

黄師が塔前、江水の東、
春光懶困、微風に倚る。
桃花一簇開いて主無し、
深紅を愛す可きや淺紅を愛すべきや。

【字解】〔一〕黄師塔　塔に同じ、黄師塔とは黄姓の法師の墓なり。〔二〕懶困　だるいこと。〔三〕一簇　ひとむらがり。〔四〕無主　野生にして所有者なきをいふ。〔五〕愛淺紅　「愛」のうへに「可」の字をたしてみるべし。

【詩意】黄法師の墓の前、江水の東の方、そこでははるげしきにうたれてからだもだるくなりそよふく風によつてひとやすみする。みると桃の花がひとかたまりあるじもなくかつてに咲いてゐる。その花の紅色はこいのが愛すべきかうすいのが愛すべきか、いづれもとりどりにうつくしくさいてゐる。

〔六〕

黃四娘家花滿蹊。
千朶萬朶壓枝低。
留連戲蝶時時舞。
自在嬌鶯恰恰啼。

【詩意】黃四娘が家では花がこみちにさきみちてゐる。千朶も萬朶も枝をおしつける樣にさいてゐる。そこを去ることを知らず居つづけてゐる所の戲れてゐる蝶も時時には舞ひだし、ふしおもしろく自由にうたふあいらしい鶯はほうほうとなきたててゐる。

〔六〕

黃四娘が家、花蹊に滿つ、
千朶萬朶枝を壓して低る。
留連せる戲蝶は時時舞ひ、
自在の嬌鶯は恰恰として啼く。

【字解】〔一〕黃四娘　村婆の名　〔二〕蹊　こみち。〔三〕朶　はなのついたえだ。〔四〕留連　そこにつづけて居る。〔五〕自在　歌喉の自由なるをいふならん。〔六〕恰恰　こゑのさまなるべし。

〔七〕

不是愛花卽欲死。
只恐花盡老相催。
繁枝容易紛紛落。
嫩葉商量細細開。

〔七〕

是れ花を愛するならずんば卽ち死せむと欲す、
只恐る花盡きて老相催さむことを。
繁枝は容易に紛紛として落つ、
嫩葉は商量して細細に開け。

【字解】〔一〕不是愛花卽欲死　花を愛することができるからこそいきてゐるのだ、さもなければ死んだ方がましだとおもふ。いひかふれば自分はいのちがけで花を愛してゐるのだといふなり。〔二〕老相催　老いがせまつてくる。〔三〕繁枝　花のたくさんさいてゐるえだ。〔四〕紛紛　みだるる樣。〔五〕嫩葉　わかいくわすゑ。〔六〕商量　他と相談すること、ひとりぎめにせずにの意。〔七〕細細　すこしづつ。

【詩意】自分はいのちがけで花を愛してゐるのだ。ただきづかはれるのは花が無くなつて老が身にせまつてくることだ。たんと花のついてゐる枝は紛紛と落ちるのは已むを得ぬが、わかい花ずゐはかつてにさかずにかんがへてすこしづつさいたがよからうとおもふ。

進艇　艇に進む

南京久客耕南畝。
北望傷神坐北牕。
晝引老妻乘小艇。
晴看稚子浴清江。
俱飛蛺蝶元相逐。
竝蔕芙蓉本自雙。
茗飲蔗漿攜所有。

南京の久客、南畝に耕す、
北望傷神、北牕に坐す。
晝は老妻を引いて小艇に乘じ、
晴れては看る稚子の清江に浴するを。
俱に飛ぶ蛺蝶元相逐ふ、
竝蔕の芙蓉本自ら雙ぶ。
茗飲蔗漿、有る所を攜ふ、

【字解】〔一〕進艇　艇はほそながき舟、進とはこちらが舟のなかへはひること。〔二〕南京　成都をいふ。〔三〕久客　ながくゐる他鄕人自己をさす。〔四〕南畝　うれを南向きにせしはたけ。〔五〕北望　北方は長安洛陽の在る方位にして作者の故鄕の在る所。〔六〕相逐　おひつおはれつ。〔七〕竝蔕　蔕は蔕なり、「へた」、花のなりぶしをいふ、

奚覺(一二)無謝(一三)玉爲缸(一四)。　奚覺も玉を缸と爲すに謝する無し。

のはな、蛺蝶は晴に子供を比し、芙蓉は晴に自家夫妻を比す。【九】 著飲　おちや。【一〇】 藍漿　さたうきびのしる、所有　ありあはせのもの。【一一】 奚覺　すえものかめ。【一二】 無謝　不レ讓の意。【一三】 缸　「もたひ」、「かめ」の類。

【題義】 妻と小舟にのりしことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】 南京たる成都にながくたびびとの身となつてゐる自分は南畝に耕してをり、北方故郷の方がしたはしさにそちらをながめて心をいためながら北の方のまどにすわつてゐる。晝はとしとつた妻をみちびいてこぶねにのり、晴れたそらのもとでこどもらがすんだ水の江でゆあみしてゐるのをながめる。ともどもに飛ぶ胡蝶はもとよりおひつおはれつしてをり、「へた」をならべた二つのはすの花は本來一對をなしてゐる。（我我家族もその蝶やはすに似てゐる。）舟のなかへはお茶でも砂糖のしるでもあるにまかせてもつてゆく。それを盛つたすえもののかめは富貴の家の玉のもたひにくらべてもひけをとらぬものである。（貧賤にして一家まどゐのたのしみあるは富貴の家にまさるをいふ。）

一室

一室他鄉遠。空林暮景懸。　一室、他鄉に遠し、空林、暮景懸る。

正愁聞塞笛。獨立見江船。　正に愁へて塞笛を聞く、獨立して江船を見る。

巴蜀來多病。荆蠻去幾年。　巴蜀に來つて多病なり、荆蠻に去るは幾年ぞ。

應同王粲宅。留井峴山前。　應に王粲が宅の、井を峴山の前に留むるに同じくするなるべし。

【字解】 【一】 一室　全家をいふ。【二】 他鄉遠　遠し不完全なる句なり、他鄉に寓して故郷と遠さをいふ。【三】 空林　さびしき林、草堂の林をいふ。【四】 暮景　夕日。【五】 塞笛　とりでの番兵のならすふえ。【六】 見江船　荆州へゆかんことをおもふにより。【七】 巴蜀　蜀をいふ、巴はつけていへるのみ。【八】 荆蠻　荆州府江陵縣の地方、作者峽を下りてそこに赴かんとの志ありしなり。【九】 去　ゆくこと。【一〇】 幾年　何年といふにおなじ。【一一】 王粲宅　魏の王粲、漢末の亂を避けて南方にゆく、湖北省襄陽縣西二十里峴山坡下に粲が宅あり、宅前に井あり、人之を伸宣井（伸宣は粲があざな）といふとぞ。【一二】 留井峴山　上にみゆ。

【題義】 全家蜀を去りて荆州にゆかんとの意をのぶ。上元二年の作なるべし。

【詩意】 一家他鄉にありて故郷と遠くへだたり、さびしい林に夕日がかかつてゐる。このとき自分はちやうど心配しながら番兵の吹きならす笛の音をきき、ひとりで立ちながら江をくだる船をみてをる。自分はここへきてから病氣がちである、いつになつたら荆州の方へゆけるのであらう。むかし王粲は襄陽に寓居してその井がのちまで峴山の前にのこつてゐるといふが、自分が荆州に寓居したら、それと同じやうなことになるのであらう。

所思

苦憶荆州醉司馬。
【原注】崔吏部漪
謫官樽酒定常開。
九江日落醒何處。
一柱觀頭眠幾回。
可憐懐抱向人盡。
欲問平安無使來。
故憑錦水將雙淚。
好過瞿唐灩澦堆。

【字解】【一】所思　心中に思ふ所の人のことをいふ。【二】醉司馬　原注によれば吏部の某官たりし崔漪なり、漪は平涼節度使杜鴻漸が判官としてかつて肅宗の中興につきはかる所ありしといふ、のち吏部に用ひられてさらに荆州へ司馬としてながされしとみゆ。醉とは酒すきにていつもゑひてあるをいふ。【三】謫官　つみせられながされた官吏として。【四】九江　洞庭のことなりと、洞庭には沅漸元辰敍酉澧資湘の九水が合すといふ、今の江西省の九江にてはすといふ、今の江西省の九江にてはなし。【五】一柱觀　松敍縣の東、丘家湖の中にありといふ、むかし宋の臨川王劉義慶、荆州の長官たりしとき羅公洲に大なる觀（てら）を立ててただ一本の柱を用ひしといふ、荆州の名所をあげしなり。【六】懷抱　作者のむねのうち、こころ。【七】人　司馬をさすならん、（或は曰く向人とは他人にむかつて嶺の消息をとふなりと。）【八】錦水　即ち錦江。【九】將　もちゆかしむること。【一〇】雙淚　左右の眼からでるなみだ。【一一】瞿唐灩澦堆　瞿唐は峽の名、四川省夔州府にあり、その峽口に灩澦石あり、堆は即ち石なり、その石が水量を示す標準となる、灩澦如レ馬、瞿唐英レ下、灩澦如レ象、瞿唐英レ上の語あり。

【題義】心中思ふ所の人あるをいふ。上元二年の作。

【詩意】自分は荆州の醉ぱらひの崔司馬のことを非常におもふのである。彼はながしものにされて、そこではきまつていつも樽の酒をひらいてゐることだらう。洞庭に日の落つるとき彼はどこに醉をさましたか。一柱觀などで彼はなんべん醉うてねむつたか。自分のこころもちはかくすところなくすつかり彼に向つてはきだしてをる。かほどしたしいのだが、彼の平安であるや否やを問ひたくおもふのに彼の方からは使がこぬのである。しかたがないから自分は意を用ひてこの錦江の水によつて我が兩眼の涙をもつていつてもらはうとおもふ、どうかこの水が無事に瞿唐峽灩澦堆の難場所をとほつてくれる樣にいのる。

聞斛斯六官未歸

故人南郡去。去索作碑錢。
本賣文爲活。翻令室倒懸。
荆扉深蔓草。土銼冷疎煙。

斛斯六官未だ歸らずと聞く

故人、南郡に去り、去つて索む作碑の錢。
本文を賣りて活を爲す、翻つて室をして倒に懸らしむ。
荆扉、蔓草深く、土銼、疎煙冷なり。

老罷休無賴。歸來省醉眠。

【字解】〔一〕 斛斯六官　斛斯六は前に「南鄭愛酒伴」とありし融かといへり、六は排行、官は官人の義にて、當時俗に人をかくよぶ習はしありしか。〔二〕 故人　しりびと。〔三〕 南郡　江陵府。〔四〕 索　もとむ。〔五〕 作碑錢　碑文を作つたためにお禮としてもらふぜに。〔六〕 賣文　碑文をかいて錢を受くるは文を賣るなり。〔七〕 室倒懸　倒懸は人をさかさまにつるすこと、苦甚だし、室は家室、これ一家生計の苦痛をいふ。〔八〕 荆扉　いばらであんだとびら、斛斯が家のさま。〔九〕 土鉛　鉛は瓦鍋（どなべ）なりといふ。〔一〇〕 老罷　老いて百事をやむること。〔一一〕 無餘　あてにならぬこと、錢を得ては家をよそに酒をのみあるくは倚賴すべからざる人物なり。〔一二〕 省　省減。〔一三〕 醉眠　ふふことをいふ。

【題義】 斛斯六といふ人のところをたづねたところ、まだ家へもどらぬといふことだ。それにつけてつくつた詩。上元二年の作。

【詩意】 わがしりびとである君は南郡の方へでかけた。それは碑文を作る禮金を得るためだとのことだ。文を賣つてくらしを立てるのが本來の目的であるのに、かへつて一家をして倒懸の苦しみにおちいらしめてをる。卽ち自分がきてみるといばらの扉のそばには草がふかくはびこり、土鍋にはうすい煙が冷によこたはつてゐる、（ごはんもめつたにたかぬらしい）。君の樣に年とつて萬事をやむべき年齡ではあまり放埒なことをすることをやめて、家へかへつてきてゐひねをすることをはぶく樣にした方がよいとおもふのである。

赴青城縣出成都寄陶王二少尹

青城縣に赴くとき成都を出で陶・王の二少尹に寄す

老被樊籠役。貧嗟出入勞。
客情投異縣。詩態憶吾曹。
東郭滄江合。西山白雪高。
文章差底病。回首興滔滔。

老、樊籠に役せらる、貧にして出入に勞するを嗟す。
客情、異縣に投ず、詩態吾が曹を憶ふ。
東郭、滄江合す、西山、白雪高し。
文章底の病をか差さむ、首を回して興滔滔たり。

【字解】〔一〕 青城縣　青城山あるにより取て縣の名とす、唐にては蜀州に屬せり、成都より西、灌縣の南にあり。〔二〕 陶王二人の姓。〔三〕 少尹　尹の下役、成都は南京となりし故に尹をおく。〔四〕 樊籠　かき、かご、人事の拘束をたとへていふ。〔五〕 出入　家門より出入りする。〔六〕 客情　たびごころ。〔七〕 異縣　青城をさす。〔八〕 詩態　詩のさまについて。〔九〕 吾曹　わがともがら、陶・王をさす。〔一〇〕 東郭　蜀州（今、崇寧州）の東のくるわ、そこには二水合流す、浦氏の說に成都より西に向ひてゆくゆゑ成都をさして東郭といふといへり、今從はず。〔一一〕 滄江　ひろいかは。〔一二〕 西山　卽ち雪嶺。〔一三〕 差　癒す。〔一四〕 底病　何病なり、朱注に差底病を差ヲ底ノ病ヲとよませ、如何なる缺點に於てまちがつてゐるか、とときたり、今從はず。〔一五〕 回首成都の方をむきかへる。〔一六〕 興　詩興なり。〔一七〕 滔滔　水の盛にながるるさま、詩興のわくさまをたとふ。

【題義】 青城縣に赴かうとして成都から出てから、陶・王の二人の少尹に寄せた詩。蓋し生活に逐はれてでかけしなり。上元二年の作。

【詩意】自分は年とつて人事のためにおひつかはれ、貧乏なために家から出たりはひつたりといふなんぎをせねばならぬことをなげかはしくおもふ。いまたびのこころもちをいだいて他縣に身を投じようとするにあたつて、詩のすがたのことについて諸君のことをおもふのである。今ここの東郭ではひろい江が二すぢ合流して、西山は白雪をいただいて高くそびえてみえる。文章といふものはそれでどんな病氣がなほせるか、文章でなほせる病氣はないが、(蓋し貧乏も其の一ならん)諸君の方をふりかへりながら詩興が滔滔とわきおこるのをおぼゆる。

野望因過常少仙

野橋齊渡馬。秋望轉悠哉。
竹覆青城合。江從灌口來。
入村樵徑引。嘗果栗皺開。
落盡高天日。幽人未遣回。

野望因つて常少仙に過る

野橋齊しく馬を渡す、秋望轉た悠なる哉。
竹は青城を覆ひて合し、江は灌口從り來る。
村に入れば樵徑引く、果を嘗めて栗皺開く。
落ち盡くす高天の日、幽人未だ回らしめず。

【字解】(一)野望　のちにてながめる。(二)因　そのついでに。(三)常少仙　常微君のことならん、常は縣の尉にして任に在ちざるものならん。顧尉の歌稱な少府といひ、また眞の梅福、尉となり神仙となりしより之を仙尉といふにより、少府仙尉を略して少仙といへるか。(四)灌口　山の名、彭州(今、彭縣)の導江縣の西北にあり。(五)村　常少仙の居地。(六)引　こちらを手びきする。(七)果　くだもの。(八)栗皺　皺は「しわ」或は皺に作るべしといへり、皺は皮のひびなり、いづれにしても栗の皮をいふ、これは常少仙のもてなすもの。(九)高天　あきのそらはたかし。(一〇)幽人　幽靜なすまひをしてゐる人、卽ち主人常少仙。

【題義】野らでけしきを見ながら、ついでに常少仙のところへたちよつたことをのぶ。上元二年秋、青城にての作。

【詩意】野川の橋でふたりでそろうて馬をわたす、あきのながめはいよいよはるけくみゆる。竹は青城の方をおほうてとざし、江の水は灌口の方から流れてくる。村にはひるにきこりのこみちにみちびかれてひとりでに常君の宅へつく、そこでは常君がもてなしてくれる栗の實をたべてその皮をむく。そらの日は落ちてまつたく日がくれてしまつたが、わびずまひをしてゐる主人はまだ自分をかへしてはくれぬ。

丈人山

自爲青城客。不唾青城地。
爲愛丈人山。丹梯近幽意。

丈人山

青城の客と爲りしより、青城の地に唾せず。
丈人山の、丹梯幽意に近きを愛するが爲なり。

丈人祠西佳氣濃。

丈人祠西、佳氣濃なり。

緣雲擬住最高峰。
掃除白髮黃精在。
君看他時冰雪容。』

雲に緣り住せむと擬す最高峰。
白髮を掃除するには黃精在り、
君看よ他時冰雪の容を。』

【字解】【一】丈人山　青城縣西北三十二里にあり。「玉匱經」と稱する道教の書によれば、黃帝、五岳を遍歷して青城山を封じて五岳丈人となし、第五大洞寶仙九室之天となせしといふ。【二】不唾　佛典「智度論」に不レ唾二骨地一の語ありといふ、作者佛典の事を道教の地に用ひしなり、唾せざるは之を尊敬するなり。【三】丹梯　あかきはしご、山崖をいふ。【四】幽意　幽靜のこころもち。【五】丈人祠　山神を祭りし祠なるべし。【六】佳氣　山のよき氣。【七】緣雲　高きをいふ。【八】掃除　はらひのぞく。【九】黃精　藥草の名。【一〇】君　一般人をさす。【一一】他時　後日をいふ。【一二】冰雪容　氷雪ははだの白くうつくしきさまなり、「莊子」に藐姑射之山、有二神人一焉、肌膚若二氷雪一、綽約若二處子一」とみゆ。

【題義】青城縣の丈人山のことをのぶ。上元二年の作。

【詩意】自分は青城に寓居の身となつてから青城の地には唾を吐かぬ。それはここに丈人山があつてその山崖は幽靜のこころもちをうるに近いものがあるからだ。』山神の祠の西の方は山の氣がことに濃にうつくしい。だから自分は雲によつていちばんたかい峰に住まふかとまちかまへてゐる。しらがをとりのぞいてわかがへるには黃精といふ藥草もある。諸君よ、どうぞ後日自分が仙人のやうな氷雪にも似た容貌となるのを看てくれたまへ。』

寄杜位

杜位に寄す

近聞寬法離新州。
想見歸懷尙百憂。
逐客雖皆萬里去。
悲君已是十年流。
干戈況復塵隨眼。
鬢髮還應雪滿頭。
玉壘題書心緒亂。
何時更得曲江遊。

近聞く寬法、新州を離るると、
想ひ見る歸懷尙百憂なるを。
逐客皆萬里に去ると雖も、
悲む君が已に是れ十年流さるるを。
干戈況んや復塵、眼に隨ふ、
鬢髮還應に雪、頭に滿つるなるべし。
玉壘、書に題すれば心緒亂る、
何の時か更に曲江に遊ぶことを得む。

【眼注】位京中宅近西曲江

【字解】【一】杜位　作者前に位宅守レ歲詩あり、位は李林甫が壻なり、林甫は天寶十一歲十一月に卒したれば位の貶官は必ず十二載に在り、十二載より上元二年までは九年なるも詩には十年といひ成數をあげたり、位このとき新州より江陵に移されしなり。【二】寬法　法をゆるやかにする、刑罰をゆるめられしをいふ。【三】新州　唐には嶺南道に屬す、廣東地方なり。【四】歸懷　北にかへるこころ。【五】逐客　中央から放逐された人。【六】十年流　上にみゆ、實は九年なり、流は流謫。【七】塵隨眼　みるところみな塵埃。【八】玉壘　山の名、灌縣西北二十九里にあり、灌縣は乃ち唐の導江・青城の二縣の地。【九】題書　手紙にうはがきをかく。【一〇】曲江　長安にあり、位が宅の西の近いところに曲江あり。

【題義】杜位が新州から江陵へ移されしについて寄せたる詩。上元二年青城にての作。

【詩意】ちかごろきくと君は刑罰をゆるくされて新州を離れたさうだ。自分は君の北歸のこころはそれでもまたさまざまの心配をもつてゐるだらうと想像するのだ。苟くも中央から放逐されたものは皆萬里の遠くへいつたのではあるが、君はこれではや十年も流されてゐるといふは悲むべきである。まして干戈起つてみるところどこも塵埃であり、君が鬢髪はこれまたかしらに雪をいただいてゐることであらう。この玉壘山の在る土地で君にやる手紙のうはがきをかくと心のいとがみだれる。いつ、もいちど君が宅のそばの曲江であそぶことができるであらうか。

送裴五赴東川

裴五が東川に赴くを送る

故人亦流落。高義動乾坤。

故人亦流落す、高義、乾坤を動かす。

何日通燕塞。相看老蜀門。

何の日か燕塞に通せむ、相看て蜀門に老ゆ。

東行應暫別。北望苦銷魂。

東行應に暫く別るるなるべし、北望苦だ魂を銷せしむ。

凜凜悲秋意。非君誰與論。

凜凜秋を悲むの意、君に非ずんば誰と與にか論せむ。

【字解】【一】裴五　其名は詳ならず。【二】東川　蜀の東部、瀘川の地方。【三】故人　裴をさす。【四】高義動乾坤　襲は必ず時世を濟ふの志を抱く、故にかくいふ。【五】通燕塞　燕は范陽の地、祿山の起りし地、時に史朝義未だ平がず、故に道路通ぜず、塞は「とりで」。【六】蜀門　蜀をいふ。【七】北望　故郷の方をのぞむ。【八】凜凜　ぴりつとするさま。【九】悲秋　志士は秋にあたりてことに之を悲む。

【題義】裴某が東川の地方に赴くを送る詩。上元二年成都にての作。

【詩意】君の高義は天地をも動かすものであるが、わが舊知の人である君もまたここにおちぶれてゐるか。おたがひかかる蜀の地で年を經てをるが、いつになつたら燕の地のとりでの方へ道路が通じうるのであらう。君が東に行くのはすこしの別れだとおもふが、北の方をながめては自分はいたくこころをいためるのである。この、秋を悲しむきびしいこころもちは、君でなければかたりあふことはできぬ。

送韓十四江東省覲

韓十四が江東に省覲するを送る

兵戈不見老萊衣。

兵戈には見ず老萊が衣、

嘆息人間萬事非。

嘆息す人間萬事非なるを。

我已無家尋弟妹。

我已に家の弟妹を尋ぬべき無し、

君今何處訪庭闈。

君今何の處にか庭闈を訪ふ。

黄牛峽靜灘聲轉。

黄牛峽靜にして灘聲轉じ、

【字解】【一】韓十四　其名詳ならず。【二】江東　今の江寧の地方。【三】省覲　兩親におめみえにゆく。【四】兵戈　兵亂をいふ。【五】老萊衣　むかし楚の老萊子、親につかへて孝行あり、年七十にして身に五

白馬江寒樹影稀。
此別應須各努力。
故郷猶恐未同歸。

白馬江寒くして樹影稀なり。
此の別應に須らく各〻努力すべし、
故郷猶恐る未だ同歸せざらむ。

九里にあり、高崖の間に石あり、人の刀を負ひて牛を牽くがごとし、人は黒く牛は黄なり、行く者爲つて曰く、朝發二黄牛一暮宿二黄牛一と、蓋し水路回轉するをいふなり。【八】白馬江　崇慶州東北十里にあり、仇氏は此詩を成都の作に入れたるも此句によれば蜀州にての作ならん、崇慶州は唐の蜀州なり、白馬江は手近の水をあげ、黄牛峽は前程の峽をあげたるなり。【九】努力　自愛すること。【一〇】故郷　蓋し洛陽をさす、韓も亦洛陽の人なり。【一一】同歸　韓とおなじくかへる。

【題義】同郷の人韓某がその親を江東の方へ見舞にゆくを送る詩。上元二年蜀州にての作ならん。

【詩意】世が世ならば老いて五彩の衣をつけて其の親に孝行をなす老萊子のごときものを見るべきであるが、いまは兵亂のためにそれを見ることができぬ。なげかはしくも人間萬事ことごとく非である。わたしは弟や妹を尋ぬべき家をうしなつてゐる。君は御家庭をいづれの地に訪問されようとするのであるか。君がゆくときこの白馬の江水は寒うして樹のかげもしだいにみえなくなり、更に進めば黄牛峽の谷あひしづかに灘聲しだいにうつりゆくことであらう。このたびのわかれはおたがひにからだを大切にすべきである、なんとなれば我我はまだ故郷に一緒にかへれるといふ見込みもないのであるから。

彩の衣をつけて嬰兒のまねして親の側に戯れて其の歓を求むと。【六】庭闈　闈は奥むきの小門、庭闈は親のござる所をいふ。【七】黄牛峽　峽の名、夷陵州（今湖北宜昌）の西

枏樹爲風雨所拔歎　枏樹風雨の拔く所と爲るの歎き

倚江枏樹草堂前。
古老相傳二百年。
誅茅卜居總爲此。
五月髣髴聞寒蟬。
東南飄風動地至。
江翻石走流雲氣。
幹排雷雨猶力爭。
根斷泉源豈天意。
滄波老樹性所愛。
浦上童童一青蓋。
野客頻留懼雪霜。
行人不過聽竽籟。

江に倚る枏樹、草堂の前、
古老相傳ふ二百年と。
茅を誅し居を卜するは總て此れが爲なり、
五月髣髴、寒蟬を聞く。
東南飄風、地を動かして至る。
江翻へり石走りて雲氣流る。
幹雷雨を排して猶力爭す、
根泉源に斷ゆ豈に天意ならむや。
滄波老樹、性の愛する所、
浦上童童たり一青蓋。
野客頻に留まりて雪霜を懼る、
行人過ぎず竽籟を聽く。

【字解】【一】枏樹　前に「高枏」の詩あり、同じ樹なり。【二】草堂　浣花溪の草堂。【三】誅茅　かやをきる、屋根をふくため。【四】爲此　此は樹をさす。【五】髣髴　さもにたり。【六】寒蟬　ひぐらし、樹葉の鳴るおとをたとへていふ。【七】力爭　ぬかれまじと骨をりてあらそふ。【八】斷泉源　大地のそこの水のあるところと絶がきれる。【九】豈天意　不自然なるの極をいふ。【一〇】滄波老樹　錦江の波とこの老枏樹と。【一一】童童　こもれる貌ならん。【一二】青蓋　蓋は車蓋、からかさ。【一三】懼雪霜　雪霜をおそるるもの、之を樹陰に避く。【一四】不過　ゆきすぎず、たちとまるをいふ。【一五】竽籟　竽は笙の

(一六)虎倒龍顛委榛棘。(一七)(一八)
淚痕血點垂胸臆。(一九)
我有新詩何處吟。
草堂自此無顏色。

虎倒龍顛、榛棘に委す、
淚痕血點して胸臆に垂る。
我新詩有るも何の處にか吟ぜむ、
草堂此より顏色無からむ。

【題意】風雨のために楠樹がぬかれたについての歎きをのぶ。上元二年成都の作。

【詩意】草堂の前に江に倚つて楠樹がある、古老のいひつたふる所では二百年からたつた樹だといふ。自分が茅をきり住居をトしたのはすべて此の樹あるがためである、樹葉の鳴るさまは五月にあたつてはやひぐらしをきくかのおもむきがある。」　ところへ東南から吹きまく風が大地をうごかしてやつてきて、江水はひるがへり、石はとばされ雲氣ははしる、樹の幹は雷雨をおしのけて拔けまいとあらそふ、けれどもつひに根は地のそこと緣がきれた、これはよもや天のおぼしめしではなからう、偶然の不幸である。」　江のうらべにこんもりとそびえた一の青い傘。その波と樹とは自分のたいへん愛するものであつた。自分ばかりでなく野人も雪や霜をおそれてはしきりにこの樹の下へとどまり、みちゆく人もとほりすぎずにたちとまつて笙の音のやうなこゑをきいたものである。」　いまやそれが龍虎がたぐひ、竿鎭はそのおと、樹葉みたとふ。【一六】虎倒龍顛　虎の如く倒れ龍のごとくひつくりかへる、樹のぬけた形容。【一七】委　ゆだね、れてゐること。【一八】榛棘　はり、からたち。【一九】血點　血は淚の血、樹の拔けしを悲むため。

ぶつたふれた樣に榛棘のあひだにねてゐる、それをみると自分はなみだのあとが血のやうにぽとぽとむねのところに垂れおちる、この樹が無くなつてはわが草堂も全く顏色をなくしたものであつて、これからは新しい詩ができてもどこでそれを吟じたものだらう。吟ずる場所がない。」

茅屋爲秋風所破歌

(一)茅屋、秋風の破る所と爲る歌

八月秋高風怒號。
卷我屋上三重茅。(二)
茅飛渡江(三)灑江郊。(四)
高者挂罥(五)長林梢。(六)
下者飄轉沈塘坳。(七)
南村群童欺(八)我老
無力。
忍能對面爲盜賊。(九)(一〇)

八月秋高くして風怒號す、
我が屋上三重の茅を卷く。
茅飛びて江を渡り江郊に灑ぐ、
高き者は挂罥す長林の梢、
下き者は飄轉して塘坳に沈む。」
南村の群童我が老いて力無きを欺り、
忍んで能く對面に盜賊を爲す。

【字解】【一】茅屋　草堂の茅屋　【二】三重茅　三重にふきたるかや。【三】江　錦江。【四】灑　あめのそそぐやうにふりそそぐ。【五】挂罥　かかる。【六】長林梢　たかい木の林のこずゑ。【七】塘坳　いけのくぼみ。【八】欺　あなどる、俗語なり。【九】忍　むごく。【一〇】對面　めんとむかつて。【一一】脣焦口燥　くちびるこげ、口かわく、のどなからしてさけぶこと。【一二】呼不得　もはやさけべぬ。【一三】俄頃　し

公然抱茅入竹去。
脣焦口燥呼不得。
歸來倚杖自嘆息。
俄頃風定雲墨色。
秋天漠漠向昏黑。
布衾多年冷似鐵。
嬌兒惡臥踏裏裂。
牀頭屋漏無乾處。
雨脚如麻未斷絶。
自經喪亂少睡眠。
長夜沾濕何由徹。
安得廣厦千萬間。
大庇天下寒士俱
歡顏。
風雨不動安如山。
嗚呼何時眼前突
兀見此屋。
吾廬獨破受凍死
亦足。

公然茅を抱きて竹に入り去る、
脣焦げ口燥き呼び得ず、
歸來杖に倚つて自ら嘆息す。
俄頃風定まりて雲墨色、
秋天漠漠、昏黑に向ふ。
布衾多年、冷、鐵に似たり、
嬌兒惡臥、踏裏に裂く。
牀頭、屋漏れて乾ける處無し、
雨脚麻の如く未だ斷絶せず。
喪亂を經し自り睡眠少し、
長夜沾濕、何に由りてか徹せむ。
安得廣厦千萬間、
大に天下の寒士を庇ひて俱に歡顏、
風雨にも動かず安きこと山の如くならむ。
嗚乎何の時か眼前突兀此の屋を見む。
吾が廬獨り破れて凍死を受くるも亦足れり。

【語釈】草堂のかやぶきの屋根があきかせにうちこはされたことをのべた詩。上元二年秋の作。

【詩意】八月秋のそらたかく風が怒りほえ、草堂のやねの三重ぶきの茅を吹きまくつた。かやは江をとびわたつて江ぞひののはらに雨のやうにふりそそぐ。その高いものは高い林のこずゑにひつかかり、ひくきものはひるがへりころがつていけのくぼみに沈む。南の村のこどもらは自分が年よつて力の無いのをばかにして、むごくも面とむかつてどろぼうをはたらき、公然と茅をだいて竹林のなかへにげいる。こちらはいくらさけんでもくちびるはこげ、口はかわいて、もはやさけぶことはできぬ。それでしかたなくなくまたもどつてきて杖に倚つてためいきつくばかりである。やがて風はしづまり、雲はすみ色となり、秋の天いつたいにくれがたになりかけた。自分は布のかいまきをもつてをるがな

ばらくして。【一二】墨色　くろきこと。【一三】漠漠　ひろきこと。【一四】昏黑　たそがれのくらさ。【一五】布衾　ぬののかいまき。【一六】嬌兒　嬌或は驕につくる、驕兒はやんちやのこども。【一七】惡臥　れぎやうぎわしきこと。【一八】踏裏　ふみつけるあひだにひきさく。【一九】牀　れだい。【二〇】屋漏　やれがもる。【二一】喪亂　人の死すること、世のみだるること。【二二】長夜　よなが。【二三】沾濕　うるほふ。【二四】徹　長夜へかかる辭、徹は通なり、徹=長夜=とは夜をひとばんとほしてすごすこと。【二五】安得　希望の辭、安如山までかかる。【二六】廣厦　ひろき大屋根。【二七】千萬間　千間萬間のひろさ、間とは柱と柱とのあひだをいふ。【二八】庇　おほふ。【二九】寒士　凍寒にあうてなろ貧乏もの。【三〇】突兀　たかくそびゆる貌。【三一】此屋　千萬間の廣厦をさす。

がねんそれをつかつてゐるので鐵の樣につめたい。そのうへあばれもののこどもがねぎやうぎわるくそれを踏んでひきさいてしまつた。ねだいのほとりはやねがもつてかわいたところもない、それに雨あしは麻のやうにふりしきつてたえまもない。喪亂以來自分はねむることがすくないのであるがこんなしめりをうけてはこのながよをどうしてとほしてすごすことができようか。』　どうしたら千萬間もあるひろいやねの家を得て、天下の貧乏ものをそれでおほひ、みんながうれしいかほをしてゐることができ、いくら風雨があつても安泰なることと山のやうにあることができるであらう。ああいつ眼前にたかくこの樣ないへを見ることができるであらう。それを見ることができさへしたら、自分のいほりだけはうちこはされてこごえ死にのめにであうても滿足である。』

石笋行

君不見益州城西門。
陌上石笋雙高蹲。
古來相傳是海眼。
苔蘚蝕盡波濤痕。

石笋行

君見ずや益州城の西門、
陌上石笋雙びて高く蹲す。
古來相傳ふ是れ海眼なりと、
苔蘚、蝕し盡す波濤の痕。

【字解】【一】石笋行　たけのこの化石をよめるうたなり、成都城の西門に二個の石笋あり、その北笋は長さ一丈六尺、まはり九尺五寸、南笋は長さ一丈三尺、まはり一丈二尺、南笋は公孫述の時折れたりといふ。

雨多往往得悉悉。
此事恍惚難明論。
恐是昔時卿相冢。
立石爲表今仍存。』
惜哉俗態好蒙蔽。
亦如小臣媚至尊。
政化錯迕失大體。
坐看傾危受厚恩。
嗟爾石笋擅虛名。
後來未識猶駿奔。
安得壯士擲天外。
使人不疑見本根。』

雨多くして往往、悉悉を得、
此の事恍惚、明に論じ難し。
恐らくは是れ昔時卿相の冢、
石を立て表と爲し今仍存するならむ。』
惜しい哉俗態、蒙蔽を好む、
亦小臣の至尊に媚ぶるが如し。
政化錯迕、大體を失ひ、
坐ら傾危を看て厚恩を受く。
嗟爾石笋、虛名を擅にす、
後來未だ識らず猶駿奔す。
安んぞ壯士を得て天外に擲ち、
人をして疑はずして本根を見せしめむ。』

【一】石笋行　石笋は竹の子の化石。【二】益州城　益州は蜀の古名。【三】陌　街路。【四】蹲　うづくまる。【五】海眼　石笋の附近二三尺の處は毎年夏六月に大雨あれば陷りて土穴をなし深さ測られず、俗に之を「海の眼」なりと稱す。【六】悉悉　碧珠なり、雨ののち石笋の傍には必ず青黃の小珠を得といふ。【七】恍惚　ぼんやり。【八】蔽　はかじるし。【九】蒙蔽　眞相をおほひかくすこと。【一〇】小臣　卿相。至尊　つまらぬけらいが天子にこびる。【一一】政化　政治教化。【一二】錯迕　まちがふ。【一三】失大體　要を得ぬ。【一四】傾危　國家の勢がたむきあやふし。【一五】爾　汝、石笋をさす。【一六】虛名　海眼にして悉悉を世得べしなどのこと。【一七】後來　後の人。【一八】未識　眞相をしらぬ。【一九】駿奔　長くはしり赴く、詩經の「清廟」篇の語。【二〇】本根　石笋の根本、實相。

【題義】成都の石筍をみてよめり、宦者李輔國のことをいへりとの說あるも然るや否やを知らず、文字通りに解しおくべし。上元二年の作。

【詩意】諸君見よ、益州城の西門には街路のうへに石の筍が一對高くうづくまつてゐる。ここはむかしから「海の眼」だといひつたへ、その筍の波濤のあとはこけがすつかり腐蝕してゐる、雨の多くふるときにはここでは往往瑟瑟といふ珠を得るといふ。しかしかかることはとりとめもないことではつきり論ずることはむつかしい。自分の考では多分むかしの卿相の塚であり、そのうへに石を立ててはかじるしとしたものが今なほ存在してゐるのであらう。』をしいことには世俗のさまはとかく眞相をかくすことをこのむもので、たとへばつまらぬ臣下が天子にこびてその耳目を蔽ふやうなものである。彼等臣下どもは政化がまちがつて要點を失うても、自分だけ天子の厚恩を受けて國家の勢の傾き危くなるのを平氣でみてゐる。ああこの石筍もその實のそはぬ名聲をほしいままにしてゐるので、後の世のものがそれをしらずにやたらにここへはせあつまるのである。自分はどうか壯士をやとうてこの石を天外にはふりだし、人人をして疑ふことなくその根本の正體を見させたいとおもふ。

石犀行

君不見秦時蜀太守。
刻石立作五犀牛。
自古雖有厭勝法。
天生江水向東流。
蜀人矜誇一千載。
泛溢不近張儀樓。
今日灌口損戸口。
此事或恐爲神羞。
修築隄防出衆力。
高擁木石當清秋。
先王作法皆正道。
詭怪何得參人謀。
嗟爾五犀不經濟。

君見ずや秦時、蜀の太守、石を刻して立てて五の犀牛を作す。古より厭勝の法有りと雖も、天、江水を生じて東に向つて流れしむ。蜀人矜誇す一千載、泛溢、張儀が樓に近かずと。今日灌口、戸口を損す、此事或は恐る神の羞と爲らむことを。隄防を修築して衆力を出し、高く木石を擁して清秋に當る。先王、法を作す皆正道なり、詭怪何ぞ人謀に參するを得む。嗟爾五犀、經濟あらず、

【字解】〔一〕石犀行　石で作つた犀のうた。秦の孝文王の時、李冰を以て蜀の太守とす、冰、石犀五頭を作りて水の精を壓すと、晉の常璩の華陽國志に犀牛一は府中市橋門にあり、一は湔の中にありといへり。唐のころ幾個存せしや明ならず「立作五犀牛」の五を三に作れる本ありといふ、之によりて余が想像をいはば「五犀牛」の五は五を正しとせん、後の「嗟爾五犀」の五は或は三の誤かも知れず、果して然らば三犀を失ひて二犀を餘せしかとおもはるれど確ならず。〔二〕秦時蜀太守　上にみゆ。〔三〕厭勝法　まじなひの法。〔四〕江水　錦江の水。〔五〕矜誇　江水あふれること。〔六〕張儀樓　成都の西城（西城）は張儀の築きし所なり

缺訛只與長川逝。
但見元氣常調和。
自免洪濤恣凋瘵。
安得壯士提天綱。
再平水土犀奔茫。

缺訛只長川と逝く。
但見る元氣常に調和すれば、
自ら洪濤、凋瘵を恣にするを免る。
安んぞ壯士を得て天綱を提げ、
再び水土を平げて犀は奔茫。

【題義】成都の石犀を見てよめるうた。上元二年秋の作。

【詩意】諸君見よ、秦の時に蜀の太守（李冰）が石を刻んで石の犀牛五個を作つて立てた。それを以て彼は洪水をしづめるまじなひとしたのだ。なるほど古くからまじなひの法はあるが、天は江の水を生じて東方にながれしめてゐる。蜀の人たちはこの犀牛によつて一千年も洪水は張儀の樓に近づかぬとほこつてゐたが、今日は瀧口に洪水があつて人家人口を害うた、このことは神の恥辱になるおそれがある。」　それで清秋のときに當つて木や石をかかへこみ、多人數の力をだして隄防を修築する。

といふ。【八】瀧口　山の名、彭州導江縣西北二十六里にあり、上元二年の七月にながあめあり八月に至りて止む、瀧口に損害あり。【九】戸口　人家人口。【一〇】神羞　石犀の神靈の恥辱。【一一】詭怪　あやしきこと、まじなひの法をいふ。【一二】不經濟　經ㇾ國濟ㇾ民の能力あらざるをいふ。【一三】缺訛　訛は形のかはることをいふならん。【一四】調和　陰陽よくとのふ。【一五】凋瘵　しぼむ、やむ、民力をつからすこと。【一六】天綱　天の大つな、無形には政治の大本をいふ。【一七】水土　洪水なき樣にする。【一八】犀奔茫　奔茫の語未だ詳ならず、茫洋の地に奔り赴かしむる義ならんか。

古代の賢い王が法をこしらへたのはみな正しい道ばかりだ、まじなひなどいふあやしいことがどうして人のはかりごとのなかにくははることができよう。汝五個の犀牛の如きものはさつぱり經ㇾ國濟ㇾ民の力のないものだ、缺けてとほく流るる川の水とともにどこへかいつてしまふがよい。天地間の元氣さへ調和するならばひとりでに洪水が民力をつからすことから免れさすことができるものだ。どうか壯士を得て天の大綱を提げてふたたび洪水を治めて、犀のやうなものはゆくへ不明になつてしまうた方がよいとおもふ。

杜鵑行

君不見昔日蜀天子。
化爲杜鵑似老烏。
寄巢生子不自啄。
羣鳥至今爲哺雛。
雖同君臣有舊禮。
骨肉滿眼身羈孤。

杜鵑行

君見ずや昔日蜀の天子、
化して杜鵑と爲りて老烏に似たり。
寄巢子を生みて自ら啄まず、
羣鳥今に至るまで爲に雛に哺す。
君臣に同じく舊禮有りと雖も、
骨肉滿眼、身羈孤なり。

【字解】【一】杜鵑行　ほととぎすの歌なり。杜鵑については次の傳說あり。「成都記」なる書に曰く、杜宇、亦杜主ともいふ、天より降りて望帝と稱す。稼穡を好み人に敎へて農を務めしむ。鱉城に治す。時に荆州の人鱉靈といふもの死し、其の屍流れを泝りてのぼり汝山の下に至り復た生き望帝を見る、望帝因つて以

(一〇)業工竄伏深樹裏。
四月五月偏號呼。
其聲哀痛口流血。
所訴何事常區區。
(一二)爾豈摧殘始發憤。
羞帶羽翮傷形愚。
(一七)蒼天變化誰料得。
萬事反覆何所無。
(一八)豈憶當殿羣臣趨。

業に工に竄伏す深樹の裏、
四月五月偏に號呼す。
其の聲哀痛、口、血を流す、
訴ふる所何事ぞ常に區區たり。
爾豈に摧殘せられて始めて發憤するか、
羽翮を帶ぶるを羞ぢ形の愚なるを傷む。
蒼天變化誰か料り得む。
萬事反覆何の無き所ぞ。
豈に憶はむや殿に當つて羣臣の趨せ

日天子章、念此死生變化非常理、中心惻愴不能自已と。杜詩は殆ど之を祖とせり。【一一】寄巢　自己の寄寓する巢、杜鵑の巣。【一二】羣鳥　同君臣　杜鵑と羣鳥との關係が君臣に似たるを。【一三】爾　汝、杜鵑をさす。【一四】

四一四

て相となす、號して開明といふ、たまたま巫山、江をふさぎ、人、洪水にあふ、開明ためにうがちて流れを通ぜしむ、大功あり、望帝因つて其の位を以て之にゆづる。のち望帝死す、其の魂化して鳥となる、名けて杜鵑といふ。亦子規ともいふ。と。之によれば杜鵑はむかしの蜀の君の化してなりたるものなりといふなり。之につき宋の鮑照に行路難の詩あり、曰く　悲思忽而至、跨馬出國門、舉頭四顧望、但見松柏荊棘鬱蹲蹲、中有一鳥名杜鵑、言是古時蜀帝魂、聲音哀苦鳴不息、羽毛憔悴似人死、飛走樹間逐蟲蟻、豈憶往

摧殘　くだかれ、そこなはれる、羽毛などにつきいふ。【一五】羽翮　翮はつばさのうちにあるたちばれ。【一六】形愚　おろかな、みすぼらしき樣子。【一七】蒼天　あをぞら、天の理をいふ。【一八】反覆　ひつくりかへる。【一九】何所無　無いものなし。【二〇】豈憶　意外といふこと。【二一】當殿羣臣趨　往日の事をいふ、當殿は殿前に當つての義、趨とは小走りをする禮容なり。

【題義】ほととぎすのうたなり。ほととぎすが昔嘗て天子でありながら今は見るかげもなき姿となられしことをいたむ意を述べたり。上元元年の七月に宦者李輔國兵力を以て脅かして上皇（玄宗）を宮中より西内に移したてまつり、侍從高力士、舊の宮仕への人等を遠ざけ、仙媛・玉眞等の姫宮をも他所へうつす、詩は是等のことについて意を寓したるものなりといへり。或は然らん。但し一一何は何のたとへなどせんぎすべからず、大體玄宗の失位をのべしものとみるべし。上元二年の作ならん。

【詩意】諸君みたまはざるか、むかしの蜀の天子が今は變化して杜鵑となつて年ふけた烏に似たものとなつてゐる。さうして寄寓してゐる巣で子を生みながらそれをじぶんで物をくはへてきて養ふことをせず、他の多くの鳥どもがいまも彼のために雛に餌をやつてをる。」　杜鵑と羣鳥との關係は君と臣との樣でむかしながらの禮があつてそこはゆかしいが、杜鵑の身はみわたすかぎり骨肉はありながら身はひとりぼつちの旅の身の上となつてをる。彼ははやたくみに深き樹木のしげみのなかにかくれ、四月五月のころは尤もよくなきさけぶ、その聲はいたくかなしげで口からは血を流してをる、いかなることを訴へてゐるかとみるといつもつまらぬくだくだしいことをいうてゐる。ほととぎすよ、汝は

いま自分のからだがくだきそこなはれたのではじめて憤りの念をおこしたのか、羽やたちばねはもつてゐるがそれがかへつてはづかしく、また自己の形態のおろかさうなのをかなしんでゐるかの樣である。』　天理の變化不測なことはたれがそれを推しはかることができよう。ものごとのひつくりかへることはこれまた有らざるなきものであつて、なんでも一定とはゆかぬものだ。このみすぼらしいほととぎす、これがありしむかしには、そのごてんの前で羣臣が小走りをして尊敬をしてゐたものであるとはだれがかんがへることができようぞ。』

逢唐興劉主簿弟

唐興の劉主簿弟に逢ふ

分手開元末。連年絶尺書。
手を分つ開元の末、連年、尺書絶ゆ。

江山且相見。戎馬未安居。
江山且相見る、戎馬に未だ居を安んぜず。

劍外官人冷。關中驛騎疎。
劍外、官人冷なり、關中、驛騎疎なり。

輕舟下吳會。主簿意何如。
輕舟、吳會に下らむ、主簿意何如。

【字解】【一】唐興　縣の名、今、四川省瀘州府瀘溪縣治、成都の東にあたる。【二】劉主簿　主簿の官にある劉某。【三】弟　自己より年少者なるをしたしみていふ。【四】開元　玄宗の年號。【五】尺書　一尺の素のてがみ。【六】江山　蜀地のそれをいふ。【七】戎馬　兵亂をいふ。【八】安居　おちついて住居する。【九】劍外　劍門のそと、蜀をいふ。【一〇】官人　おやくにん、これは縣令、その屬官、などをさしていふ隋唐間の俗語なりといふ、劉は主簿なれば官卑し。【一一】冷　さびし。【一二】關中　長安地方、東に函谷關、南に武關、西に散關、北に蕭關をひかへたり。【一三】驛騎　しゆくつぎのうま、てがみをもち來るものをいふ。【一四】疎　まばら。【一五】吳會　吳門・會稽、今の江蘇省蘇州府、浙江省紹興府。

【題義】唐興縣の劉主簿にであうたので感をのべたり。けだし劉が成都に來れるならん。上元二年の作。

【詩意】君とは開元の末に手を分つたが、あれからひきつづき手紙もたえてゐた。いまふとこんなばしよでおめにかかるが、自分は兵亂のためにまだおちついてすまふことができずにゐる。君もこんな劍門外の地ではかばかしからぬ官に居られる樣だし、自分もまちどほしくおもつてゐる長安とのたよりの驛馬のまれなのにこまつてゐる。小舟をうかべてこれから江南の地方へくだらうかとおもふが、君のおかんがへはいかがでござるか。

敬簡王明府

敬みて王明府に簡す

葉縣郎官宰。周南太史公。
葉縣郎官の宰、周南の太史公。

神仙才有數。流落意無窮。
神仙、才、數有り、流落、意窮り無し。

驥病思偏秣。鷹秋怕苦籠。
驥病みて思ふは偏に秣なり、鷹秋にして怕る苦だ籠。

看君用高義。恥與萬人同。

【字解】【一】簡　てがみをやる。【二】王明府　王は王潛、唐興縣の縣令、明府は縣令の敬稱。【三】葉縣郎官宰　縣令の故事なり。神術あり、即ち古の仙人王子喬のうまれかはりなりと、後漢の明帝の二重に用ひ、王潛がことをいふ、後漢の王喬、葉縣の令となり、神術あり、即ち古の仙人王子喬のうまれかはりなりと、後漢の明帝のとき潮陽公主、その子のために郎（官名）を求む、明帝曰く、郎官は、上、列宿に應ず、出でては百里に宰たり、と。王潛は郎官よりいでて縣令となりしとみえたり。【四】周南太史公　此句は自己をさす、司馬遷が父太史公司馬談周南に留滯して漢家封禪の事にあづかるを得ず、周南とは洛陽地方をいへり、これは作者成都に留滯せるゆゑその事のみをとりて太史公に比せしなり。【五】神仙　此句王潛をいふ。【六】歎　定數、命數。【七】淩落　おちぶれる、此句自己をいふ。【八】臨病二句　自己をいふ。【九】思個秣　個思ノ秣といふべきを倒さにいへり。【一〇】怕苦龍　苦怕ノ龍といふべきを倒さにいへり。【一一】看君　看は作者がみるなり、君以下二句は王潛についていへり。【一二】用高義　自己の貧窮を救うてくれることをさす。【一三】恥　王潛がはづるなり。【一四】與萬人同　凡人同樣なること。

【題義】唐興縣の縣令王潛にやつたてがみ。作者は潛がため別に唐興縣客館記なる文を撰したり。詩は上元二年秋の作ならん。

【詩意】葉縣の郎官出身の長官といふべきあなた。周南に留滯してゐる太史公ともいふべきわたくし。あなたは神仙の如く、その才に定命をもつてうまれてこられた。わたくしはおちぶれてゐるそのこころもちはさいげんなくあはれである。千里の馬も病んではその思ふ所はただただ秣のうへにあるし、鷹は秋にあたつてはなはだ龍のなかにおかれることをおそれてゐる。わたくしはあなたがわたくしに對しては特別に高義を施してくれられることと信じてゐる。あなたはきつと義を施すに當りて凡人と同樣であることを恥としてをられることとおもふ。

重簡王明府

甲子西南異。冬來只薄寒。
江雲何夜盡。蜀雨幾時乾。
行李須相問。窮愁豈有寬。
君聽鴻雁響。恐致稻粱難。

重ねて王明府に簡す

甲子、西南異なり、冬來只薄寒。
江雲何の夜か盡きむ、蜀雨幾時か乾かむ。
行李須らく相問ふべし、窮愁豈に寬なる有らむや。
君聽け鴻雁の響、恐らくは稻粱を致すこと難きならむ。

【字解】【一】甲子　一歲のめぐりをいふ。【二】西南　蜀の地をさす、都よりいふ。【三】薄寒　うすいさむさ。【四】行李　行理と同じ、使者のこと。【五】相問　こちらをたづねること。【六】窮愁　逆境に居るうれひ。【七】寬　くつろぐこと。【八】恐　作者がおそれる。【九】粱　よきこめ。

【題義】前に手紙をやつたがききめがなかつたものか、二どめに王潛にやつたてがみ。食糧をめぐんでくれといふなり。上元二年冬の作。

【詩意】西南の地方は歲のめぐりあひも北方とちがひ、冬からかけてただうすさむである。江にみえてゐる雲はいつの夜になつたらつきるのか、ここの雨はいつになつたら乾くのであるか。あなたからもはやおたづねのお使ひがきてもよいはずとおもふ、わたくしのうれひはいつとてくつろいだためし

とてはござりませぬ。鴻雁のなくねをおききくだされ。恐らく彼の鳥も稻粱のたべものを得ることがむつかしいというてないてゐるのでござりませう。

百憂集行

憶年十五心尚孩。
健如黃犢走復來。
庭前八月梨棗熟。
一日上樹能千迴。
卽今倏忽已五十。
坐臥只多少行立。
强將笑語供主人。
悲見生涯百憂集。
入門依舊四壁空。
老妻覩我顏色同。
癡兒不知父子禮。
叫怒索飯啼門東。

憶ふ年十五、心尚孩なり、
健、黃犢の如く走りて復た來る。
庭前八月、梨棗熟す、
一日、樹に上ること能く千迴す。
卽今倏忽已に五十、
坐臥只多く行立少し。
强ひて笑語を將て主人に供す、
悲み見る生涯、百憂の集るを。
門に入れば舊に依つて四壁空し、
老妻我を覩て顏色同じ。
癡兒は知らず父子の禮、
叫怒、飯を索めて門東に啼く。

【字解】【一】百憂集行　百憂の集まることをかなしめるうた。水文中の「百憂集」の三字をとりて題とす。【二】孩　げら笑ひするこども。【三】犢　こうし。【四】棗　なつめ。【五】倏忽　たちまち。【六】五十　上元二年辛丑、作者五十歲なり。【七】主人　世話になる人、上元二年三月より十一月まで崔光遠成都尹たり、主人は崔光遠をさす、光遠無學にして作者之と相合はざりしもののごとし。【八】四壁空　四方の壁のみありて他になにものもなし。

【九】顏色同　どちらも心配さうなかほをしてゐること相同じ。【一〇】癡兒　ちゑづかぬこども。【一一】門東　庖廚の門は東にありといふ。

【題義】さまざまの心配ごと一身に集ることをなげくうたなり。上元二年の作。

【詩意】おもひおこす十五歲ばかりのころ自分は心がをさなくて、身の達者なことは黃色の小うしの如くあちらへ走つてはまたこちらへかけてきた。八月にはにはさきに梨やなつめの實が熟する、すると一日に千たびぐらゐはその樹に平氣でのぼつた。』　がいまはたちまち已に五十の老人となつて、坐したり臥したりすることは多いが、あるいたり立つたりすることは少くなつた。そしてむりに笑ひばなしをすることを土地の主人にささげてをるが、わが生涯には實にさまざまの心配事が集つてゐるのを悲みながら見るのである。』　わがやの門內に入つてみれば四方の壁が立つてをるばかり無一物である、老いたる妻はわが顏を見るが、我も彼の女もただ同じ樣に心配さうなかほつきしてゐるばかりである。我我のこの心をも知らずに頑是ないこどもは親子の禮をもわきまへず、怒りさけんでごはんをせがんでだいどころの門の東の方でなきたててゐる。』

徐卿二子歌

君不見徐卿二子生絶奇。
感應吉夢相追隨。
孔子釋氏親抱送。
竝是天上麒麟兒。
大兒九齡色清徹。
秋水爲神玉爲骨。
小兒五歲氣食牛。
滿堂賓客皆回頭。
吾知徐公百不憂。
積善袞袞生公侯。
丈夫生兒有如此二雛者。
異時名位豈肯卑微休。

君見ずや徐卿の二子生れて絶奇なり、
感應して吉夢相追隨す。
孔子釋氏親ら抱き送る、
竝に是れ天上の麒麟兒なり。
大兒は九齡、色清徹、
秋水を神と爲し玉を骨と爲す。
小兒は五歲、氣牛を食ふ、
滿堂の賓客皆頭を回らす。
吾知る徐公百憂へず、
積善袞袞、公侯を生む。
丈夫、兒を生む、此の二雛の如き者有り。
異時名位豈に肯て卑微にして休まむや。

【字解】【一】徐卿　西川兵馬使徐知道ないふか、卿は敬稱、其名は詳ならず。【二】絶奇　はなはだ非凡。【三】感應　靈氣に感じ應ぜらるる。【四】吉夢　母體懷妊のよきゆめ。【五】追隨　ひきつづく、即ち下の孔氏釋氏云云のこと。【六】親抱送　孔子・釋氏がそれぞれみづからそのこどもを抱いて送つてくれた。【七】麒麟兒　梁の徐陵年數歲なりしとき家人たづさへて寶誌上人に謁す、上人その頂をなでて曰く天上の石麒麟なりと、徐卿が子ゆゑ徐陵の故事を用ひたり。【八】清徹　すみわたる。【九】氣食牛　「戶子」に曰く、虎豹之駒、擣未成文、已有食牛之氣と。【一〇】回頭　ふりかへつてみる。【一一】徐公　徐卿。【一二】百不憂　百事につけて心配なし。【一三】積善　善行をつむ。【一四】袞袞　絶えざる貌。【一五】名位　名譽官位、二雛のそれをさす。【一六】卑微　いやしく、かすか。

【題義】徐氏の二人の小兒を見て之をほめたたへて作れる歌。上元二年の作。

【詩意】諸君見られよ、徐君のふたりの子供は生れながら非常なものである。すなはちこの子供は靈氣に感じてひきつづきよき夢が結ばれたのである。孔子が先づ長男を抱き送り、つぎに釋氏が次男を抱き送つてくれたのだ。だからふたりとも天上の麒麟兒といふべきものだ。」　大きな兒はここのつで顏色すきとほり、秋の水を精神とし玉を骨としてをる樣にみえ、小さい方の兒は五歲だがはや牛を食はんとする虎豹のやうな氣をふくんでゐる、それで一堂のおきやくたちはみんなふりむいてこの子供の方をながめるのである。」　わたしは徐君はもはや何等の心配ごとがないものとおもふ、なぜならば君は善行をつまれてたえずつづいて公侯となるべきものをうみだされたのである。丈夫たるもの已にこのふたりのこどもの樣な兒を生んだうへは、このこどもの將來うくる名譽官位はどうしてつまらぬ

ところでやむことがあらうぞ、必ず顯赫たる地位にのぼるにきまつてゐる。

戲作花卿歌

成都猛將有花卿。
學語小兒知姓名。
用如快鶻風火生。
見賊惟多身始輕。
綿州副使著柘黃。
我卿掃除卽日平。
子璋髑髏血模糊。
手提擲還崔大夫。
李侯重有此節度。
人道我卿絕世無。
既稱絕世無。
天子何不喚取守。
東都。

戲れに花卿の歌を作る

成都の猛將、花卿有り、
學語の小兒も姓名を知る。
用、快鶻の如く風火生ず、
賊を見る惟多ければ身始めて輕し。
綿州の副使、柘黃を著く、
我が卿掃除して卽日に平ぐ。
子璋の髑髏血模糊たり、
手づから提げ擲還す崔大夫。
李侯重ねて此の節度有り、
人は道ふ我が卿、絕世無し。
既に絕世無しと稱す、
天子何ぞ喚び取つて東都を守らしめざる。

【字解】【一】戲作　戲れの意は末の二句にあり、表面すこぶる花卿をほめしに似たれども其實然らず、故に「戲」といふ。【二】花卿　花驚定（驚一に歡に作る）がこと。上元二年四月、梓州の刺史段子璋反し、東川節度使李奐を綿州に襲ひ、自ら梁王と稱し、黃龍と改元し、綿州を以て黃龍府となし、百官を置く。五月、成都尹崔光遠、將花驚定を率ゐ、攻めて綿州を拔き、子璋を斬る。これ本詩にのぶる所の事なり。驚定は子璋を誅せしのち大に東蜀を掠めたり、天子、光遠が軍を戰むる能はざるを怒りて之を罷む。驚定はかかる惡將なれども詩は子璋の反を平げし點についてのみいへるなり。【三】學語小兒　はじめてはなしのけいこをするこども、幼兒をいふ。【四】快鶻　快ははやきこと、鶻は「たか」のたぐひ。【五】風火　風にあふられる火、勢の猛なるをいふ。【六】惟多始身輕　賊が多ければやつと身をかろくはたらかす。【七】綿州副使　副使は節度使の副使をいふ、段子璋は梓州の刺史なれども副使を偽して綿州に據りて反したるにより之を綿州副使とよべるなり。【八】著　つく、きること。【九】柘黃　天子の御衣の色、柘は或は赭に作るべしといへり、赭は赤と黃とのまざりの色。【一〇】我卿　花卿をさす、我とは之を親しむ辭なり。【一一】掃除　殲亂をはききよめる。【一二】卽日　叛のあつたそのひ。【一三】髑髏　むくろ。【一四】模糊　もぢやもぢや。【一五】手提　むくろをひつさげる。【一六】擲還　なげうちてかへす、主將のところへ。【一七】崔大夫　崔光遠。【一八】李侯　侯は敬語、東川節度使李奐をいふ。【一九】重有　李奐は反亂起りて成都に奔り、亂平ぎてまた綿州へもどる、よつて「重れて有す」といふ。【二〇】人道　一般の人人がいふ。【二一】守東都　東都は洛陽なり、時に歡史思明洛陽に據れり、かく言ふことが本意かちいふのでなき故に「戲れ」といふなり。

【題義】成都の武將花驚定なる者が綿州の反亂を平げしことをほめて戲れに作りたる歌なり。上元二年の作。

【詩意】成都のつよい大將に花卿といふのがある。彼の姓名はやつとことばをあやつるこどもでも知つてをる。彼は之を用ふればすばやい鶻の如くうごき、そのはげしきことは風にあふらるるほのほの生ずるごとくである。賊を見てもあひてが多いときはじめて身がるにはたらきだす。このたび綿州の

副使と稱する段子璋が謀反して天子の御衣と同色のきものをきたときに我が花卿はそのさわぎをはきよめてその日のうちに之を平らげてしまつた。』　彼は血のもぢやもぢやしたたる子璋のむくろを手づから提げて之を主將たる崔大夫のもとへなげうちかへした。之がため一度は逃げだした綿州の李節度もふたたび節度の職を有するに至り、人人は我が花卿のごときものは世にたえて無きものだといつてゐる。（以下が戲意なり）そんなに世に無い武將だといふならば、天子におかせられてはなぜに彼を曳ぴとつて東都洛陽をお守らせにならぬのであるか。お守らせになつたがよろしからうものを。（ほめながらあざわらひしなり）

贈花卿[一]

錦城絲管日紛紛。[二]
半入江風半入雲。[三]
此曲祇應天上有。[四]
人間能得幾回聞。[五]

花卿に贈る

錦城の絲管日に紛紛たり、
半ば江風に入り半ば雲に入る。
此曲祇應に天上に有るなるべし、
人間能く幾回か聞くことを得む。

【字解】[一] 花卿　前詩の花驚定なり。[二] 錦城　錦官城、成都の少城。[三] 絲管　いとたけのおと。[四] 紛紛　おとのみだれたつさま。[五] 入江風　清さをいふ。[六] 入雲　高さをいふ。[七] 祇　只。[八] 天上有　天上の仙人界に有るもの。[九] 能得幾回聞　いくたびきけるものか、めつたにきけぬ。

【題義】花驚定武功を恃みて驕り天子の用ひらるる如き音樂を爲したるにより、作者この詩を作りて之を諷したるなり、とは舊說の言ふ所なり。余が疑ふ所は、諷したるものならばこれも戲贈二花卿一と いふべきにしかいはざること是なり。或は一時の興をうたひしに止まるものに非ざるか。上元二年の作。

【詩意】錦官城の絲竹の音は毎日にぎやかにおこる。その音は半は江風に入りて清く、半は雲中に入りて高し。かかる曲は天上界の有たるべきものであるであらう、どうして人間界でなんべんもきくことのできるわけのものではないのである。

少年行二首

莫笑田家老瓦盆。[一]
自從盛酒長兒孫。[二]
傾銀注玉驚人眼。[三]
共醉終同臥竹根。[四]

少年行　二首

笑ふ莫れ田家の老瓦盆、
自ら從す酒を盛りて兒孫を長ずるに。
銀を傾け玉に注ぐ人の眼を驚かすも、
共に醉終に同じ竹根に臥するに。

【字解】[一] 田家　農家。[二] 老瓦盆　年數を經た瓦の鉢。[三] 從　まかす。[四] 長　生長。[五] 傾銀注玉　銀樽を傾け玉杯にそそぐ。[六] 共醉　彼も我もともによふ。[七] 臥竹根　竹の根もとに醉臥す。

【題義】少年に示すためにつくりたるうた。この第一首は貴族子弟に貧家の樂みを語るなり。上元二

年夏の作。

【詩意】諸君はこの農家につかひふるした瓦の鉢をわらひたまふな。この鉢でもそれに酒をもつてのみながら兒や孫を生長させてゆくにさしつかへはないものでござるぞ。諸君は酒をのむとき銀の樽を傾け、玉の杯についでのまれる、その器のうるはしいことは衆人の眼を驚かすに足る。しかし諸君も自分もともによへば結局は同じ樣に竹の根もとに臥てしまふにかはりはないではないか。

〔一〕

巢燕引雛渾去盡。
江花結子也無多。
黃衫年少來宜數。
不見堂前東逝波。

〔二〕

巢燕、雛を引きて渾て去り盡す、
江花は子を結びて也多無し。
黃衫の年少來ること宜しく數すべし、
見ずや堂前東逝の波を。

【字解】〔一〕巢燕　すごもりのつばめ。〔二〕渾　すべて。〔三〕江花　かはべりの樹の花。〔四〕子　實。〔五〕也　亦。上句の去盡に對して、亦といふ。〔六〕無多　花多からぬといふ。〔七〕黃衫　きいろ。〔八〕年少　少年に同じ。〔九〕數　たびたび。〔一〇〕不見　君不見乎に同じ。〔一一〕東逝波　波のうはぎ、貴族子弟のきしの。〔八〕年少　少年に同じ。〔九〕數　たびたび。〔一〇〕不見　君不見乎に同じ。〔一一〕東逝波　波とは水流をいふ、水は東方に向つてながれゆく、支那にて水流は時間のすぎ去るにたとふ。

【題義】少年に向つて行樂をすすむるうたなり。

【詩意】巢ごもりのつばめは雛をひきつれてみんな去つてしまつた。江べりの花も大抵實をむすんでのこつてゐる花はいくらもない。時間はこんなにはやくたつ。黃衫を著た少年らよ、わたしのところへたびたびあそびに來なさるがよい。わが家の前の東に流れ去る水の波をごらんなさい。わかい時はつかのまだ。今のうちにたのしみなさい。

贈虞十五司馬

遠師虞祕監。今喜識玄孫。
形象丹青逼。家聲器宇存。
淒涼憐筆勢。浩蕩問詞源。
爽氣金天豁。清談玉露繁。
佇鳴南嶽鳳。欲化北溟鯤。
交態知浮俗。儒流不異門。
過逢連客位。日夜倒芳樽。
沙岸風吹葉。雲江月上軒。

虞十五司馬に贈る

遠く虞祕監を師とす、今喜ぶ玄孫を識るを。
形象、丹青に逼る、家聲、器宇存す。
淒涼、筆勢を憐む、浩蕩、詞源を問ふ。
爽氣、金天豁なり、清談、玉露繁し。
鳴かむと佇つ南嶽の鳳、化せむと欲す北溟の鯤。
交態、浮俗を知る、儒流、門を異にせず。
過逢、客位に連り、日夜、芳樽を倒す。
沙岸風葉を吹く、雲江月軒に上る。

百年嗟已半。[二七]四座敢辭喧。[二八]百年嗟已に半なり、四座敢て喧しきを辭せむや。
書籍終相與。青山隔[二九]故園。[三〇]」書籍終に相與にせむ、青山、故園を隔つ。』

【字解】〔一〕虞十五司馬　司馬の官にある虞某。〔二〕遠師　師とは其の書法を師とすること。〔三〕虞祕監　虞世南なり、世南は餘姚の人、唐の太宗の朝に祕書監となり永興縣子に封ぜらる、世南に五絶あり、其の第四は文詞、第五は書翰(文字をかくこと)なり。歿後太宗動して其像を凌煙閣にふがかしむ。〔四〕玄孫　虞司馬は世南五代の孫にあたる。〔五〕形象　虞司馬のかたち。〔六〕丹青　畫にかかれたる虞世南。〔七〕家聲　虞氏一家の評判。〔八〕器宇　其人の人物器量。〔九〕清澹　大なる貌。〔一〇〕筆勢　卽ち書翰。〔一一〕詞源　文詞の生ずる淵源。〔一二〕爽氣　さわやかな氣象。〔一三〕金天籍　秋のそらのすみわたるごとくひろし。〔一四〕清談　俗塵のけがれなきはなし。〔一五〕玉露繁　白玉の露のこぼるるごとくしげし。〔一六〕南嶽　衡山なり。〔一七〕北溟鯤「莊子」に北溟有レ魚、名曰レ鯤、化爲レ大鵬」とみゆ、「爽氣」以下四句は司馬をほめていふ。〔一八〕交遊　人人の交際するさま。〔一九〕浮俗　輕薄な世俗。〔二〇〕儒流　學者のなかま。〔二一〕不異門　互に交通して一家の如くなるをいふ。〔二二〕過逢　虞家に至り之にあふこと。〔二三〕連客位　おきやくとしての席につらなる。〔二四〕沙岸二句　浣花溪附近のさま。〔二五〕四座　一座滿座に同じ。〔二六〕喧　かまびすし、にぎやかなること。〔二七〕書籍終相與　後漢の蔡邕、王粲が年少にして文才あるを愛し「吾が家の書籍文章は盡くまさに之に與ふべし」といひしといふ。しからば「與」の字「あたふ」とよむべきに似たるも相與とあれば「あひともにする」義なり、通借の義なり、故事に拘泥すべからず。〔二八〕故園　兩京をいふ。

【題意】司馬虞某にあひて之に贈れる詩。上元二年の作。

【詩意】自分は書法では遠く祕書監虞世南公を師としたものであるが、今公の玄孫にあたるあなたをしつたことはうれしいことである。あなたのかたちは畫にある公にせまつてをり、さすが評判のおいへがらであなたにはそのお家すぢだけの器量がそなはつてゐる。わたしは祕監公の筆法がすたれかかつてをるのをあはれにおもひ、またあなたについて御先代の文詞の淵源する所をおたづねする。あなたは氣象さわやかにして秋の天のひろきがごとく、はなし俗氣なくして白玉の露のこぼるるに似たり、あなたは機を得て鳴かんとする南嶽の鳳鳥のごとく、まさに大鵬に化せんとする北溟の鯤の樣なものである。』　我我は世間の交際ぶりに於て輕薄な世俗がどんなものであるかを知つてをる。この間に於て我が家とあなたの家とは同じく儒家の流れであり門をことにしたものではない。その緣故からかあなたにおあひして自分はその賓客としての座席につらなり、日となく夜となくかんばしき酒樽を飲み倒してゐる。このとき川の沙しく岸では風が樹の葉を吹き、雲のよこたはる江では月がでてのきばへときしかかる。ああ自分はもはや百年の半に達した、この一座に於てのんでにぎやかにし豪興をきはむることは辭する所ではない。而して終局のところは故郷にかへつて書籍でも流通して讀みたいとおもふが、遺憾ながら青山がとほく故園をへだててゐまは急にかへることはできぬ。』

病柏

有柏生崇岡。[一]童童狀車蓋。[二]柏有り崇岡に生ず、童童、車蓋に狀たり。

偃蹇龍虎姿。主〔正〕當風雲會。偃蹇たり龍虎の姿、主〔正に〕風雲の會に當る。
神明依正直。故老多再拜。神明、正直に依る、故老多く再拜す。
豈知千年根。中路顏色壞。豈に知らむや千年の根、中路、顏色壞る。
出非不得地。蟠據亦高大。出づること地を得ざるに非ず、蟠據亦高大なり。
歲寒忽無憑。日夜柯葉改。歲寒忽ち憑る無し、日夜、柯葉改まる。
丹鳳領九雛。哀鳴翔其外。丹鳳、九雛を領し、哀鳴其の外に翔ける。
鴟鴞志意滿。養子穿穴內。鴟鴞、志意滿つ、子を養ふ穿穴の內。
客從何鄉來。佇立久吁怪。客何の鄉より來れる、佇立して久しく吁怪す。
靜求元精理。浩蕩難倚賴。靜に元精の理を求むるに、浩蕩として倚賴し難し。

【字解】〔一〕崇岡　たかいをか。〔二〕童童　こんもりとした鴟。〔三〕狀　似たり。〔四〕偃蹇　うれる鴟。〔五〕主當　主の字正に作れる本あり、從ふべし。〔六〕風雲　風や雲のであふなり、樹色の鬱森たるをいふ。〔七〕神明　神の力。〔八〕正直　樹木のまつすぐなこと。〔九〕故老　としより。〔一〇〕中路　なかほど。〔一一〕出　生出。〔一二〕蟠據　わだかまり、よる。〔一三〕歲寒　年末、冬がれ。〔一四〕無憑　たよるところなし。〔一五〕柯　えだ。〔一六〕鴟鴞　ふくろふのたぐひ。〔一七〕志意滿　得意。〔一八〕客　たび人、自己をさす。〔一九〕佇立　たたずむ。〔二〇〕吁怪　なげきあやしむ。〔二一〕元精理　宇宙間の元氣の道理、天道の理。〔二二〕浩蕩　大なる貌、とりとめなきさまをいふ。〔二三〕倚賴　たよりとする。

【題義】柏樹のやめるものを詠ず、けだし「古柏行」のごとく暗に自己の境遇を比す。上元二年秋以後の作。この病柏・病橘・枯櫻・枯枏は殆ど同時の作なるべし。

【詩意】たかい岡に柏の樹がはえてゐて、それがこんもりして車の傘のやうだ。そのうねりくねつた姿は龍か虎のやうであつて、ちやうど風雲の生ずる機會にであうたのだ。さうしてその樹のまつすぐなところへ神明の力ものりうつつたので、老人たちも多くこの樹を見ては再拜したものである。ところが意外にもこの千年の根が中途で顏つきがくづれてしまつた。』　この樹の生ひ出した場所は不適當であつたのでなく、生長して蟠據したことも高大であつたが、冬枯れになつて忽ちたよるところをうしなひ、日となく夜となく枝や葉がこれまでとはかはつてわるくなつてきた。鳳凰は九つのひなをひきつれて、かなしげに鳴いてこの樹のそとにかけつつゐる、之に反して鴟鴞の惡鳥は得意になつて穿たれた穴の內で子をやしなつてをる。』　どこともなくたびびとがやつてきた、彼はこの樹のところにたたずんで久しくふしぎがりなげいた。つらつら天道の理をたづねてみると、こんなことでは天道もとりとめなくあまりあてにならぬものである。』

病橘

羣橘少生意。雖多亦奚爲。羣橘、生意少し、多しと雖も亦奚をか爲さむ。

惜哉結實小。酸澀如棠梨。
剖之盡蠹蝕。采掇爽所宜。
紛然不適口。豈只存其皮。
蕭蕭半死葉。未忍別故枝。
玄冬霜雪積。況乃廻風吹。』
嘗聞蓬萊殿。羅列瀟湘姿。
此物歳不稔。玉食失光輝。
寇盜尚憑陵。當君減膳時。
汝病是天意。吾愁罪有司。
憶昔南海使。奔騰獻荔支。
百馬死山谷。到今耆舊悲。』

惜しい哉結實小なり、酸澀、棠梨の如し。
之を剖けば盡く蠹蝕す、采掇宜しき所に爽ふ。
紛然口に適せず、豈只其皮を存するのみならむや。
蕭蕭たり半死の葉、未だ枯枝に別るるに忍びず。
玄冬、霜雪積む、況んや乃ち廻風の吹くをや。』
嘗て聞く蓬萊殿、羅列す瀟湘の姿。
此物、歳に稔らざれば、玉食、光輝を失ふと。
寇盜尚憑陵たり、君が減膳の時に當る。
汝が病むは是れ天意なり、吾は愁ふ有司を罪せむことを。
憶ふ昔南海の使、奔騰、荔支を獻ず。
百馬、山谷に死す、今に到つて耆舊悲む。』

【字解】【一】橘　みかんの樹。【二】摘　さく。【三】蠹蝕　むしくひ。【四】采掇　とる。【五】爽　差ふなり、爽所宜とはとつてもよくないといふなり。【六】不適口　うまくない。【七】豈只存其皮　舊解に皮を橘實の皮とし藥品に入れ用ふなどととけるが恐くは通ぜず。皮は橘樹の皮なさし、樹の病容をいふ。此句は下句の「半死葉」へかかる句なり。【八】玄冬二句　節候を敍したるなり。【九】蓬萊殿　長安の殿の名。【一〇】羅列　つられる。【一一】瀟湘　瀟湘は湖南にある川の名、その地方美橘を産す。【一二】姿　みのる。【一三】玉食　天子の御食物。【一四】寇盜　安・史の逆賊等。【一五】此物　橘をさす。稔國家に災あれば自己を謙し膳部の品かずをへらす。【一六】憑陵　惡氣のさかんなる貌。【一七】減膳　天子はときはかかりの殺人が飼せられる。【一八】歳不稔　以下は唐の楊貴妃が荔支を好みて蜀の涪州より子午谷をへて驛馬にてそれを長安へとりよせしことをいふ。南海使とは唐の事にはあらず、後漢の和帝の時、南海（今の廣東地方）よりしゆくつぎにて龍眼・荔支をたてまつりしことあり、それをひとつことにして言ひなしたり、實は唐のことをいふなり。【一九】汝　橘をさす。【二〇】有司　橘を地方から貢獻すべきによい橘が無き大いそぎにて馬をかけさすをいふ。【二一】奔騰　驛馬がはしりをどりあがる、【二二】荔支　龍眼肉に似た果實。【二三】百馬　多くの馬。【二四】耆舊　老人。

【題義】橘樹の病めるものについてよめり。

【詩意】多くの橘樹がみな生き生きしたこころもちがすくない。これではいくら多くあつたところでどうなるものか、やくにたたぬ。をしいことにむすぶ實は小さくて、すつぱく、しぶいことはやまなしに似てゐる。それをわつてみるとみんなむしくひで、せつかくとつてもぐあひがわるい。どれもどれも口にはあはぬ。こんな實のなる樹が今は樹に皮がくつついてゐる。皮ばかりでない、さびしげな半死の葉もまだもとの枝に別れるに忍びぬといつたやうにくつついてゐる。その時は冬の霜雪が積つたときで、そのうへ吹きまはす風が吹きつつあるころなのであるのに。』自分はかつて聞いてゐる、蓬萊殿では南方の瀟湘の地方で產した橘のすがたがならべられる、この物がみのりのわるい歳には

天子の御食物もひかりを失ふのありさまだといふことを。今や盗賊等がまだはびこつてをり、天子が御膳部を減せらるべき時節にあたつてゐる。このをり汝橘樹が病氣にかかつたのは天のおぼしめしである、ただ自分はそれがためよい橘の實がたてまつられず、かかりの役人が罰せられはせぬかと心配するのである。（それはあまりにむごいことだ。）いまもおもひだすが、まへがた南海の使が馬をはしらせて荔支をたてまつつたことがある、そのときはしゆくつぎのたくさんの馬が途中の山や谷でのたれ死にをした、いまもなほ老人たちはそのことをいひだしては悲んでゐるのである。（獻上物のために吏民をくるしませてはならぬ。）』

枯櫻

蜀門多櫻樹。高者十八九。
其皮割剝甚。雖衆亦易朽。
徒布如雲葉。青青歲寒後。
交横集斧斤。凋喪先蒲柳。』
傷時苦軍乏。一物官盡取。

蜀門、櫻樹多し、高き者は十八九。
其皮割剝甚し、衆しと雖も亦朽ち易し。
徒に雲の如き葉を布く、青青たり歲寒の後。
交横はりて斧斤を集む、凋喪、蒲柳に先つ。』
傷む時の軍乏に苦み、一物も官盡く取ることを。

嗟爾江漢人。生成復何有。
有同枯櫻木。使我沈嘆久。
死者卽已休。生者何自守。』
啾啾黃雀啄。側見寒蓬走。
念爾形影乾。摧殘沒藜莠。』

嗟爾江漢の人、生成復何か有る。
枯櫻の木に同じき有り、我をして沈嘆すること久しからしむ。
死せる者は卽ち已に休せり、生者は何ぞ自ら守らむ。』
啾啾として黃雀啄む、側に寒蓬の走るを見る。
念ふ爾が形影乾きて、摧殘せられて藜莠に沒せむことを。』

【字解】【一】蜀門　蜀の地をさす。【二】櫻樹　「しゆろ」の木。【三】十八九　十中の八九。【四】割剝　ささはぐ。【五】衆　樹の多きこと。【六】布　敷に同じ。【七】如雲葉　ひろがつた葉をいふ。【八】歲寒　冬がれ。【九】交横　葉影がみだれよこたはるをいふ。【一〇】集斧斤　なの、まさかりがこの樹に向つて集められる。【一一】凋喪　しぼみ、うしなはれる。【一二】蒲柳　かはやなぎ。【一三】傷　作者が心中にいたむ。【一四】時　時世をいふ。【一五】軍乏　軍需の缺乏。【一六】江漢　蜀の地をさす。【一七】生成　耕作してでかした物をいふ。【一八】同枯櫻木　このしゆろがきりとられるとおなじやうに物をとりあげられる。【一九】沈嘆　しづみなげく。【二〇】死者　死んだ人。【二一】生者　生存してゐる人。【二二】自守　守とは維持してゆくをいふ。【二三】啾啾　とりのなくこゑのさま。【二四】啄　物をついばむ。【二五】寒蓬　冬がれのよもぎの葉、「啾啾」二句は黃雀の居る場所をいふ、卽ち下の藜莠といふとおなじ、仇注に雀啄=櫻毛=云云といへる說は余之を取らず。【二六】爾　しゆろをさす。【二七】藜莠　あかざ、わるいくさ。

【題義】かれた「しゆろ」の樹についてよめり。人民の誅求されることをあはれむなり。

【詩意】蜀の地には「しゆろ」が多く、高きものが十中に八九である。その皮はひどくはがれる、それ

で樹は多くてもすぐに朽ちやすい。冬枯れののちに雲の如くひろがつた葉を青青と敷いてはゐるが、そのみだれた葉影に向つて斧や斤が集中され、蒲柳にさきだつてこの樹はしぼみなくなつてしまふ。』自分は心にいたむ、今の時世は非常に軍需の缺乏してゐるときで、一物たりとも官がみな取りあげてしまふ。ああ、なんぢ江漢の流るる蜀地の人民よ、汝等は自分の手で作りあげた物とてはどんなものをもつてゐるか、なにもあるまい、恐くはこの「しゆろ」の運命と同じものが有るであらう。このことが自分をして久しくなげかしめる所以である。こんなことでは死んだ人はそれで終つたとして、まだ生きのこつてゐる人はなにによつて自己を維持してゆくことができようか。』地上で黄雀がちやくやとなきながら物をついばんでをる。そのそばには冬枯れのよもぎが飛び走るのを見うける。念ふになんぢ「しゆろ」は形影が乾いてしまひ、擺きそこなはれて藜や莠のなかに倒れておちこんでしまふことであらう。

枯枏

楩枏枯崢嶸。鄉黨皆莫記。
不知幾百歲。慘慘無生意。

枯枏

楩枏枯れて崢嶸たり、鄉黨皆記する莫し。
知らず幾百歲なるを、慘慘として生意無し。

上枝摩蒼天。下根蟠厚地。
巨圍雷霆拆。萬孔蟲蟻萃。
涷雨落流膠。衝風奪佳氣。
白鵠遂不來。天鷄爲愁思。
猶含棟梁具。無復霄漢志。
良工古昔少。識者出涕淚。
種榆水中央。成長何容易。
截承金露盤。裊裊不自畏。

上枝は蒼天を摩す。下根は厚地に蟠る。
巨圍、雷霆拆く、萬孔、蟲蟻萃る。
涷雨、流膠を落す、衝風、佳氣を奪ふ。
白鵠遂に來らず、天鷄爲に愁思す。
猶含む棟梁の具、復霄漢の志無し。
良工、古昔少し、識者、涕淚を出す。
榆を種う水の中央、成長何ぞ容易なる。
截りて金露盤を承けしむ、裊裊として自ら畏れず。

【字解】【一】楩　くねぎ。【二】枏　「くす」のたぐひ。【三】崢嶸　たかき貌。【四】鄉黨　鄉黨の人人。【五】記　記憶する。【六】慘慘　みじめ。【七】巨圍　大なるまはり。【八】萃　あつまる。【九】涷雨　夏のにはかあめ。【一〇】流膠　膠は樹液をいふ。【一一】衝風　はげしいかぜ。【一二】佳氣　よい氣象。【一三】白鵠　しろいおほとり。【一四】天鷄　きじの類。【一五】棟梁具　むなぎ、はり、のうつは。【一六】霄漢志　あなぞら、あまのがはら、をしのぐ志。【一七】良工　よいだいく。【一八】古昔　むかし、この樹の枯れし時をさす。【一九】識者　この樹の材能を知れるもの。【二〇】榆　「にれ」。【二一】截　「にれ」をきる。【二二】承　それでうけさせる。【二三】金露盤　銅で作つた天露をうける大たらひ、漢の武帝神仙の說を信じて仙人の承露盤を作り銅柱を建ててそのうへにおく。【二四】裊裊　なよなよとした貌。【二五】不自畏　自己の弱さ

をおそるるを知らざるなり。

【題義】かれた「くす」の木のことをよめり。けだし「くす」を以て自ら比す。

【詩意】楩柟の樹が枯れながらもたかくたつてをる。いつかれたのか郷黨の人人もおぼえてゐぬ。もうなん百年たつか、みじめにも全く生き生きとした意がない。』上の枝はあをぞらをこすり、下の根はあつい大地にわだかまつてゐたが、その大きなまはりの幹は雷霆にさかれ、多くの孔には蟻むしなどがあつまつた。にはか雨は樹のやにしるを落してしまひ、はげしく吹く風は佳い氣象を奪ひとつてしまつた。それで白鶴も來ぬし、天鷄もそのために愁へてをる。』が、まだ棟梁たる器はもつてゐるものの、ふたたび霄漢をしのぐ樣な志は無い。むかしこの樹を知る良工はなかつた、たまに眼識あるものはこの樹を見てなみだをながして之に同情した。』「くす」は材能がありながらこんなだが、楡はどうだ。楡は之を水のまんなかにうゑればたやすく生長する。それを截り、それで銅製の承露盤を承けささへさせる。すると厚顏にも楡はなよなよとしたすがたでとても盤をささへきれぬにきまつてゐる技量でありながらおそるる色もなくその任をなさうとしてゐる。』

不見[一]

不見李生久。[二]佯狂眞可哀。李生を見ざること久し、佯狂、眞に哀む可し。

世人皆欲殺。[三]吾意獨憐才。[四]世人皆殺さむと欲す、吾が意獨り才を憐む。

敏捷詩千首。[五]飄零酒一杯。敏捷、詩千首、飄零、酒一杯。

匡山讀書處。[六]頭白好歸來。[七]匡山讀書の處、頭白好し歸り來れ。

【字解】【一】不見　首句の不見李生の不見の二字をとる。【二】李生　李白なり、白、夜郎に流されてのちの消息を詳にせず、作者因つて之をおもふ。【三】佯狂　いつはりて狂人のまねする。【四】殺　白を殺す。【五】才　白の才。【六】敏捷　すばやし。【七】飄零　おちぶれる。【八】匡山　白は蜀の綿州彰明縣青蓮鄉の人、縣南に大匡山あり、白の書を讀みし處なりといふ。（一說に彰明縣の匡山には非ずして九江の匡廬山、卽ち廬山のことなりといふとなせり。）【九】頭白　李白の老いたるをいふ。【一〇】歸來　匡山へかへつてこい。

【題義】久しく李白を見ざるによりその身のうへをおもうて作る。上元二年の作ならん。

【詩意】自分は久しく李白にあはぬ。白は狂人のまねをしてをるがじつにきのどくなものである。世間の人は彼をねたんで之を殺さうとまでしてをるが、自分だけは彼の才を愛してをる。彼は詩才すばやくて忽ち千首の詩をつくりだす、それがおちぶれてはただ一杯の酒にうれひをやる。匡山にはむかし書を讀んだところがある。老境となつてははやくそこへ立ちかへつてくるがよいとおもふ。

草堂卽事[一]

荒村建子月。獨樹老夫家。
雪裏江船渡。風前竹徑斜。
寒魚依密藻。宿雁聚圓沙。
蜀酒禁愁得。無錢何處賒。

【字解】〔一〕草堂　浣花溪の草堂。〔二〕即事　事につけてそのままのぶ。〔三〕荒村　くさふかき村、浣花村をいふ。〔四〕建子月　肅宗の上元二年九月、詔して上元の號を去りて元年と稱し、十一月を以て歳の首とし、月は北斗の柄の建つ所の辰を以て名とす建子月の壬午朔日に天子朝賀を受くること元旦の儀のごとし。〔五〕獨樹　一本木。〔六〕老夫　自己をいふ。〔七〕寒魚　ふゆのうを。〔八〕密藻　しげつた水草。〔九〕禁　當の義。〔一〇〕賒　かけ買ひする。

【題義】浣花の草堂にてをりにふれてよめる詩。上元二年十一月の作。

【詩意】時はくさふかき村の建子の月。處は一本木の立つてゐるこのおやぢの家。みれば雪のふるなかに江船がとほり、風の吹くところに竹林のこみちが斜についてゐる。うをは寒さをよけるためにしげつてゐる藻によりそひ、ゆうべからとまつてゐる雁は圓形の沙はらに聚つてゐる。このとき蜀の酒をのめば心配ごとに抵抗するに足るのであるが、錢が無くてはどこで買はう樣もない。

徐九少尹見過

徐九少尹過らる

晚景孤村僻。行軍數騎來。晚景、孤村僻なり、行軍、數騎來る。
交新徒有喜。禮厚愧無才。交り新にして徒に喜び有り、禮厚くして才無きを愧づ。
賞靜憐雲竹。忘歸步月臺。靜を賞して雲竹を憐み、歸るを忘れて月臺に步す。
何當看花蘂。欲發照江梅。何か當に花蘂を看るべき、發かむと欲す照江の梅。

【字解】〔一〕徐九少尹　少尹徐某なり、成都は南都として都のあつかひをうくる故に府の長に尹が一人、次に少尹が二人おかれた。この詩題には少尹とあつて詩の本文には行軍とあるはその時兵亂のため臨時に兼れしならんといふ。〔二〕見過　よりみちしてくれた。〔三〕晚景　ゆふ日のひかり。〔四〕行軍　行軍司馬の官、徐少尹をさす、事は上にみゆ。〔五〕何當　何は「何ノ時」をいふ。〔六〕花蘂　梅の花をいふ。〔七〕發　開く。〔八〕照江梅　草堂に江にのぞんだところに梅樹あるなり、花さけば江水にうつろふゆゑに照江といふ、末二句は梅花のころまたおいでなさいとのさそひなり。

【題義】成都府の少尹徐某がたづねてくれたについてよめり。上元二年冬の作。

【詩意】夕日のさすころ浣花の孤村はかたよつてゐるのに徐君のおともをして行軍司馬の二三の騎兵がやつてきた。君とはちかごろの交際であるが自分は非常に喜ばしくおもひ、ただその喜びにむくゆることのできないのを氣にしてをる。君は自分に對して禮遇を厚くしてくれるが自分は之に應ずるだけの才の無いのをはづかしくおもうてゐる。君は草堂の景色の靜なのを賞しては雲のよこたはる竹を愛し、家にかへることを忘れては月をながめる臺のうへをあるいたりする。わが草堂の江ぞひの梅も

やがてひらかうとするが、君はいつまたその花を見にきてくださるだらうか。

范二員外邈・吳十侍御郁・特枉駕・闕展待・聊寄此作

范二員外邈・吳十侍御郁・特に駕を枉ぐ。展待を闕く。聊か此の作を寄す

暫往比隣去。空聞二妙歸。暫く比隣に往き去る、空しく聞く二妙の歸るを。
幽棲誠簡略。衰白已光輝。幽棲誠に簡略なり、衰白已に光輝あり。
野外貧家遠。村中好客稀。野外、貧家遠く、村中、好客稀なり。
論文或不媿。重肯款柴扉。論文或は媿ぢざらむ、重ねて肯て柴扉を款かむや。

【字解】〔一〕范二員外邈　員外は官人の稱。〔二〕吳十侍御郁　侍御史吳郁。作者さきに「吳侍御江上宅」の詩あり。〔三〕枉駕　わざわざたづねてくれる。〔四〕展待　接待する義ならん。〔五〕比隣　隣家をいふ。〔六〕二妙　晉の衛瓘、索靖、俱に草書を善くす、時人之を二妙と號す、ここは范吳の二人をさす。〔七〕幽棲　草堂をいふ。〔八〕簡略　不在なりし故に客に對する禮、疎略なり。〔九〕衰白　自己の老境をいふ。〔一〇〕光輝　先方が來てくれたは自己にとりひかりをそへる。〔一一〕好客　よき賓客。〔一二〕論文　文章のことについて評論する。〔一三〕不媿　先方の期待に對してはぢぬ、自任する所あるなり。〔一四〕款　たたく。

【題義】范邈・吳郁の二人がわざわざたづねてくれたところ、よそへ往つてゐてもてなしの禮をかいたによつてこの詩をつくつてそれを先方へやつた。上元二年の作。

【詩意】自分はちよいと近所へでかけていつた。ところが家へもどつてみればはやおふたりのれきがおかへりになつたとのことだ。このわびずまひでは諸君に對しまことに簡略にすぎた、しかしこのおやぢにとつてはじつにひかりをそへたのである。この貧乏家は野外にあつて遠く、村中にはよいお客はめつたにない。もし文章について論ぜらるるならば或は諸君に媿ぢぬかもわからぬ、どうかもう一度わが柴のとびらをおたたきくださるおつもりはありませぬか。

王十七侍御掄・許攜酒至草堂・奉寄此詩・便請邀

高三十五使君同到

王十七侍御掄・酒を攜へて草堂に至るを許す。此の詩を寄せ奉り、便ち高三十五使君を邀へて同じく到らむことを請ふ

老夫臥穩朝慵起。老夫、臥穩にして朝起きるに慵し、
白屋寒多暖始開。白屋、寒多くして暖にして始めて開く。
江鶴巧當幽徑浴。江鶴巧に幽徑に當つて浴す、
隣雞還過短墻來。隣雞還短墻を過ぎ來る。

【字解】〔一〕王十七侍御掄　侍御史王掄。〔二〕高三十五使君　蜀州の刺史高適、使君は刺史の敬稱、適はこのころ何かの事について成都へでてきてゐたものとみえる。〔三〕老夫　自己をさす。〔四〕白屋　白茅もて

繡衣屢許攜家醞。　繡衣屢許す家醞を攜ふるを、
皂蓋能忘折野梅。　皂蓋能く忘れむや野梅を折ることを。
戲假霜威促山簡。　戲れに霜威を假りて山簡を促し、
須成一醉習池迴。　須らく一醉を成して習池を迴るべし。

【題義】侍御史王掄が酒をもつて草堂へくることを承諾してゐたについて、此の詩をやり、高適をもついでによんで一しよにきてもらひたいといひやつた詩。上元二年冬成都での作。

【詩意】自分はおだやかに臥てゐられるので朝は起きるのがものうく、この貧乏家屋は寒さが多いから、日がのぼつてあたたかになつてからやつと開くのである。みれば江の鶴がこみちにあたつたところで巧に浴みしてをり、となりの雞もまたひくいかきねをこしてこちらへやつてくる。繡衣を著てゐる王君、君はてづくりの酒をもつてくることをたびたび自分に約束した。皂蓋の車にのつてゐる高君もよもやわしのうちへ野梅を折りにくることを忘れはすまい。これはじようだんながらどうか御史の御威光をかりて山簡ともいふべき高適をうながして、わたしのところで一醉して習池のあたりをめぐるべきではござらぬか。

王竟攜酒。高亦同過。共用寒字

王竟に酒を攜ふ、高亦同じく過る、共に寒の字を用ふ

臥病荒郊遠。通行小徑難。　臥病、荒郊遠し、通行、小徑難し。
故人能領客。攜酒重相看。　故人能く客を領す、酒を攜へて重ねて相看る。
自愧無鮭菜。空煩卸馬鞍。　自ら愧づ鮭菜無きを、空しく煩はす馬鞍を卸すを。
移樽勸山簡。頭白恐風寒。　樽を移して山簡に勸む、頭白恐らくは風寒ならむ。

【原注】高詩云、汝年幾小、且不必小於我、故此句戲之。

【字解】〔一〕王　王掄。〔二〕高　高適。〔三〕故人　舊友、王掄をさす。〔四〕領客　客をひきつれる、客は高適をさす。〔五〕鮭菜　魚、野菜。〔六〕卸　おろす。〔七〕山簡　前詩にみゆ。高適をさす。〔八〕頭白　適が老いたるをいふ、「原注」の意は、適がふだん作者を年よりといひをれるによつて、作者はこの詩に於て適を老なりといひてたはぶれしなり。

【題義】前詩の結果、王掄はとうとう酒をもつてき、高適もともにやつてきた。みなが「寒」の字をつかつて詩を作つた。卽ちこれである。此詩「風寒」と「寒」の字を用ひたり、王・高もまた然りし

ふきたるやれの家。〔四〕鶴　こうのとり。〔六〕繡衣　御史のきるもの、王侍御をさす。〔七〕家醞　てづくりのさけ。〔八〕皂蓋　くろいろの車蓋、漢制に二千石（地方の長官）は皂蓋、朱、兩幡とみゆ、高適をさす。〔九〕能忘　能の字反語によむ。〔一〇〕折野梅　自宅の梅を折りにくるをいふ。〔一一〕霜威　御史の威をいふ、御史刑罰の權あるにより之を霜の草木をからすに比す、これ王侍御をさす。〔一二〕山簡　晉の時襄陽を管せし人、襄陽に習氏あり、土豪にして園池あり、山簡つねに池上に至りてあそぶ、之を高陽池とよべりと。〔一三〕習池　習家の池なり、上にみゆ、これ作者自家の池をあてい へり。

なり。

【詩意】自分の臥てゐるくさむらの野外は城から遠い。自分のところへくるには小みちはとほるにもなんぎである。こんなところへわが舊友(王)はお客(高)をつれて酒をもつてまたやつてきた。自分のところには鮭菜のもてなしの無いことは愧かしい。いたづらに諸君に馬鞍をおろさせただけのことである。時に酒だるを處處に移して高適にすすめる。おまへは年よりで頭が白いから多分風がつめたく感ずるであらう、と。

陪李七司馬皂江上觀造竹橋。即日成。往來之人。免冬寒入水。聊題短作。簡李公

李七司馬に陪し、皂江の上に竹橋を造るを觀る。即日成る。往來の人、冬寒に水に入るを免る。聊か短作を題し、李公に簡す

伐竹爲橋結構同。
裳裳不涉往來通。
天寒白鶴歸華表。
日落青龍見水中。
顧我老非題柱客。
知君才是濟川功。
合歡却笑千年事。
驅石何時到海東。

竹を伐り橋と爲す結構同じ、
裳を褰げて涉らず往來通ず。
天寒くして白鶴、華表に歸り、
日落ちて青龍、水中に見ゆ。
顧ふ我が老いて題柱の客に非ざるを、
知る君が才是れ濟川の功。
合歡却つて笑ふ千年の事、
驅石何の時か海東に到らむ。

【字解】〔一〕李七司馬　蜀州の司馬李某。〔二〕皂江　一に郫江といひ新津縣にありといふ。〔三〕短作　この八句の詩をさす。〔四〕李公　李司馬。〔五〕結構同　木にてかまへたるものと同じ。〔六〕裳裳不涉　不褰裳而涉　とかくべきを上のごとくかけるなり、これまでではもすそをかかげてかちわたりする必要ありしに、今はしかせず。〔七〕天寒一句　「異苑」にみえたるはなし。晉の太康二年の冬大に雪ふる、南洲の人、二白鶴の橋下に語るを見る、曰く、今茲の寒さは魏の崩ぜし年に減ぜざるなりと、是に於て飛び去る。華表は「とりゐ」のことなるが、ここは橋柱の義として用ひたり。〔八〕顧　顧み念ふなり。〔九〕題柱客　漢の司馬相如が故事。相如蜀を去り長安にゆかんとするとき橋柱に題して高車駟馬に乘らずんばふたたびここを過ぎずといへり。ここは出世する義でなく柱に題して橋の成れる頌文でも作ることの義に用ひしなるべし。〔一〇〕濟川功　尚書の「說命」に　若濟巨川、用汝作舟楫　とみゆ、橋をかけしことなれば川をわたすの功ありといふなり。〔一一〕君　李をさす。〔一二〕合歡　橋の成れるを祝して主客ともによろこぶこと。歡の字一に觀に作る、合觀は主客ともにこの橋の成れるをみることなり。〔一三〕千年事　千年まへの昔のこと、即ち次句のこと。〔一四〕驅石一句　「齊地記」といふ書に、秦の始皇石橋を作り、海を過ぎて日の出づる處を觀んと欲す、神人あり、能く石を驅りて海に下す、石の去ること速ならざれば神之を鞭つ、石皆血を流す、といへる話あり。こんな話はあるがその石が海東に到る時節は有るまじ、といふなり。

【題義】李司馬のともをして皂江のほとりで竹の橋を造るのをみた。橋はその日のうちにできた。往來の人は冬の寒いときにも水にはひらなくともよくなつた。それで聊かこの短い詩を題して李君のと

ころへてがみ代りにやつた。上元二年の冬、蜀州にての作。

【詩意】このたび竹をきりとつて橋をこしらへたが、竹橋でもそのしくみは木の橋と同じことである。これでもすそをかかげてかちわたりする必要もなく往来が通じたのである。さて橋ができてみると昔ばなしの様に天の寒いとき白い鶴がおりてきて柱のところで話することもあらう。夕日の落つるころには橋のかげがうつつて青い龍が水中にあらはれたかとみまがふ様なこともあらう。かへりみて念ふに橋のおいはひの詞でものぶべきであるが自分は年老いてむかし橋柱に題したといふ司馬相如のごとき文才あるものではない。しかし君は大才をもつてじつに川をわたすの功をたてられたことはわかつてゐる。いまとなつてはみんなが橋をみてうちよろこび、昔の秦の始皇の話などをばからしいという笑ふ、それはなんで石を驅りたてて海へやつてそれで橋を作らうとしたところで、その石が海の東までゆきつく時節はあるまい、といふのである。この竹橋はそんなこと以上なのである。

観作橋成月夜舟中有述。還呈李司馬

橋を作りて成るを観る。月夜舟中述ぶる有り。還りて李司馬に呈す

把燭橋成夜。迴舟客坐時。燭を把る橋成るの夜、舟を迴らす客の坐する時。

天高雲去盡。江迴月來遲。天高くして雲去り盡し、江迴にして月來ること遲し。

衰謝多扶病。招邀屢有期。衰謝多く病を扶く、招邀屢期有り。

異方成此興。樂罷不無悲。異方此の興を成す、樂み罷みて悲み無くんばあらず。

【字解】【一】述　詩をつくりしこと。【二】把燭　ともし火をとつて夜まで宴する。【三】迴舟　舟をもどすこと。【四】客　すなはち作者。【五】衰謝　謝もまた衰へ凋むこと。【六】扶病　病體を人手によつてたすけてもらふ。【七】招邀　まねきむかへる。【八】期　時期。【九】異方　他郷。

【題義】竹橋を作りてそれのできあがるのを観て、祝宴に、月夜舟のなかで詩をつくつたが、かへつてからまたこの詩を作つて李司馬にたてまつつた。

【詩意】橋ができあがつた夜に燭火をとつて宴をした。さうして舟中にすわりながらもどらうとした。その頃は天が高く雲はすつかりなくなり、江の水面はるかに月はなかなかでてこない。自分は老衰のもので多くは病體を人にたすけられてでかけるのであるが、たびたびお招きにであひ、まことにありがたくおもふ。ただ他郷でこの様なおもしろさをすると、樂みがすんでからとかく悲みのこころが無いわけにはゆかぬ。

李司馬橋成承高使君自成都回

題作橋成月夜舟中有述還呈李司馬橋成承高使君自成都回

李司馬の橋成る。承く高使君成都より回ると

向來江上手紛紛。　向來、江上、手紛紛たり、
三日功成事出羣。　三日、功成る、事羣を出づ。
已傳童子騎青竹。　已に傳ふ童子、青竹に騎り、
總擬橋東待使君。　總て橋東に使君を待たむと擬す。

【題義】李司馬の竹橋ができあがつた。このとき高使君が成都からもどるといふことをきいた。上元二年冬、蜀州にての作。

【詩意】さきごろから江のほとりで橋をつくる人夫等の手が紛紛と多くはたらかされたが、三日で功が成り、その事たる拔羣のできである。はやくもこどもたちが竹馬にのつて、みんなこの橋の東でこんどおかへりになる長官高君をお待ちしようとまちかまへてゐるといふことだ。（司馬の功をさらに刺史へ歸せしめたるなり。）

【字解】〔一〕李司馬橋　まへの竹橋をいふ。〔二〕承　てがみをもらつたこと。一本にこの承の字なし、有るも可、無きも可。〔三〕高使君　高適。〔四〕回　蜀州へもどつてくる、作者蜀州にての詩なり。〔五〕向來　さきごろから。〔六〕江上　息江のほとり。〔七〕手　工人の手。〔八〕紛紛　みだるる貌、多きをいふ。〔九〕童子騎青竹　青竹とは竹馬をいふ、故事あり、後漢の郭伋、并州の牧と爲り、始めて并州にいたりて管内をめぐり河西の美稷に至りしに、童兒數百竹馬に騎りて之を迎へ曰く、使君到るときき喜ぶ、故に來り迎ふと。〔一〇〕使君　高適をさす。

入奏行。贈西山檢察使竇侍御

竇侍御。
驥之子。
鳳之雛。
年未三十忠義俱。
骨鯁絶代無。
炯如一段清冰出。
萬壑。
置在迎風露寒之
玉壺。
蔗漿歸廚金盌凍。
洗滌煩熱足以寧。
君軀。

入奏行、西山檢察使竇侍御に贈る

竇侍御は、
驥の子にして、
鳳の雛なり。
年未だ三十ならず忠義俱なり、
骨鯁、絶代無し。
炯として一段の清冰、萬壑より出で、
置かれて迎風露寒の玉壺に在るが如し。
蔗漿、廚に歸して金盌凍る、
煩熱を洗滌して以て君軀を寧んずるに
足れり。

【字解】〔一〕入奏行　竇某が朝廷にいつて政情を奏上するのを送るうた。〔二〕西山檢察使　臨時におかれた官名、西山の地方を檢察する使者、西山は即ち雪嶺、吐蕃の境に接するを以て其地方を檢察するとみゆ、ただその職は糧食を運ぶにあり。〔三〕竇侍御　侍御史竇某、侍御史でありながら檢察使となりしなり。〔四〕驥之子、鳳之雛　年わかくすぐれたるをいふ。〔五〕忠義俱　忠と義とをあはせて有す。〔六〕骨鯁　鯁とは魚の骨なのどにたてることなり、忠臣は君の耳に逆ふ言をなす、故に之を骨鯁にたとふ。〔七〕炯　かがやくさま。〔八〕一段　一かたまり。〔九〕迎風露寒　ともに廣の宮殿内の館の名なり。〔一〇〕玉壺

政用疎通合典則。
戚聯豪貴耽文儒。』
兵革未息人未蘇。
天子亦念西南隅。
吐蕃憑陵氣頗麤。
寶氏檢察應時須。
運糧繩橋壯士喜。
斬木火井窮猿呼。
八州刺史思一戰。
三城守邊却可圖。
此行入奏計未小。
密奉聖旨恩宜殊。』
繡衣春霄漢立。
綵服日向庭闈趨。
省郎京尹必俯拾。
江花未落還成都。』
江花未落還成都。
肯訪浣花老翁無。
爲君酤酒滿眼酤。
與奴白飯馬青芻。』

政、疎通を用ふるは典則に合す、
戚、豪貴に聯りて文儒に耽る。』
兵革未だ息まず人未だ蘇せず、
天子亦念ふ西南の隅。
吐蕃憑陵、氣頗る麤なり、
寶氏檢察、時の須めに應ず。
糧を繩橋に運べば壯士喜び、
木を火井に斬れば窮猿呼ぶ。
八州の刺史、一戰を思ふ、
三城、邊を守る、却つて圖る可し。
此の行、入奏、計未だ小ならず、
密に聖旨を奉ず、恩宜しく殊なるべし。』
繡衣春霄漢に當つて立つ、
綵服日に庭闈に向つて趨す。
省郎京尹必ず俯して拾はむ、
江花未だ落ちず成都に還らむ。』
江花未だ落ちず成都に還らむ、
肯て浣花の老翁を訪はむや無や。
君が爲に酒を酤ひ滿眼酤ひ、
奴には白飯を與へ馬には青芻。』

玉でつくつたつぼ。【二一】 蔗漿 さたうきびの汁。【二二】 歸廚 だいどころにもちきたさるるといふ。【二三】 金盌 黃金の「わん」。【二四】 凍 こほる、つめたきといふ。【二五】 洗蒸煩熱 あつくるしさをあらひそそぐ。【二六】 孝 やすんずる。【二七】 君軀 天子のおからだ。【二八】 政用疎通 政のしかたが上下人情のよくかよひとほる樣にすること。【二九】 典則 古代の法則。【三〇】 戚聯豪貴 權勢富貴の家と親戚の關係がつながつてゐる。【三一】 耽文儒 文學の儒者の爲す事をひどく愛する。【三二】 兵革 兵亂のこと。【三三】 息 やむ。【三四】 蘇 よみがへる。【三五】 西南隅 蜀の地方。【三六】 吐蕃 西藏の夷種。【三七】 憑陵 惡氣の盛なる貌、【三八】 麤 大なること。【三九】 竇氏 竇侍御【三〇】 檢時須 須は需望なり、時の人がいりようとする所に應じた。【三一】 繩橋 竹又は藤のなはにて吊るしたはし、茂州汶川縣の西北にあり、吐蕃への通路にあたる。【三二】 壯士 兵卒。【三三】 斬木火井 火井のある地方に於て樹木をきりひらく、木をきるは道路を通ずるなり、火井は鹽井にて火を投ずれば水もゆといふ、蓬州にありといふ。【三四】 窮猿呼 木をきられては「さる」もこまつてなく。【三五】 八州 松維恭蓬雅黎姚悉の八州。【三六】 刺史 州の長官。【三七】 一戰 吐蕃に對して一どたたかふ。【三八】 三城 松維保の三州の城。【三九】 守邊 吐蕃と接したくにさかひを守る。【四〇】 寄奉聖旨 天子のおほせごとをひそかにうけて出かけてきたこと。【四一】 恩宜殊 入奏の後は天子の御恩寵が特別に加はるであらう。【四二】 繡衣 御史の服。【四三】 霄漢 あをそら、あまのがは、朝廷の高き地をさす。【四四】 庭闈 家庭。（同上詩をみよ。）【四五】 省郎 本省の郎官。【四六】 江花 江邊の花、之を荷の花とする說あるも從はず。【四七】 京尹 京都の長官。（浦氏は之を必ず成都尹の官をみよ）。【四八】 俯拾 之を得るの容易なるをいふ。【四九】 浣花老翁 自己をさす。【五〇】 浣 洗氏は滿眼は滿前なり、酤は一宿酒なり、とせり。別說に蜀の酒は竹筒にもる、筒の上部繩にてつるすため孔をうがつ、之を眼といふ、滿眼とは孔のところまで酒をみたすをいふと、余は滿眼の

字義は仇氏に從ふ、滿眼酤の酤字は上の酤酒の酤とおなじく「酒を買ふ」義とみる、一宿酒とはみなさず。【三三】 奴　めしつかひ。
【三四】 匏　わら、青匏は青いくさ。

【題義】 侍御史で西山檢察使として蜀へ來てゐた竇某が朝廷へ報告のためかへるので、それに贈つた詩。寶應元年春の作なるべし。

【詩意】 竇侍御は千里馬の子、鳳皇のひなともいふべき人で、年は三十にならぬが忠義を兼ねた人であり、その骨つぽいことは世に絕えて無い。君はたとへば萬壑の間から一かたまりのきれいな冰をだして、それを迎風・露寒等の館の玉壺のなかに置いた樣にかがやいてゐる。この冰塊があれば臺所にもちきたされた砂糖汁の金盌もつめたく凍り、天子がそれをおのみになればあつくるしさを洗ひさつてそのおからだをやすらかにすることができるのである。君は熱を洗ふ冰である。君は政をするのに人情を疎通させる方法を用ひてをるのは古法に合したものである。君は權貴の家と親戚であるにかかはらず學者好きである。』 いま天下にいくさがやまず人民がよみがへるに至らぬので、天子も西南地方（蜀）のことをお念ひになつた。吐蕃の勢力が強く其の氣が大きくこちらをも侵略せんとしてゐる、このとき竇君がこちらを檢察されたのは時の需用に應じたものだ。だから君が繩橋方面へ糧食を運べば兵卒も喜び、火井の地方に樹木をきりひらけば猿もなきかなしむ。また八州の刺史たちもこれならば吐蕃と一戰してもよいとおもひ、或は三城の方面もそこを吐蕃に對して守るといふことも

くはだてることができるのである。君が此の行、中央に入つて天子に奏上されることは其計たる小なるものではない、すでに仰せをうけてこられたのであるから報告の結果は天子の君に對する御恩寵は特別なものがあるであらう。』 君はいま繡衣をつけて春、霄漢のごとく高き朝廷に於て立たれる、また老萊子の如き五綵の服をつけて御兩親の庭門に向つておもむかれる。定めし本省の郎官、京都の長官の地位は俯して地上の物をひろふごとくたやすく得らるるであらう。そしてここの江べりの花がまだ落ちぬうちにまたこの成都へおかへりになるであらう。』 成都へかへられたときにはこの浣花溪のおやぢをおたづねくださるおぼしめしがありますか。わたくしはおたづねくださるそのときには眼前あふるるばかり多くの酒を買ふでありませう。それからあなたのしもべには白いご飯をたべさせてやり、あなたの馬には青い草をたべさせてやりませう。』

得廣州張判官叔卿書使還以詩代意

廣州の張判官叔卿が書を得たり。使還るとき、詩を以て意に代ふ

鄉關胡騎滿。宇宙蜀城偏。
忽得炎州信。遙從月峽傳。

雲深驃騎幕。夜隔孝廉船。雲は深し驃騎の幕、夜隔たる孝廉の船。
却寄雙愁眼。相思淚點懸。却つて寄す雙愁眼、相思、淚點懸る。

【字解】【一】廣州　廣東にあり、唐にては中都督府をおく。【二】叅判官叔卿　都督の判官たる張叔卿、叔卿は魯人、作者の「雜述」・舊唐書の李白傳にみゆ。【三】鄉關　長安・洛陽をさす。【四】胡騎　安・史の賊騎。【五】宇宙　天地。【六】蜀城　成都。【七】個　かたよる。【八】夔州　熱帶地方、廣州をさす。【九】信　てがみ。【一〇】月峽　明月峽なり、蜀の三峽の始。【一一】驃騎幕　張判官の居處をいふ、驃騎は驃騎將軍、漢時の官名、霍去病之に任ぜらる、今廣州の都督をさす、判官は都督の屬官なれば幕といふ、都督の幕府に參するをいふ。【一二】孝廉船　考廉は科目の名、孝廉の科に擧げられたる人を孝廉といふ、一故事あり、張憑といふもの丹陽尹劉惔に謁して留まり宿し明日船にかへる。しばらくして惔、張孝廉が船をもとめしめ、召して之と同じく載す、時の人之を榮とす、と。今同姓の故事を用ひ張叔卿が船をさして孝廉船といへり。此句によるに張或は明月峽のあたりに船を泊して使を以て書を作者によせしものか、身、廣州に在るには非るべし。【一三】雙愁眼　愁をおびたる左右のめ。【一四】淚點　なみだのぼちぼち。【一五】懸　まなこにぶらさがる。

【題義】廣州都督府の判官張叔卿のところから使ひが手紙をもつてきた。使ひがかへるとき自分はこの詩を作つて返事の意をのべるに代へた。（多分張は三峽の入りくちのあたりから使ひをだしたものとみえる。）

【詩意】自分の故郷の方はいま賊軍がみちてゐる。天地のうちで自分のゐる蜀の城（成都）はかたよつたところだ。そこへにはかに熱帶地方からの手紙を得た。それははるかに蜀の東なる明月峽の方から傳はつてきた。君の居る驃騎將軍の幕府は雲がふかくとざしてゐる。君の乘つてゐる孝廉の船は夜にあたつて遠くへだたつてゐる。それでこの詩をやらうとおもうて左右のわが愁をふくんだ眼を君の方へむけると相思の情がわいてきて淚のしづくがぶらさがるのである。

魏十四侍御就敝廬相別　魏十四侍御敝廬に就きて相別る

有客騎聰馬。江邊問草堂。客有り聰馬に騎り、江邊に草堂を問ふ。
遠尋留藥價。惜別倒文場。遠く尋ねて藥價を留め、別を惜しみて文場に倒る。
入幕旌旗動。歸軒錦繡香。入幕、旌旗動き、歸軒、錦繡香し。
時應念衰疾。書疏及滄浪。時に應に衰疾を念ひて、書疏、滄浪に及ぶべし。

【字解】【一】魏十四侍御　侍御史魏某。【二】敝廬　草堂をいふ。【三】相別　わかれること、魏は何のためにどこへゆくのかさらに知れず、第五句に入幕とあればどこぞの幕僚として赴くものとみゆ。【四】驃騎馬　桓典が故事、御史をいふ、已に屢〻みゆ。【五】留藥價　藥の代だというて金錢をおいていつてくれること。【六】倒文場　文章のにはに於て酔ひ倒れること。仇注に意氣傾倒於文場」とあれど通ぜず、楊注に傾倒其詩章」などいへどいよいよ通ぜず、余は愚見を持す。或は倒を到とし、到文場」にて草堂へ來たことをいふとす、しかし上に問草堂といひ、遠尋といひ、更に到文場といふはくどし。【七】入幕　武官の幕府にはひる。【八】旌旗動　はたをたててゆくなり。【九】歸軒　故郷の方へかへる車。【一〇】錦繡香　仇氏は御史は繡衣をきるゆゑ錦繡といふといへる

もこれは衣ゝ錦舞ゝ郷の意を用ひしものならん。【一二】衰疾　老衰、疾病、自己のさま。【一三】書疏　てがみ。【一四】滄浪　浣花溪をさす、作者の句に百花潭水即滄浪とあり。

【題義】侍御史魏某が自分のいほりへわざわざいとまごひにきてくれた。寶應元年草堂にての作。

【詩意】駿馬にのつたお客さまが江のほとりに我が草堂をたづねてきた。遠くからたづねて來て藥を買ふ代金を置いていつてくれ、別れを惜みては文章のにはに於て醉をつくしてよひたふれる。（まことにその親切なことをよろこぶ）君は幕に入るためにゆくので已に旌旗がうごきだし、また故郷へかへる車には錦繡の衣がかんばしくにほうてゐる。前途君はしかく出世しても、時としては衰疾の境にあるこのおやぢを念うて、この滄浪ともいふべき浣花溪へまで手紙をよこしてくれるがよろしい。

贈別何邕[一]

生死論交地[二]。何由見一人。
悲君隨燕雀[三]。薄宦走風塵[四]。
綿谷元通漢[五]。沱江不向秦[六]。
五陵花滿眼[七]。傳語故鄉春。

何邕に贈り別る

生死、交地を論ずるは、何に由つてか一人を見む。
悲む君が燕雀に隨ひ、薄宦、風塵に走るを。
綿谷元漢に通ず、沱江、秦に向はず。
五陵花眼に滿つ、傳語せよ故郷の春。

【字解】【一】何邕　作者前に還何十一少府邕覓楠木歌詩あり。【二】交地　交際の境地。【三】燕雀　小さき鳥、凡人にたとふ。【四】薄宦　つまらなき仕途。【五】綿谷　縣の名、四川保寧府廣元縣。【六】漢　漢は秦漢の漢、長安をさす、書解に漢水とす故に紛紛の語を費せり、今取らず。【七】沱江　郫縣の西にあり。【八】秦　咸陽をさす、長安附近。【九】五陵　長安にあり「哀王孫」をみよ。【一〇】傳語　作者の語を故郷の春につたへる、上の五陵花滿眼が傳語の内容なり。

【題義】何邕に別るるとて之に贈りたる詩。舊注に嚴武を送りて綿州に至りしときの作とせり、ただ必ずしも綿州にありしときの詩たる證を見ず。

【詩意】交際の境地を生死不變といふまでにとくものは今の世では一人たりとも之あるを見ぬのである。（ただ君に於て之を見るのみだ。）かほどの君が燕雀の樣な凡鳥にくつついてひくい役人として風塵のうちに奔走してゐるとは悲しむべきことである。君は綿谷をとほつて都の方へゆくがあの路はもと長安の方へ通じてゐる路だ。しかし遺憾ながらここの沱江の水は秦に向つては流れぬ。（だから自分は都へはかへれぬのだ。）五陵の花が自分の眼に十分見えつつある、それほど故郷を思うてゐると故郷の春にことづてしてくれたまへ。

絶句[一]

江邊踏青罷[二]。回首見旌旗[三]。

絶句

江邊、青を踏み罷む、首を回らせば旌旗を見る。

風起春城暮。高樓鼓角悲。

【字解】【一】絶句　五言、又は七言の四句の詩なり。これは五言。【二】江邊　錦江のほとり。【三】踏青　春のわかぐさをふむ、野外に散歩するなり。【四】旌旗　はた、軍事に用ふるもの。【五】春城　春の成都の城。【六】高樓　城樓なり。【七】鼓角　太鼓つのぶえ。

【題義】絶句の形にてのべたる詩。兵亂のさまを悲しみたり。時に吐蕃の亂あり。寶應元年成都の作。

【詩意】かはべりにわか草をふみをはつて、ふとかうべをめぐらしてみると旗がみえる。風が吹きおこつていま城がくれになりかけてをる、さうして城樓のたかいところで太鼓やつのぶえの悲しげなおとがしてゐる。

贈別鄭錬赴襄陽

鄭錬が襄陽に赴くに贈り別る

戎馬交馳際。柴門老病身。
戎馬交馳する際、柴門、老病の身。

把君詩過日。念此別驚神。
君が詩を把つて日を過し、此の別を念ひて神を驚かす。

地濶峨眉晚。天高峴首春。
地濶にして峨眉晩れ、天高くして峴首春なり。

爲於耆舊內。試覓姓龐人。
爲めに耆舊の內に於て、試に姓龐なる人を覓めよ。

【字解】【一】鄭錬　事迹詳ならず。【二】襄陽　湖北省にあり。【三】戎馬交馳　此時、史朝義、營州を陷れ、羌の渾釵刺、梁州を陷る、また河東・河中・軍皆亂る。故に戎馬こもごも馳すといふ。【四】柴門　草堂の門。【五】過日　時を費すといふ。【六】驚神　神は精神。【七】地濶　先方まで遠きをいふ。【八】峨眉　眉州にある山の名、蜀の名山をあぐ、自己の居る處なり。【九】峴首　山の名、襄陽にあり、鄭がゆく所の名山をあぐ。【一〇】爲　吾がために。【一一】耆舊　老人、晉の習鑿齒、「襄陽耆舊傳」をあらはす。【一二】姓龐人　後漢の龐德公なり、德ありて襄陽の鹿門山に隱居す、已に屢〻見ゆ。

【題義】鄭錬が襄陽へゆくにつけて別るるとき贈りたる詩。寶應元年浣花草堂にての作。

【詩意】兵馬があちこちこもごもはせてをるとき。柴門で老いかつ病んでゐるこのからだ。ただ君が詩を手にして日をすごしてをる、それに忽ち別れねばならぬとは、どうしてわが精神を驚かさずにゐられよう。彼我の地とほくはなれて峨眉の山はくれかけてゐる。天高くしてみやれば峴首の山はいま春になつてゐる。君があちらへゆきついたならば老人たちの內に、龐といふ姓の人がゐるかゐぬかを試みにたづねてみてくださらぬか。（もしゐるなら自分もその人とともにそこに隱居しよう。）

重贈鄭錬絶句

重ねて鄭錬に贈る絶句

鄭子將行罷使臣。
鄭子將に行かむとして使臣を罷む、

囊無一物獻尊親。
囊に一物の尊親に獻ずる無し。

【字解】【一】罷使臣　地方の長官、其の他天子の命をうけてでてゐる官はみな使臣なり、鄭錬何の官にし

江山路遠羈離日。　江山路遠し羈離の日、
裘馬誰爲感激人。　裘馬誰か感激の人たる。

ついていふ。【四】羈離　郷の身のうへをいふ、たびびとの身、故郷から離れてゐる身。【五】裘馬　輕裘を衣、肥馬に乘れる人。【六】誰爲　誰とは自己以外何人かの意。【七】感激人　郷が廉潔に對して感動して之を愛むの人。

【題義】前詩を贈りしのち、重ねて鄭に贈れるなり。

【詩意】鄭君は使臣の任をやめてこれからたびだたうとするのである。ところでその嚢中には親御さんにたてまつるべき何物をもたぬのである。まことに廉潔このうへもなき人だ。君がたびびとたるのとき前途幾多の江山をへてゆくのであるが、彼の肥馬輕裘の人人はいつたいそのうちのだれが君の行に感激する人なのであるか。（彼等の中には恐らく感激する人は無からう。ただ自分の樣な貧寒の儒のみが感激してゐるのである。）

ありしや詳ならず。【三】尊親　親御さん。襄陽に老親住むとみえたり。【四】江山路遠　襄陽と蜀との間に

江頭五咏

〔一〕

丁香

丁香體柔弱。亂結枝猶墊。　丁香、體柔弱なり、亂結、枝猶墊る。
細葉帶浮毛。疎花披素艶。　細葉、浮毛を帶ぶ、疎花、素艶披く。
深栽小齋後。庶使幽人占。　深く栽す小齋の後、庶はくは幽人をして占めしめむ。
晚墮蘭麝中。休懷粉身念。　晚に蘭麝の中に墮つるも、粉身の念を懷くを休めよ。

【字解】【一】江頭　錦江のほとり。【二】五咏　五物を詠じたるなり、丁香以下のもの是なり。【三】丁香　「ちやうじ」。【四】亂結　丁子の枝をいだすや葉のうへに釘の如きもの三四分の長さに生ず、之を結といふ。【五】枝猶墊　猶の字は上句の柔弱へかかる辭なり、墊は下へさがること。【六】小齋　ちさき書齋。【七】庶　願はくは。【八】幽人　自己をさす。【九】占　占有。【一〇】墮蘭麝中　自己のことを托していふ。【一一】蘭麝　ともににほふもの。【一二】粉身念　雖舌香は郎官之を口にふくむ。その香、丁子に似たり、因て之を丁子香ともいふ、粉身とは香の緣語なり、身を粉にくだくこと。

【題義】錦江のほとりの草堂にあるもの凡そ五種につきてよめる詩なり。第一は丁香なり。寶應元年の作。

【詩意】丁香はその體は柔弱なものであるが、それでもなほ亂結せる枝が下へとたれる。その細い葉は浮いてる毛を帶びてゐるし、まばらな花はしろいつやつやしさをひらいてゐる。この樹を小さな書齋のうしろにうゑて、どうか幽靜な人に占有せしめたいとおもふ。ただここに注意するが、晚年に蘭麝の香のやうな貴いもののなかに墮ちこんだとしても、おのが身を粉にしてまで他のためにつくさう

などといふ念慮をもつてはならぬ。

〔二〕

麗春

百草競春華。麗春應最勝。百草、春華を競ふ、麗春應に最も勝るなるべし。
少須顏色好。多漫枝條賸。少ければ須らく顏色好かるべし、多ければ漫に枝條に賸る。
紛紛桃李姿。處處總能移。紛紛たり桃李の姿、處處總て能く移る。
如何此貴重。却怕有人知。如何ぞ此れ貴重なる、却つて怕る人の知る有らむことを。

【字解】〔一〕麗春　仙女蒿・長春花・虞美人花等の名あり、罌粟の別種なり。〔二〕春華　はるのはなやかさ。〔三〕少　花のすこしくさくこと。〔四〕顏色　花の色。〔五〕多　花の多くさくこと。〔六〕枝條賸　枝のうへにあまりすぎる。〔七〕桃李姿　姿の字諸本枝に作る、仇氏枝を誤字なりとして姿に改めたり、然れども改むる要なし、余は枝の字に從ふ。〔八〕能移　之を移植してもよくそだつ。〔九〕如何此貴重　これも仇氏が改めたるなり、舊本には如何此貴重（重は種に作るべしといへり）・縛如此貴重・などに作れり、今、仇氏によりて說く、此とは麗春をさす、「なんでこの物が貴重さるるかしの意。〔一〇〕却怕有人知　これは上句の理由なり、怕とは麗春がおそるるなり、麗春は桃李に似す他人に知らるることをおそる。

【詩意】百草が春のはなやかさを競うてゐるが、そのうち最も勝つたものは麗春であらう。麗春の花はすくなければその色が好いはずであり、多ければ枝にあまつてぐあひがよくない。紛紛たる凡俗の

色を有する桃李の枝はどこにでも移しうゐればよくつく、麗春は移植がきかぬ。すなはち如何なる理由で麗春は貴重さるるかといふと、麗春はうるはしさを他人に知られるのをおそれるといふゆかしさがあるためだ。

〔三〕

梔子

梔子比衆木。人間誠未多。梔子、衆木に比するに、人間誠に未だ多からず。
於身色有用。與道氣相和。身に於て色用有り、道と氣相和す。
紅取風霜實。青看雨露柯。紅は取る風霜の實、青は看る雨露の柯。
無情移得汝。貴在映江波。情無く汝を移し得たり、貴は江波に映ずるに在り。

【字解】〔一〕梔子　「くちなし」。一に薔薇花といふ。高さ七八尺、二三月に白き花を生ず、花はみな六出す、甚だ芬芳あり、夏秋に實を結ぶ、生のとき青く、熟すれば黃なり、中の仁は深紅なり。〔二〕色有用　その色を取て帛紙を染むべし、故に有用といふ。〔三〕氣相和　梔子は五內の邪氣、胃中の熱氣を治むといへり。一に相和を御和に作る、これは梔子の性冷にて之を食すれば氣をそこなふを以て之をいふと。今は相和によりて說く。〔四〕風霜實　秋の實をいふ。〔五〕雨露柯　春の枝をいふ。〔六〕移　移植。〔七〕貴　之を貴ぶ所以をいふ。〔八〕映江波　江波にうつろふ。

【詩意】「くちなし」は他の多くの木にくらべると、人間界ではあまり多くない木だ。人の身にとりて

は此物はその色が有用であるし、之を天地の道よりしてみれば人體の氣を調和さすことのできるものである。風霜に結ぶ實にはその紅なるを取り、雨露を帶ぶる枝に於てはその青きをみる。自分はただ無心におまへを移植したので、貴しとする所はおまへが江波にうつるさまのうつくしいことに在る。

〔四〕

鸂鶒

故使籠寛織。須知動損毛。
看雲猶悵望。失水任呼號。
六翮曾經剪。孤飛卒未高。
且無鷹隼慮。留滯莫辭勞。

〔四〕

鸂鶒

故に籠をして織を寛にせしむ、須らく知るべし動けば毛を損するを。
雲を看て猶悵望す、水を失して呼號するに任す。
六翮曾て剪らるるを經たり、孤飛卒に未だ高からず。
且つ鷹隼の慮り無し、留滯、勞を辭する莫れ。

【字解】〔一〕鸂鶒　をしどり。〔二〕寛織　めなあらく織る。〔三〕翮　たちばね。〔四〕鷹隼慮　たか・はやぶさ・におそはれる心配。〔五〕留滯　じつとしてとどまる。

【詩意】自分は「をしどり」を飼ふのにわざと籠の目をあらく織らせた、なぜならば密にしておけばそのなかで動くときとりが毛をいためるからだ。かごのなかではとりは雲をみてはうらめしくながめてゐるし、水をはなれたから悲んでなきさけぶが、さけぶがままにさせておく。六枚のたちばねはまへに剪られてしまつたから、ひとり飛びで、たかくとぶわけにゆかぬ。きのどくではあるが、まあまあ鷹や隼におそはれる心配がない、そこがとりえだから、とりよ、汝はゆつくりこのかごのなかにとどまつてなんぎすることをいとふなよ。

〔五〕

花鴨

花鴨無泥滓。堦前每緩行。
羽毛知獨立。黑白太分明。
不覺羣心妬。休牽衆眼驚。
稻粱霑汝在。作意莫先鳴。

〔五〕

花鴨

花鴨、泥滓無し、堦前毎に緩行す。
羽毛、獨立するを知る、黑白太だ分明なり。
覺らず羣心の妬むを、衆眼の驚きを牽くことを休めよ。
稻粱、汝を霑して在り、作意、先づ鳴くこと莫れ。

【字解】〔一〕花鴨　「かも」。〔二〕泥滓　滓は「かす」、泥水のよごれないふ。〔三〕羽毛　羽毛のきれいなことによりての義。〔四〕知獨立　獨立は鳥がひとりで立つてゐること。〔五〕羣心・衆眼　他の多くの鳥の心、眼。〔六〕霑汝在　在の字の主辭は上の稻粱なり。〔七〕作意　みづから發意する。〔八〕先鳴　他鳥よりもさきに鳴く、鳥の鳴くは食を求むるなり。

【詩意】花鴨はどろ水のよごれがなくて、いつもきざはしの前にゆつくりとあるいてゐる。その羽毛は黑と白とが非常にはつきりしてゐるから、ひとりで立つてゐてもぢきにそれと知らるる。彼は他の

鳥たちが心で妬んでゐることにきづかずにゐるが、決して他鳥の眼（注目）をひくやうなことをしてはならぬぞ。十分潤澤に稻粱のたべものがあることだによつて、自分と發意して他のものよりさきに聲をだしてはいけないよ。

野望

西山白雪三城戍。
南浦清江萬里橋。
海内風塵諸弟隔。
天涯涕淚一身遙。
惟將遲暮供多病。
未有涓埃答聖朝。
跨馬出郊時極目。
不堪人事日蕭條。

西山の白雪、三城の戍、
南浦清江の萬里橋。
海内の風塵に諸弟隔たり、
天涯涕淚、一身遙かなり。
惟遲暮を將て多病に供す、
未だ涓埃の聖朝に答ふる有らず。
馬に跨り郊を出で時に目を極むれば、
堪へず人事の日に蕭條たるに。

自己單獨のからだ。【一三】遲暮　晩年をいふ。【一四】涓埃　ひとしづく、ほこり、少しばかりをいふ。【一五】聖朝　聖朝の恩澤をいふ。【一六】極目　十分目をはせてながめる。【一七】人事　民情なり、兵亂のため人民多く凋敝す。【一八】蕭條　さびしきさま。

【字解】【一】野望　原野にて眺望する。【二】西山　雪嶺なり。【三】三城　松・維・保・三州の城、吐蕃の侵入に對して備へのしろなり。【四】戍　兵をとどめてまもる。【五】南浦　浣花溪は成都の南にあたる。【六】清江　水のきよきかは、錦江なり。【七】萬里橋　草堂の東にあり。【八】風塵　兵馬のちりをいふ。【九】諸弟隔　羣弟は洛陽其他にあり。【一〇】涕淚　自己なみだをもよほすをいふ。【一一】一身　

【題義】野外にいでながめしときの感じをのぶ。寶應元年成都草堂にての作。

【詩意】西山は白雪をいただいてその近くには三城の戍がおいてある。ここは成都の南浦、清江にかけたる萬里橋のそばである。いま天下兵馬の塵がおこつて多くの弟どもは遠くへだたつてをり、自分は天のはてにただひとりぼつちをる、これなみだのたねである。自分は晩年の時期を病氣に向つてささげてゐるばかりで、水ひとしづくほこり一つぶほども聖朝の御恩に答へたてまつつたことはない。ここに馬にまたがつて郊外からいで時時ながめてみると、人民の生計衰へて日日さびしくなりゆくのすがたあるにはたへられぬ。

畏人

早花隨處發。春鳥異方啼。
萬里清江上。三年落日低。
畏人成小築。褊性合幽棲。

人を畏る

早花、隨處に發く、春鳥、異方に啼く。
萬里、清江の上、三年、落日低る。
人を畏れて小築を成す、褊性、幽棲に合す。

門徑(一〇)從榛草(一一)無心待馬蹄(一二)。門徑、榛草に從す、馬蹄を待つに心無し。

【字解】〔一〕長人　他人をはばかること、第五句の二字をとりて題とす。〔二〕早花　早くさく花。〔三〕隨處　どこででも。〔四〕異方　他郷ないふ、この成都の地をさす。〔五〕三年落日低　わかりにくき句なり、「毎日毎日夕日を送つて三年を經た」といふ意なり、と。作者乾元二年に成都に入りて寶應元年春に至て三年なり。〔六〕小築　小屋をたてること。〔七〕編性　かたくなな性質。〔八〕合　にあふ。〔九〕幽棲　しづかなわびずまひ。〔一〇〕門徑　門より通ずるこみち。〔一一〕從榛草　「はり」の木や草の生ずるにまかす。〔一二〕待馬蹄　貴人の騎つてくる馬の蹄をまつ。

【題義】人をはばかつて草堂にわびしくくらすことをのぶ。

【詩意】早ざきの花がどこにでもさきだし、かはつた土地ながら春の鳥は啼いてゐる。自分は萬里のとほくでこの清らかな錦江のほとりで、三年のあひだ夕日のひくく落つるのを見た。ここで他人をはばかつて小さな家屋をきづいた。それは自分のかたくなな性質がかるわびずまひとにあふからだ。門のそばのこみちには榛や草がかつてにはやしてある。どうせ自分は貴人の馬蹄がいつくるかなどと待つこころは無いのである。

屏跡三首

衰年甘屏跡(一)、幽事供高臥(二)。鳥下竹根行、龜開萍葉過(三)。

衰年、屏跡を甘んず、幽事、高臥に供す。
鳥は竹根に下りて行き、龜は萍葉を開いて過ぐ。

年荒酒價乏(四)、日併園蔬課(五)。獨酌甘泉歌(六)、歌長擊樽破(七)。

年荒にして酒價乏し、日を併せて園蔬を課す。
獨り甘泉を酌みて歌ふ、歌長くして樽を擊ちて破る。

【字解】〔一〕衰年　老衰の時期。〔二〕屏跡　屏は「しりぞくる」、跡は行跡、わが行跡を世間からひつこめること。〔三〕幽事　しづかなことがら、卽ち鳥龜課蔬などの事。〔四〕高臥　枕を高くして臥すること。〔五〕萍　うきぐさ。〔六〕芝　作がらのあしき こと。〔七〕酒價　酒の代金、酒かひ錢。〔八〕日併　一日に二三日分の仕事をする、併は兼のごとし。〔九〕園蔬　はたけの野菜つくり。〔一〇〕課　仕事の分量をわりつけてする、仇氏は此句を上句と連絡せしめ蔬を賣りて酒錢を得んとするなりといへるが、余はしかおもはず、二句各一一意ならん。〔一一〕獨酌甘泉歌　甘泉はうまき水なり、酒なき故に水を飲むなり、このままにとくときは次句の「擊樽」は水をつめたたるをうつものとみなさざる可らず、不自然ならずや。一本に此句を獨酌酣且歌に作れりといふ。是よろしきに非るか。

【題義】浣花の草堂に人まじらひをせずひつこんでをることをのぶ。これその第一首なり。寶應元年の作。

【詩意】自分は老衰の年にあたつて滿足してひつこみ、自己の高臥の境に對してはしづかな事がらを以てささげてをる。すなはち庭をみれば、鳥は竹の根もとにおりてきてあるいてをり、龜は萍の葉をかきわけて過ぎてゆく。年がらが凶作で酒かひ錢は乏しく、はたけ仕事の日課を增してはたらく。酒はのめぬから水をのんで歌ひ、（或は、「ひとりで酒をくみながら醉ひがまはればうたひだす、」）歌のこゑ長くしてつひに樽をうちわるに至る。

〔二〕

用拙存吾道。幽居近物情。
桑麻深雨露。燕雀半生成。
村鼓時時急。漁舟箇箇輕。
杖藜從白首。心跡喜雙清。

【字解】〔一〕用拙　世わたりべたなことを以て。〔二〕存吾道　自己の主義をたもつ。〔三〕幽居　しづかな生活。〔四〕物情　事物の精神、即ち下の桑麻以下の事がら。〔五〕藜　あかざ。〔六〕心跡　心と行跡とふたつ。〔七〕雙清　心と行跡とふたつながら汙れぬ。

【詩意】自分は世わたりべたなままで自己の主義をたもつてをる、それでしづかな生活をして事物のこころそのものに近づいてをる。桑や麻は雨露のめぐみをふかくうけて生長し、燕や雀も半分は生育して巣立つた。村の太鼓はときどきせはしさうに鳴るし、すなどりの舟はひとつびとつ輕げにういてゆく。こんなさまをみながらあかざの杖をつき、あたまが白くならうと頓著せず、ただ心と行とがともに汙れに染まぬことをうれしくおもうてをる。

〔三〕

晚起家何事。無營地轉幽。
竹光圍野色。舍影漾江流。
失學從兒懶。長貧任婦愁。
百年渾得醉。一月不梳頭。

【字解】〔一〕晚起　晩起に同じ、あさおそくおきること。〔二〕家何事　わがこの隱居の家ではいかなる仕事があるか、仕事はべつにない、だからおそくおきてもさしつかへなしといふなり。〔三〕無營　爲すことなし。〔四〕竹光圍野色　諸家の解一ならず、余は鄭見をのぶ、圍は圍繞、即ち僧竹樓繞の義ならん、こんもりとかたまつてゐるさまをいふ、野色は副詞として用ひしものにて「田野の色よこたはるところにおいて」の義ならん。〔五〕舍影　草堂のかげ。〔六〕失學　學業を怠るをいふ。〔七〕長貧　いつもびんばふ。〔八〕婦　つま。〔九〕百年　生涯。〔一〇〕得醉　希望。

【詩意】我が家は仕事もないからあさはおそくおきる。またなすこともないから土地はいよいよしづかである。みれば田野の色よこたはるところに竹林のひかりこんもりとみえ、江のながれは草堂のかげがただようてゐる。こどもはぶしやうで學業を怠るがそのままにしてあり、いつもびんばふでつまは心配してゐるがこれもそのままにしてある。ひとつきぢう頭にくしをいれぬほどで、ただ生涯醉ひどほしにゐたいものだとおもうてゐる。

少年行[一]

馬上誰家白面郎。　馬上誰が家の白面郎ぞ、
臨階下馬坐人牀。[三]　階に臨み馬より下りて人の牀に坐す。
不通姓氏驫豪甚。[五]　姓氏を通せず驫豪甚し、
指點銀瓶索酒嘗。[七]　銀瓶を指點して酒を索めて嘗む。

【字解】【一】少年行　少年のことをよんだうた。【二】白面郎　かほのしろいわかもの。【三】階　さかやのきざはし。【四】人牀　他人の家のいす。【五】不通姓氏　だれそれと姓名をなのらぬ。【六】驫豪　銀瓶　銀でこしらへたさかがめ。

無慎ならざるをいふ。人も無げなる大ざつばなふるまひ。【七】索　もとむ。

【題義】貴族の子弟の酒屋にて傲慢ちきに酒をのむさまをうたへり。寶應元年の作。

【詩意】馬にうちのつたどこの家のわかものかしらぬが、きざはしのそばで馬からおりてどつかと椅子に腰かけた。それから大ざつぱな樣子でどこのだれとも名のらず、「あれをくれ」といつて銀のさかがめを指ざしして酒をもとめてのんでゐる。

卽事[一]

百寶裝腰帶。[二]眞珠絡臂韝。[三]　百寶、腰帶に裝ひ、眞珠、臂韝に絡ふ。
笑時花近眼。[四]舞罷錦纏頭。[五]　笑ふ時花眼に近し、舞ひ罷みて錦頭に纏ふ。

【字解】【一】卽事　眼前ふれた事につきそのままのべる。【二】百寶　さまざまのたからもの、金・玉の類。【三】裝　かざりつける。【四】眞珠　しんじゅ。【三】絡　まとふ、からめる。【四】臂韝　臂衣なり、鷹狩りする者がひぢのところへつける衣なり、舞妓もかかるものを著けしとみゆるなり。【五】花近眼　舞者花の枝を手にしてまひ、花を自己の眼のほとりに近づける義ならん。（仇氏解に「笑容掬すべきに比す」といへるは「眼もとに花のさきこぼるる」といふ樣の意とみたるものか）【六】錦纏頭　纏頭は「かつけもの」、歌舞を爲すもの美美として人より錦綵を受くれば之を頭上にいただく、之を纏頭といふ、引出物の類。

【題義】歌妓の舞ふをみてその事がらをよめり。寶應元年の作。

【詩意】腰のまはりの帶にはくさぐさの寶をかざりつけ、臂衣にもまた眞珠をたくさんまとうてをる。かかるいでたちで舞ふのであるが、彼の舞妓が笑ふときは花枝を眼のほとりにちかづけて愛らしく、舞ひがすめば褒美にもらつた錦を頭にまとうてひきさがる。これもまたうつくしい。

奉酬嚴公寄題野亭之作[一][二]

嚴公が野亭に寄せ題せしの作に酬い奉る

拾遺曾奏數行書。[三]　拾遺曾て奏す數行の書、
懶性從來水竹居。[六]　懶性、從來、水竹に居る。
奉引濫騎沙苑馬。[八]　奉引濫りに騎る沙苑の馬、

【字解】【一】酬　返事する。【二】嚴公　嚴武、武は上元二年十二月、成都尹となる。【三】寄題野亭之作　嚴武が杜甫に先づあたへたる

幽棲眞釣錦江魚。　幽棲、眞に釣る錦江の魚。
謝安不倦登臨費。　謝安倦まず登臨の費、
阮籍焉知禮法疎。　阮籍焉んぞ知らむ禮法の疎なるを。
枉沐旌麾出城府。　枉げて沐す旌麾、城府を出づるに、
草茅無徑欲敎鋤。　草茅、徑無し、鋤しめむと欲す。

【八】 濫　みだりに、謙遜していふ辭。【九】 沙苑馬　沙苑は「沙苑行」の詩にみえたり、沙苑馬は沙苑で養成された馬、官馬をさす。【一〇】 眞釣　眞とは本來懶性の人物ゆゑ、その性にそむかず、の義。【一一】 謝安　晉の謝安、東山の別墅に遊宴を恣にす、以て嚴武に比す。【一二】 登臨費　費は金錢を費すこと、謝安しばしば肴膳に百金を費せしといふ、登臨は登山臨水なり。但、費の字は不倦に對して接續よろしからぬ樣なり、一本に賞に作れるあり、余は賞に從ふ、賞は山水を賞愛することなり。【一三】 阮籍　魏の人、禮法の士をにくむ。【一四】 焉知　疎なるも疎なることを知らず。【一五】 疎　簡略なること。【一六】 枉沐　枉とは謙遜していふ。沐とはその恩にひたるをいふ。【一七】 旌麾　嚴武のはたさしもの。【一八】 城府　成都の城、やくしよ。【一九】 草茅　くさ、かや。【二〇】 無徑　草茅生ひしげりてこみちもなし。【二一】 欲　せしむる、俗語なり。

【題義】 嚴武が草堂へ詩をよこしてくれたにつけてそれに返事するために作つた詩。寶應元年の作。嚴武の詩は左の如し。

寄題杜二錦江野亭。　嚴武

漫向江頭把釣竿。　懶眠沙草愛風湍。　莫倚善題鸚鵡賦。
何須不著鵷鶵冠。　腹中書籍幽時曬。　肘後醫方靜處看。
興發會能馳駿馬。　終當直到使君灘。

杜二が錦江の野亭に寄せ題す　嚴武

漫りに江頭に向つて釣竿を把る、懶にして沙草に眠り風湍を愛す。善く鸚鵡の賦を題するに倚ること莫れ、何ぞ鵷鶵の冠を著けざるを須ひむ。腹中の書籍幽時に曬し、肘後の醫方は靜處に看る。興發せば會ず能く駿馬を馳せ、終に當に直に使君灘に到るべし。

【嚴武の詩字解】 【一】 杜二　杜甫をさす。【二】 錦江野亭　草堂をさす。【三】 江頭　錦江のほとり。【四】 把釣竿　杜の隱居生活をいふ。【五】 懶　杜のぶしやうなこと。【六】 沙草　沙上のくさ。【七】 風湍　風靡をおびたるはやせのおと。【八】 倚　たよりにする、詩を題となる。【九】 題　つくること。【一〇】 鸚鵡賦　後漢の禰衡、章陵の太守黃射がところにて、この賦を作る。【一一】 何須　そんな必要なし。【一二】 鵷鶵冠　雉のはれにてかざりしかんむり、漢の時、侍中の官のかむりしもの。【一三】 曬　時　しづかなとき。【一四】 曬　さらす、むしぼしする、郝隆といふもの七月七日に腹中の書をさらすなりといひて仰臥せりといふ。【一五】 肘後醫方　肘にかくる醫術の書、晉の葛洪、肘後急要方四卷をあらはす。【一六】 興發　此より二句は武自らいふ、發はおこること。【一七】 會　必ず俗語なり。【一八】 使君灘　浣花溪の近傍にかかる名の灘ありしならんといふ。

【嚴武の詩意】 おまへはそんなことをせずともよいのに江頭に釣竿を把つたり、ぶしやうもので沙はらの草に眠たり、風になるは詩をさす、其辭は題義に載す。【一四】 拾遺　作者往年左拾遺となる。【一五】 數行書　拾遺の官として諫書を天子にたてまつりしなり。【一六】 水竹居　水竹のある處に住居する。【一七】 奉引　天子の道路の案内をする、これは主として肅宗のおともをして鳳翔より長安にかへりしことをさす。

やせの音を愛したりしてゐる。圃衒のごとく鷄鳴の賦をよくつくれるというてもそんなことをたのむな。あくまで鷄鳴の冠を著けぬ(仕官せざるをいふ)というて頑張つてゐる必要がどこにある。おまへはしづかなときに腹のなかの書物を虫ばしたり、てぢかな藝術の心得の本などを靜な處で看てゐる。自分は興がおこつたならば必ず駿馬をとばしてすぐおまへのそばの使君灘までゆかうとおもうてゐる。

【詩意】自分は拾遺としてかつて四五行の諫書をたてまつつたこともあるが、元來がぶしやうもので水竹の在る所にすむべきものである。かつては御先導をつとめふつつかながら沙苑の官馬にものつたが、わびずまひをして本性どほりほんたうに錦江の魚を釣つてくらす樣になつた。謝安にも比すべき君は山水に登臨して之を賞愛することに倦まないが、阮籍みた樣なこの自分は高官のものに對しても禮法が疎略だかどうかも心得てはゐぬ。ただかたじけなくも君はお伴をつれて城から出てこられるといふことだから、草茅に沒したこみちを鋤で手入れをさせてお待ちしようとおもふ。

杜少陵詩集　巻十一

嚴中丞枉駕見過

嚴中丞枉駕見過　【原注】嚴自東川除西川勅令兩川都節制。

嚴中丞駕を枉げ過ぎらる　【原注】嚴東川より西川に除せらる。勅して兩川都て節制せしむ。

元戎小隊出郊坰。　元戎小隊、郊坰に出づ、
問柳尋花到野亭。　柳を問ひ花を尋ねて野亭に到る。
川合東西瞻使節。　川、東西を合し、使節を瞻る、
地分南北任流萍。　地、南北を分つ、流萍に任す。
扁舟不獨如張翰。　扁舟獨り張翰の如くなるのみならず、
皂帽還應似管寧。　皂帽還應に管寧に似たるなるべし。
寂寞江天雲霧裏。　寂寞江天、雲霧の裏、
何人道有少微星。　何人か道ふ少微星有りと。

【字解】〔一〕嚴中丞　御史中丞嚴武なり、肅宗の長安を收むるや嚴武を以て京兆少尹・兼御史中丞となす、史思明が亂ありしを以て官にゆかざるに出だされて綿州刺史とせられ劍南の東西兩川節度使を兼ね、御史中丞をも兼ぬ。東川節度使は梓州に治す、西川は成都に治す、作者の注によれば武は東川より西川にうつりて兩川を節制せしものにして寶應元年のことなるべし。〔二〕枉駕　のりものをまげてわざわざくまじき

處にくるをいふ。【三】見過　浣花の草堂へきてくれた。【四】元戎　大なる軍車のこと、「詩經」にみゆ、いま軍車をひきゐる人にあて嚴武をさしていへり。【五】出郊坰　城から野外へ出かけたこと、野外を郊、郊外を林、林外を坰といふ。【六】野亭　草堂。【七】小隙　わづかな人數の部隊。【八】川合東西　東川・西川の二區域を合すること。【九】瞻　こちらが仰ぎみること。【一〇】使節　天子の使者としてのはた、節度使は天子より軍治民治の權力をゆだねらるるを以て使節といふ。【一一】南北　南は成都、北は長安、洛陽、此句は自己についていふ。【一二】流萍　ながるるうきくさ、飄泊のさまをたとへていふ。【一三】扁舟張翰　晉の張翰洛陽に至り齊王冏に仕へ時事の非なるを見て故郷吳中の蓴羹鱸鱠を憶ふといひて歸れり、扁舟の故事は無けれども吳にかへるにはいづれ舟にのるなり。【一四】皂帽布衲　魏の時、管寧仕へず、黑をさけて遼東に居り、常に皂き帽・布の衲・袴をつけゐたりと。【一五】江　天雲霧　江は錦江、雨多きゆゑ雲霧といふ。【一六】少微星　星座の名、少微四星は太微の西にあり、士大夫の位なり、一に處士星と名く、仕官せぬ隱者にかたどる、自己をたとへていふ。

【題義】　御史中丞の嚴武が自分の草堂へわざわざたづねてくれた。嚴武は東川から西川へうつたのであつてしかも兩川をすべて管轄せよとの勅命をうけて來任したのだ。寶應元年の作なるべし。

【詩意】　節度使が配下の小部隊をつれて城内から郊外へ出かけて、ここの柳、かしこの花とさぐりながらわしの草堂までやつてきた。我我は彼が天子の使節として東西兩川を統べるのを仰ぎみるのであるが、自分自身は土地の南北のけじめはあるがうき草のただよふままに生活してゐるのである。自分は扁舟歸郷の思をうごかしてゐることが張翰の樣であるばかりでなく、亂を避けて世から離れてゐることはまた皂帽を遼東につけてゐた管寧に似てゐることであらう。まことにさびしい錦江の天の雲霧のうちに處士の微象たる少微星があるとはだれがいふのか。おまへなればこそそんな星あることを知つてくれるのである。

遭田父泥飲美嚴中丞

田父が泥飲嚴中丞を美するに遭ふ

步屧隨春風。村村自花柳。
田翁逼社日。邀我嘗新酒。
酒酣誇新尹。畜眼未見有。
迴頭指大男。渠是弓弩手。
名在飛騎籍。長番歲時久。
前日放營農。辛苦救衰朽。
差科死則已。誓不舉家走。
今年大作社。拾遺能住否。
叫婦開大瓶。盆中爲吾取。
感此氣揚揚。須知風化首。

步屧、春風に隨ふ、村村自ら花柳。
田翁、社日に逼る、我を邀へて新酒を嘗めしむ。
酒酣にして新尹を誇る、畜眼未だ有るを見ずと。
頭を迴して大男を指す、渠は是れ弓弩手なり。
名は飛騎の籍に在り、長番、歲時久し。
前日放たれて農を營む、辛苦、衰朽を救ふ。
差科、死せば則ち已まむ、誓つて家を擧つて走らず。
今年大に社を作す、拾遺能く住まらむや否やと。
婦を叫び大瓶を開かしめ、盆中に吾が爲めに取る。
感ず此の氣の揚揚たるに、須らく知るべし風化の首なるを。

語多雖雜亂。説尹終在口。』語多くして雑亂なりと雖も、尹を説いて終に口に在り。』
朝來偶然出。自卯將及酉。朝來、偶然に出でたり、卯より將に酉に及ばむとす。
久客惜人情。如何拒隣叟。久客、人情を惜しむ、如何ぞ隣叟を拒まむ。
高聲索果栗。欲起時被肘。高聲、果栗を索む、起たむと欲すれば時に肘せらる。
指揮過無禮。未覺村野醜。指揮、無禮に過ぐるも、未だ覺えず村野の醜なるを。
月出遮我留。仍嗔問升斗。』月出でて我を遮りて留め、仍嗔つて升斗を問ふ。』

【字解】〔一〕田父　農家の老父。〔二〕泥飲　飲酒に拘泥せしむる、しひてひきとめ酒なのますこと。〔三〕美　ほめること。〔四〕嚴中丞　嚴武なり。〔五〕步屧　さうり。〔六〕隨春風　はる風の吹くままに方位さだめずさそはれゆくないふ。〔七〕田翁　田父。〔八〕社日　これは春の社日、春分前後の戊の日、この日農家にてはいはひのさけなのむ。〔九〕誇　農父がほこりとく。〔一〇〕新尹　新任の成都尹嚴武、尹は府知事のごとき官職、上元二年建丑月（十二月）嚴武は成都尹となる。〔一一〕奮眼　めのながにたくはへたところでは、農父なればかく偉つぼくいふなり、「滿眼」とでもいふべきところなり。〔一二〕大男　田父の長男。〔一三〕槊「かれ」、俗語。〔一四〕弓弩手　ゆみ、いしゆみのかかり。〔一五〕飛騎　騎隊の名。〔一六〕籍　兵の名簿。〔一七〕長番　廣朝、一萬五千の兵を六番に分けて更代す、今この飛騎は一番のみにていつまでも更代なきなり。〔一八〕歲時久　更代せぬゆゑあちらへいつてゐること久し。〔一九〕放　軍隊から放たれ還へされしこと。〔二〇〕衰朽　田父の老いの身をいふ。〔二一〕差科　雜役をいふ。〔二二〕死則已　死而止におなじ。〔二三〕舉家走　一家みんなで他鄕へにげゆく。〔二四〕大作社　さかんに社日の祝宴をする。〔二五〕拾遺　作者をさす。〔二六〕鄰　田父のつま。〔二七〕大瓶　大きなかめ。〔二八〕盆　大椀をいふ。〔二九〕吾　作者。〔三〇〕取　瓶より盆のなかへ酒をくみとる。〔三一〕氣揚揚　田父の氣前よろしきさま。〔三二〕風化首　舊注に郡守縣令、風化之首、の語をひけり、風化之首とは德風を以て人民を感化するものの首、先導者の義、ここは尹についていへるならん。〔三三〕語多　田父のことばかず多し。〔三四〕終在口　口からはなさずあくまでいふ。〔三五〕朝來　あさからかけて。〔三六〕卯　刻の名、朝六時頃。〔三七〕酉　夕の六時頃。〔三八〕久客　ながくとどまつてゐる旅客、自己をさす。〔三九〕惜人情　人情の淳樸得がたきを愛惜す。〔四〇〕拒隣叟　隣家の老人の厚意を拒絶する。〔四一〕索　田父がもとめる。〔四二〕起　作者が起ちあがる。〔四三〕肘　田父が肘でおさへて前進をとどめる。〔四四〕指揮　さしづ。〔四五〕村野醜　ぬなかくさきみにくさ。〔四六〕嗔　いかりごゑをだす。〔四七〕問升斗　田父がその家内のものに酒のあるなしの分量をとひただすなり。

【題義】農家のおやぢが春の社日にむりにひきとめて酒をふるまひくれ、御史中丞成都尹嚴武をほめたてたことにでくはして作つた詩。寶應元年春の作。

【詩意】草履ばきで春風にさそはれながらぶらついてゆくと、村村にはひとりでに花がさいたり柳が煙つたりしてゐる。ある農家のおやぢが社日にせまつたので自分をむかへて酒をのませてくれた。『酒の酔がまはるにつれおやぢが新任の尹のことをほこりがにときだす。「こんどの知事さまの樣のひとはわたしの目玉ではまだあんな人のあることをみたことがありません」と。それからちよいと頭をむけて長男の方をゆびさしして、「あれは弓弩掛りで、飛騎の軍籍に在るもので、更代なしの番役にならくでてをりましたが、前日おかみのおゆるしで放免になりまして百姓仕事をして骨折りながら衰朽しかけたこのおやぢをたすけてくれます、まだ雜役を仰せつかつて死ぬならば死ぬるまでのこと

でござります、我我どもは誓つて全家逃げだすやうなことはいたしませぬ。ことしはさかんに社日のお祝ひをやるのでござります、あなたここにゐてくださるかどうか。」というておやぢは妻をよんで大きな酒瓶をあけさせ、自分（作者）のためにお椀のなかへ酒をくみとつてくれた。自分はこのおやぢのこんなに氣まへのいいのに感じた。これはどうしても新任の尹が風化の先導者であるといふことが知らるるのである。このおやぢのことばかずは多くて亂雜ではあるが尹、尹、とたえず口からはなさず言うてをるのである。』　自分は朝からふと家を出たのだが朝の六時から夕の六時までにもならうとしてゐる。長い旅の身のうへはとかく人情のかざりけないのを愛するもので、どうしてこのとなりのおやぢの厚意をこばむことができようぞ。おやぢは大聲をだしてくだものはないか、栗はないかといふ。自分が起ちあがらうとすると時としては肘で自分をさしとめる樣にする。ひとの行動をさしづすることが無禮にすぎてはゐるが、そのゐなかくさいみにくさがめだつてはみえぬ。もう月がでた。がおやぢはまだ自分をさへぎつてひきとどめ、いままでどほりつのりごゑで一升あるのか一斗あるのかなどとせんぎだてしてゐる。』

奉和嚴中丞西城晚眺十韻　　嚴中丞が西城晚眺を和し奉る十韻

汲黯匡君切。廉頗出將頻。　汲黯君を匡すこと切なり、廉頗、出將頻なり。
直詞才不世。雄略動如神。　直詞、才、世ならず、雄略動くこと神の如し。
政簡移風速。詩清立意新。　政簡にして風を移すこと速に、詩清くして意を立つる「こと新なり。」
層城臨暇景。絕域望餘春。　層城、暇景に臨み、絕域、餘春を望む。
旅尾蛟龍會。樓頭燕雀馴。　旅尾、蛟龍會す、樓頭、燕雀馴る。
地平江動蜀。天濶樹浮秦。　地平にして江、蜀に動き、天濶くして樹、秦に浮ぶ。
帝念深分閫。軍須遠算緡。　帝念、分閫に深く、軍須、算緡を遠ざく。
花羅封蛺蝶。瑞錦送麒麟。　花羅、蛺蝶を封じ、瑞錦、麒麟を送る。
辭第輸高義。觀圖憶古人。　辭第、高義を輸し、觀圖、古人を憶ふ。
征南多興緒。事業闇相親。　征南、興緒多し、事業、闇に相親しむ。

【字解】【一】嚴中丞　嚴武。【二】西城晚眺　嚴武が作りし詩の題なり、成都の西城にて夕がた景色をながめしことをよめり。【三】汲黯　漢の武帝の時の人、大中大夫となりしばしば切諫す。【四】匡君　君の惡事を正す。【五】廉頗　戰國時代の趙國の武將。【六】出將　他の地へ出でて將となること、嚴武の處處へ節度使となりていでしをいふ。【七】直詞　直言を吐くこと、「匡君」の句を承く、不世、不二世出一の義、まれにしかでぬ。【八】雄略　ををしきはかりごと、「出將」の句を承く。【九】政簡　政治の仕方簡單なり。【一〇】移風　民の惡風を良風にかへる。【一一】詩清　清はさつぱりとしてゐること。【一二】立意　意匠のたてかた。【一三】層城　いくへかかさなつた城。【一四】暇景　暇は遐の誤字なるべし、遐景ははるかなる景色。【一五】絕域　かけはなれたばしよ、成都の

地をさす。【一七】 餘春　春ののこんのけしき。【一七】 旌尾　旌は竿頭に鈴のついたはた。そのはたの旋に蛟龍をふがく、尾ははたのすゑをいふ。【一八】 蛟龍　龍のそれをさす。【一九】 樓頭　樓は城樓。【二〇】 燕雀　これは實物をいふ。【二一】 地平二句　即ち眺望の實景。【二二】 江動蜀　江は岷江、江水蜀地に於て動き流る。【二三】 樹浮秦　樹色遠く秦(長安)の方へ平につらなるさま。【二四】 帝念　天子のおこころ。【二五】 深分閫　「漢書」馮唐傳に、古者、命ゝ將、跪推ゝ轂曰、閫以外將軍制ゝ之の語あり、閫は門の「しきみ」なり、天子大將を遣はすに、城門を出たうへは門外の事は全部權力を之に一任するといふなり、分閫は閫内、閫外を分つなり。【二六】 軍須　軍需なり、軍事についていりようなもの。【二七】 遠算籍　孔のあいた錢を貫く紐を籍といふ、凡そ千錢を一貫とし、稅二十錢をいだす、籍を算するは人民の財產しらべをして稅を取るためなり、遠とはそんな方法にちかよらぬ樣にすること。【二八】 花蕊　うつくしいうすぎぬ。【二九】 封、送　天子の方で之を封じ之を送りよこされること。【三〇】 蛺蝶　てふてふ、羅の模樣なり。【三一】 瑞錦　うつくしいにしきのおりもの。【三二】 鯨鱗　錦の織紋。【三三】 辭第　漢の霍去病の爲めに天子が第宅を治めたまはんとせしに、去病は匈奴未ゝ滅、何以ゝ家爲(家を以て何たが爲さんの意)とて之を辭したり、嚴武亦之と似たるないふ。【三四】 論高義　論とは武の方から天子に對して之を致すないふ。【三五】 觀圖憶古人　圖は蜀道畫圖ないふ、蜀の圖を觀て政治に資せんとするなり、その事古人と似たり、作者別に「同嚴公詠蜀道畫圖詩」あり。晉の文帝嘗て有司に命じて吳蜀の地圖を撰せしめ、之により攻戰の方略を定めしことあり、古人とはこの類是なり。【三六】 征南　晉の杜預、卒して征南大將軍を贈らる、作者の十三世の祖なり。【三七】 興緒　著解說なし、或は立碑峴山の類をさすといふも詩と關係なし。愚案ずるに即ち西城晩眺の事を指すのみ、此句は本題にしてしかも陪句なり、次の句が主旨の存する所なり。【三八】 事業　杜預は伐吳の計を建てたり、嚴武必ず平蜀の功を立つるならんといふなり。【三九】 關相親　親は近き意なり。

【題義】 嚴武が西城晩眺の詩を作つたについて、それに和してつくつた詩。寶應元年春の作。

【詩意】 汲黯に比すべき君は天子のわるいところを切にただし、廉頗に比すべき君は頻に武將として地方へ出でられる。君の直言は世毎には出ぬほどまれなものであり、君の雄略はそのはたらき神明のごときものである。この樣な君であるからその政は簡單でしかも速に惡風俗を易へ、また詩才があつてその詩は清で意匠は新しい。君は高い城で遠き風景に臨みてみおろし、蜀のごとき絶域に於て春ののこんの景色をながめられる。』 その建てられたはたには蛟龍の畫すがたが會合し、君の立つ城樓のうへの方には燕や雀もなれしたしんでゐる。それから土地は平で江水が動きながれ、天はひろくして樹色が遠く秦地の方までうかんでみえる。』 天子は君に對して閫外の任をお託しになるおぼしめしが深く、軍需についてはなるたけ人民から稅金を取らぬ樣にとの方針である。それで或は蛺蝶の模樣のある羅を封じて賜はり、或は麒麟の紋樣のある瑞錦の織物を送りつかはされる。之に對して、君は恩寵になれず、霍去病のごとく第宅を賜はらうとしても之を御辭退するほどの高義を致し、蜀の治亂安危に心をとどめて蜀の地方の圖を觀ては古人の風をおもうてをられる。吾が遠祖征南大將軍にも比すべき君は已に風景などながめて政治の餘暇の興趣にとんでをられるが、それよりも自家のうちたてられんとする功業に於て君はそれとなく征南に近いものがある。』

中丞嚴公雨中垂寄見憶一絶奉答二絶

中丞嚴公雨中に憶はるる一絶を垂寄す答へ奉る二絶

〔一〕

雨映行宮辱贈詩。
元戎肯赴野人期。
江邊老病雖無力。
強擬晴天理釣絲。

〔一〕

雨行宮に映ず、贈詩を辱くす、
元戎肯て野人の期に赴かむとす。
江邊老病 力無しと雖も、
強ひて晴天、釣絲を理めむと擬す。

【題義】御史中丞嚴武が雨のふる日に自分を憶うてくれる詩一首を寄せてくれた。因つてそれに答へる詩。寶應元年建巳月（四月）の作ならん。

【詩意】あなたから雨映行宮云云の贈詩をかたじけなうした。それによるとあなたは元戎の身で自分のやうな野人との約束の期限にでかけられるとのことだ。自分は江のほとりで老いかつ病んで體力は無いが、しひて天氣のいいときに釣絲をととのへようとまちかまへてゐる。

【字解】〔一〕 乘寄　寄すること を乘る、よせてくださつたといふこと。〔二〕 見憶一絶　こちらを憶うてくれた絶句一首。〔三〕 雨映行宮　これは嚴武が詩中の字句を切りとりしものなるべし、卽ち贈詩中のもの。行宮は成都の城内にありて玄宗が蜀に幸したまひしときのかりごてんなり、もと天寶中に鮮于仲通といふ者が建てしものなり、のちに武人そこに住む。嚴武が原作に雨映行宮云云といひこせしとみゆ。〔四〕 赴野人期　野人は自己をさす、赴期とは約束の期會にでかけるなり。〔五〕 江邊　錦江のほとり。〔六〕 理釣絲　つりいとを整理する、お客がきたならばともに魚をつらんとおもふなり。

〔二〕

何日雨晴雲出溪。
白沙青石洗無泥。
只須伐竹開荒徑。
倚杖穿花聽馬嘶。

〔二〕

何の日か雨晴れて雲溪を出で、
白沙青石洗はれて泥無からむ。
只須らく竹を伐りて荒徑を開き、
杖に倚り花を穿ちて馬嘶を聽くべし。

【詩意】いつになつたら雨が晴れて雲が溪からでてしまひ、白い沙も青い石も洗ひきよめられて泥なしになることであらう。さうなつたら竹をきつてにはさきのこみちをとほれるやうにあけ、杖により花の間をくぐりぬけてお客の馬のいななくのをきくばかりのことである。

【字解】〔一〕 雲出溪　雲が浣花溪を出でて去るをいふ。〔二〕 白沙青石　溪邊のものにして、釣をたるるときに關係あるなり。〔三〕 洗無泥　雨にあらひきよめられて泥がついてならぬ。〔四〕 荒徑　やぶやぶ。〔五〕 穿花　花のこのまをくぐる。〔六〕 馬嘶　嚴武ののれる馬のいななくこゑ。

謝嚴中丞送青城山道士乳酒一瓶

嚴中丞が青城山の道士の乳酒一瓶を送りしを謝す

山瓶乳酒下青雲。
氣味濃香幸見分。
鳴鞭走送憐漁父。

山瓶の乳酒、青雲より下る、
氣味濃香 幸に分たる。
鞭を鳴らし走り送らしむるは漁父を憐む、

【字解】〔一〕 青城山　卷十に「丈人山」の詩あり、就て看るべし。〔二〕 道士　道教の坊主。〔三〕 乳酒　乳でつくりし酒か、乳に似たる

洗盞開嘗對馬軍。

盞を洗ひ開き嘗めて馬軍に對す。

ふ。【五】見分　分けてくれた。【六】鳴鞭走送　すなはち馬軍をよこしたこと。【七】漁父　自己をさす。【八】盞　盞のあるさかづき。【九】馬軍　走りづかひの騎兵。

【題義】嚴武が青城山の道士がこしらへた乳酒ひとかめ送つてくれたことにつきお禮をのべた詩。寶應元年の作。

【詩意】山中のかめにつめた乳酒が青雲のゐるところから下界へおりてきた。その酒は氣香しく味濃かなものである。かかるめづらしきしなを幸におわけくださつた。すなはちあなたが馬軍に鞭をならさせて走つて送りとどけさせてくださつたのはこのすなどりおやぢを愛憐されたためである。わたくしはその馬軍に對して早速さかづきをあらひかめをあけて酒を頂戴いたしました。

酒か明ならず。【四】下青雲　山鳥からきた酒ゆゑ青雲よりくだるといふ。

三絶句

〔一〕

楸樹馨香倚釣磯。

斬新花蘂未應飛。

〔二〕

門外鸕鷀去不來。

沙頭忽見眼相猜。

自今已後知人意。

一日須來一百迴。

不如醉裏風吹盡。

何忍醒時雨打稀。

三絶句

〔一〕

楸樹馨香ありて釣磯に倚る、

斬新の花蘂未だ應に飛ぶべからず。

〔二〕

門外の鸕鷀去つて來らず、

沙頭忽ち見て眼相猜す。

今より已後、人意を知らば、

一日須らく來ること一百迴すべし。

如かず醉裏風吹き盡さむには、

何ぞ忍びむ醒時、雨打稀なるに。

【字解】〔一〕楸「かや」の類。〔二〕馨香　花のかをりあるをいふ。〔三〕釣磯　つりをするいそべ、江岸をいふ。〔四〕斬新　まあたらしきこと。〔五〕雨打稀　花が雨にうたれてまれになる。

【題義】楸花のことをよめる詩。寶應元年の作。

【詩意】楸のきの花がかをりをもちながらいそばたによつて立つてゐる。その花はいまさいたばかりのまあたらしい花だから飛び散るはずがないのに飛び散る。そんなことなら自分の醉つてゐるうちにみんな風が吹きとばして散らしてしまうた方がいいのだ。醉はずにゐるときにそれが雨にうたれてのこりすくなになるのをどうしてがまんしてみてゐられるものか。

【字解】〔一〕鸕鷀　うのとりの類。〔二〕去不來　去の字或は久に作る、去は立ち去ること、久はいままでながくの意。〔三〕相猜　相とあれども鸕鷀が猜するをいふ、猜とはうたがひの念をもつこと、おのれを害するに非るかとうたがふなり。〔四〕知人意　人意とは作者の意をいふ、作者は鸕鷀に親しまんとの意こそあれ之を害せんなどの意はすこしもなし。

【題義】江邊の鷗鷺のことをよめり。

【詩意】わが家の門外の鷗鷺がどこかへいつて（或は「ながなが」）こなかつたが、このたびまたやつてきて沙頭で自分と見あひ、なんだかうたぐりぶかい樣なかつかうをしてゐる。鷗鷺よ、おまへは今日からは自分のこころもちがわかつたらうから、毎日百遍づつもやつてくるがよいぞよ。

〔三二〕

無數春笋滿林生。
柴門密掩斷人行。
會須上番看成竹。
客至從嗔不出迎。

〔三二〕

無數の春笋、滿林生ず、
柴門密かに掩うて人行斷ゆ。
會ず須らく上番看て竹と成すべし、
客至るも嗔るに從ず、出で迎へず。

【字解】〔一〕笋　たけのこ。〔二〕密掩　ひとしれず門をとざしておく。〔三〕會　必ず。〔四〕上番　初回のこと、初回に出た笋のことをいふ。〔五〕看　看守ること。〔六〕成竹　しあげて竹にする。〔七〕客　來訪の賓客。〔八〕從嗔　いかるにまかす。〔九〕出迎　こちらがでむかへる。

【題義】春のたけのこのことをよめり。

【詩意】數しれぬ春のたけのこが林ぢうにはえた。このとき自分はわがやの柴の門をこつそりとざしてだれも門前にとほるものもない。自分は最初でたたけのこをば看まもつて竹にしあげ、あたりを竹だらけにしていくらおきやくがきてまごついておこらうともかつてにおこらせて自分は竹林にかくれてでむかへなどせぬ樣にしようとおもふのだ。

戲爲六絕句。

〔一〕

庾信文章老更成。
凌雲健筆意縱橫。
今人嗤點流傳賦。
不覺前賢畏後生。

〔一〕

戲れに六絕句を爲る

庾信が文章老いて更に成る、
凌雲健筆、意縱橫。
今人嗤點す流傳の賦、
覺らず前賢、後生を畏れしことを。

【字解】〔一〕庾信　北周の人、初、梁に事へ、のち周に使して留められ遂に周に仕ふ。南朝の徐陵とともに徐庾として並稱せらる。〔二〕老更成　老年に至りて、さらに成熟す。〔三〕凌雲健筆　健筆凌雲に同じ。〔四〕流傳賦　庾信の名作として傳へられつつある賦、信が哀江南賦、枯樹賦、其他名あるもの多し。〔五〕今人　作者同時代の輕薄文士をさす。〔六〕嗤點　ここがどう、かしこがどう、とわらつてゆびさしする。〔七〕不覺　今人之をさとらず。〔八〕前賢畏後生　此句諸解一ならず、余は余が見なのぶ、前賢畏後生とは孔子が後生可畏といはれしことをいふ、前賢とは前代の賢人にて孔子をさす、後生はわかもの、後進の義、庾信は風雅の作者、又は屈原、宋玉、漢魏の作者等に對すれば後生なりといふべし、しかし後生にも畏るべきものあるなり、たとへば庾信の如きこれなり。

【題義】作者戲れにつくりし六首の絕句なり。しかし決して戲れにはあらずまじめなる文學上の議論をのべたり。第一首は今人の無識をそしれり。仇氏は梁氏に從ひ上元二年の作なりとせり。

【詩意】北周の庾信はその文章は老年になつてからさらに成熟し、その健筆は雲をもしのぎ、その意は縱横にのべてある。かういふところを知りもせず今の人たちが傳來の庾信の賦をかれこれいひくさすが、彼等はむかしの聖賢も「後生畏るべし」といはれた意味をしらぬものである。庾信は後生ではあるが畏るべき人なのである。

〔二〕

楊王盧駱當時體。
輕薄爲文哂未休。
爾曹身與名俱滅。
不廢江河萬古流。

〔二〕

楊王盧駱、當時の體、
輕薄、文を爲つて、哂うて未だ休まず。
爾が曹、身、名と俱に滅す、
廢せず江河萬古の流。

【題義】此の第二首は初唐四傑をあしくいふ文士をそしれり。

【詩意】初唐のとき楊王盧駱の四傑が華麗な詩文を作つた。そのころの文體をいまの輕薄文士どもはわらうてやまない。之を笑ふところの汝等こそはからだも名もともにほろびてしまふのであるが、四傑の作品は江河の水が萬古滾滾として流れてつきぬごとくすたることのないものなのである。

【字解】〔一〕楊王盧駱　楊炯・王勃・盧照鄰・駱賓王、初唐の四傑と稱せらるる文學者。〔二〕輕薄　すなはち輕薄の文士。〔三〕爾曹　汝等、輕薄文士をさす。〔四〕江河萬古流　四傑の作品をたとへていふ。

〔三〕

縱使盧王操翰墨。
劣於漢魏近風騷。
龍文虎脊皆君馭。
歷塊過都見爾曹。

〔三〕

縱ひ盧王をして翰墨を操ること、
漢魏の風騷に近きより劣らしむるも、
龍文虎脊皆君が馭なり、
歷塊過都爾が曹を見む。

【字解】〔一〕縱使　この二字夫句までへかかる。〔二〕盧王　前詩にみゆ、ここは盧王をいひて楊駱をいはざれどもすべて四傑についていへるならん。〔三〕操翰墨　ふでをとる、文章をつづるをいふ。〔四〕漢魏近風騷　風は詩經の詩をさしていふ、騷は屈原宋玉等の韻文をいふ。漢魏時代の作品は風騷のおもかげありと稱せらる。〔五〕龍文虎脊　駿馬のすがたなり、四傑を駿馬にたとふ、龍文の語は漢書西域傳贊にみえ、虎脊は漢の天馬歌にみゆ。〔六〕君馭　馭は御におなじ、馬をあやつること、ここはあやつるにたへるものの義、君の字は人君をさすとする說と一般人をさすとする說とあり、余は一般人とみる。〔七〕歷塊過都　漢の王褒の聖主得賢臣頌の過ゞ都越ゞ國・厥若ゞ歷ゞ塊に本く。ただしここは厥くの義に用ひしに似たり、「都を過ぐるとき塊を歷てつまづくごとく」といふほどの義。〔八〕爾曹　輕薄文士の四傑をわらふ者をさす。

【題義】此第三首四傑を辯護すること第二首と似たり。

【詩意】四傑に詩文を作らせたとして、それは漢魏が風騷に近いおもむきがあるのとくらべれば劣るにしても、どうして四傑の作品はたいしたものだ、たとへば龍文虎脊のすがたをした駿馬のごとくみな人の馭すべき乘りものたるに十分なるものである。而してそれをわらふ汝等こそは馳せて國都をすぐるとき塊を歷てつまづく駑馬のごとく、そのときはじめて汝等の駑馬たるを見うるならん。

〔四〕

才力應難跨數公。
凡今誰是出羣雄。
或看翡翠蘭苕上。
未掣鯨魚碧海中。

才力應に數公に跨り難かるべし、
凡そ今誰か是れ出羣の雄なる。
或は看る翡翠蘭苕の上、
未だ鯨魚を掣せず碧海の中。

【字解】〔一〕才力　文學者の才能力量。〔二〕跨　またがる、こゆるないふ。〔三〕數公　庾信、四傑の輩をさす。〔四〕出羣雄　拔羣の英雄。〔五〕翡翠　「かはせみ」の鳥羽毛うるはし。〔六〕蘭苕　「らん」のはなぶさ、此句は作品の華麗なるにたとふ。〔七〕掣　ひきてひしぐないふ。〔八〕鯨魚　いさな、海中の大魚、此句は作品の雄健なるにたとふ。

【題義】今人中に大文豪なきをいふ。暗に自己の理想をのべたり。

【詩意】今人は古人のことをかれこれいふが、その才力に於て前述の數公よりまさることはむつかしいであらう。いつたいいまはだれが拔羣の英雄なのだ。蘭の花ぶさのうへに翡翠がとまつた樣な華麗なすがたをしたものは或はみとめうるが、碧海の中に鯨魚をとりひしぐ樣な雄健なるものはないではないか。

〔五〕

不薄今人愛古人。
清詞麗句必爲隣。

今人を薄んぜず古人を愛せば、
清詞麗句必ず隣を爲す。

【字解】〔一〕薄　さげすんでみること。〔二〕今人　比較的近代の人をさす、四傑の如きもこれなり。

竊攀屈宋宜方駕。
恐與齊梁作後塵。

竊に屈宋を攀ぢ宜しく駕を方ぶべし、
恐らくは齊梁と後塵と作らむ。

【字解】〔三〕古人　庾信をはじめ六朝以上の人人はみな古人なり。〔四〕爲隣　わが手もとちかくにあるないふ。

【題義】攀　古代の人ゆゑたかくよぢのぼるといへり。〔六〕屈宋　屈原、宋玉。〔七〕方駕　車をひく馬がかち棒をそろへてはしる樣にする。〔八〕與齊梁　與とは「於て」といはんがごとし、比較の辭なり。〔九〕作後塵　後塵とは車がはしるとき風下におこるちりほこりないふ、後塵と作るとは後塵を拜する人となるないふ、齊・梁は六朝の中期にて文學最も華麗綺麗となり、しかも雄健の風、衰へし時期なり。

【詩意】古今を併せてしかも理想をたかくもつべきことをいへり。近代の人をも輕視せず古代の人をも愛するときは清詞麗句は必ずわが手もとちかくにあるものである。しかし理想はたかくすべし、內心には屈原、宋玉、以上のところに攀ぢ、彼等とくつわをならべて馳すべきである。理想のもちかたがひくければ齊梁時代にくらべて却つてその後塵を拜むに終るのおそれがあるのである。

〔六〕

未及前賢更勿疑。
遞相祖述復先誰。

未だ前賢に及ばざるも更に疑ふこと勿れ、
遞に相祖述す復誰をか先にせむ。

【字解】〔一〕前賢　第一首の前賢とは語は同じきも義は異なり、こは前代の作家をさす。〔二〕祖述　

別裁偽體親風雅。　別に偽體を裁して風雅に親しむ、
轉益多師是汝師。　轉益多師なるは是れ汝が師なり。

【語義】すべてよきものはみな師とすべしとの意をのぶ。此第六首をみれば杜甫が古今の諸長を集めて大成せし所以を知るに足らん。

【詩意】諸君は自己が前代のすぐれた作者に及ばないからとて少しも疑ひの念をもつにはあたらぬ。我我は前代作家をたがひに祖述しゆくものであつてだれを先きにせねばならぬとかだれを後にせねばならぬとかいふことはないのである。しかし特別に風雅の正體と風雅の精神を得ない偽體とは區別せねばならぬ、そしてその偽體は之をきりすてて正體には親しむ。かくしていよいよ我が師とするものが多ければ多いほど、これが諸君にとつての眞の良師なのである。

祖として述べる、後人はその前代作家の作品を祖師として之に從て我が思想をのべる。【四】先輩　「師」を先にせん」とは「誰なか先にし、また誰なか後にせん」との意なり、甲乙の間に必しも優劣の差異を甚しくつけざるをいふ、つまり初も一長あるものは皆祖述すべしとの意、（舊解に此句を古人を祖述するを非とする義と爲せり、余之を取らず）。【五】別　特別に、此語は前代のものすべてを祖述すべしといふには非ることを注意するなり。（舊解に區別する義とせり。今從はず）。【六】裁　刀にてたちてすてる。【七】偽體　風雅にそむけるにせのすがた。

野人送朱櫻

野人朱櫻を送る

西蜀櫻桃也自紅。　西蜀の櫻桃も也自から紅なり、
野人相贈滿筠籠。　野人相贈りて筠籠に滿つ。
數回細寫愁仍破。　數回細寫す仍破れむことを愁ふ、
萬顆勻圓訝許同。　萬顆勻圓許ごとく同じきかと訝る。
憶昨賜霑門下省。　憶ふ昨賜霑す門下省、
退朝擎出大明宮。　退朝擎出す大明宮。
金盤玉筯無消息。　金盤玉筯、消息無し、
此日嘗新任轉蓬。　此の日嘗新、轉蓬に任す。

【字解】【一】野人　ひやくしやう。【二】朱櫻　さくらんぼ、みざくら。卽ち詩中の「櫻桃」是なり。【三】西蜀　西方蜀の地、西とは都に對していふ。【四】也　「亦」に同じ、都の櫻桃に對していふ。【五】相贈　こちらへおくつてくれしこと。【六】筠籠　筠は竹幹の色をいふ字なれども竹籠のことを筠籠といへり。【七】細寫　すこしづつ籠から寫しだすをいふ、實のこはれぬためなり。【八】愁　作者が心配する。【九】仍破　仍は「それでもなほ」、破は破損の意。【一〇】勻圓　そろつてまるい。【一一】許　此くのごとく。【一二】同　みなどれも一樣のまるさをもつてゐる。【一三】昨　往年左拾遺として長安にありしとき。【一四】賜霑　この實を天子よりたまはり、その惠みの露にうるほふ。【一五】門下省　長安の宣政殿の東にあり、左拾遺の官はそこに隷屬す。【一六】退朝　朝廷よりまかりしりぞく。【一七】擎　捧げていづる。【一八】大明宮　禁苑の東にあり、已に前にみゆ、唐にては四月一日に天子の御園より櫻桃をとりて之を宗廟に薦む、乾りてそれぞれの官にも之を賜ふ。【一九】金盤　黃金の大皿。【二〇】玉筯　玉にてつくりし「はし」、櫻桃を盛り、之を摘むに用ふる器具なり。【二一】無消息　盤・筯についてのたよりなし、此句は肅宗の崩御の意をふくみていへるものなりと、肅宗は寶應元年四月十八日丁卯に崩ぜられたり、もし崩御を意味すとせば此詩はその報知が成都につたはりし以後の作なり、余は單に消息なしと

いふだけにて必しも崩御の意をふくまぬものとおもふ。【二二】 韓蓋　よもぎの葉のころがりゆく如く飄泊の生活をなすをいふ。【二三】 此日　作者が之をたべたその日。【二三】 嘗新　新味をなめること。

【題義】 ある百姓が櫻の實を送りこしたについてよめる詩。上元・寶應の間、成都にての作。

【詩意】 ここの蜀の櫻桃も都とおなじく紅である。その實をひやくしやうが竹かごにいつぱい贈つてくれた。かごからあけるときに三四度もすこしづつうつすのだがそれでも實が破損しはせぬかときづかはれ、また千個も萬個もつぶがそろつて圓いのでよくもこんなに同じくそろつたものだとふしぎにおもふほどである。おもへば前年門下省につとめてゐたとき我我までもこの實の御下賜の恩典があり、朝廷からまかりしりぞくとき大明宮から頂戴の實をささげて退出したものだ。しかるに今や自分はこの蜀の遠方に居て前日の金盤や玉筯を用ひて臣下にこの實をたまはる樣子如何についてはさらに消息が無い。ただけふこそこんな新味をなめて飄泊のまにまにくらしてゐるといふありさまである。

【餘論】 唐の王維・韓愈・竝に櫻桃に關する詩あり、併せて此に錄す。王維が作に曰く

芙蓉闕下會千官。　紫禁朱櫻出上闌。
纔是寢園春薦後。　非關御苑鳥啣殘。
歸鞍競帶青絲籠。　中使頻傾赤玉盤。
飽食不須愁內熱。　太官還有蔗漿寒。

韓愈が作に曰く

漢家舊種明光殿。　炎帝還書本草經。
豈似滿朝承雨露。　共看傳賜出青冥。
香隨翠籠擎偏重。　色照銀盤寫未停。
食罷自知無補報。　空然慚汗仰皇扃。

嚴公仲夏枉駕草堂兼攜酒饌。得寒字

嚴公仲夏駕を草堂に枉げ兼て酒饌を攜ふ、寒の字を得たり

竹裏行厨洗玉盤。　竹裏行厨、玉盤を洗ふ、
花邊立馬簇金鞍。　花邊馬を立てて金鞍簇る。
非關使者徵求急。　使者徵求の急なるに關するに非ず、
自識將軍禮數寬。　自ら識る將軍禮數の寬なるを。
百年地僻柴門迥。　百年地僻にして柴門迥に。
五月江深草閣寒。　五月江深うして草閣寒し。

【字解】 【一】 嚴公　嚴武。【二】 仲夏　五月。【三】 饌　食物。【四】 得寒字　主客共に詩を賦し、その用ふる韻字に「寒」の字があたつたこと本詩は第六句に寒の字押韻せり。【五】 竹裏　草堂の庭のたけやぶのなか。【六】 行厨　攜帶してきた臺所。【七】 玉盤　玉の大皿。【八】 立馬　馬は從者の騎馬。【九】 使者

看弄漁舟移白日。　看漁舟を弄して白日移る、
老農何有磐交歡。　老農何ぞ交歡を磐す有らむ。

闕到へて曰く、もしききあやまりこれありてはすまぬゆゑ、願くはかへりて果して闕をめすやいなやをただされよと。使者もどりしに闕はそのまによそににげ去れり。ここの使者は嚴武ないふ、武は地方官なれば天子の使者なり、徵求は賢者をめし求むるなり。【一〇】徵求愈　「莊子」にみえたる顓闕が故事を用ふ、魯に顓闕といへる賢人あり、魯君よりめしだしの使者至る。將軍　嚴武は節度使なれば之を將軍といへり。【一一】禮數寬　禮數とは禮儀ないふ、すべて禮儀には階級あるゆゑ度數はつきものなり、故に禮數といふ、寬とは人に求むるに嚴重ならぬないふ。【一二】百年　生涯ないふ。【一三】地僻　僻はかたよること。【一四】週　城中よりしてはるかなること。【一五】五月　卽ち題の仲夏。【一六】江　錦江。【一七】草閣　草堂。【一八】寒　仲夏なれば本來は寒くはなきなれども竹林中に在りて清江の深きにのぞめるを以て寒くおぼゆるなり。【一九】看　看看におなじ。【二〇】弄漁舟　魚をとる舟、釣船のあそびをなすないふ、嚴武がかくするなり、前に見えし「晴天理釣絲」の句などがこれにあたる。【二一】移白日　これは人よりいはば消白日などいふべきなるも、白日よりいふ故に移といへり、移白日は白日移とおなじ、一日の時間のたつないふ。【二二】老農　としよりの百姓、作者自己ないふ。【二三】磐　つくす。【二四】交歡　たがひによろこぶ、末句は謙遜の辭なり。

【題義】嚴武が五月にわざわざ草堂をたづね、そのうへ酒や食物まで持參でやつてきてくれたときに作つた詩。但し韻を分けて自分は寒の字を得てつくつたのである。寶應元年五月の作。

【詩意】わが草堂の花のさいたあたりには金鞍をむらがらせて馬が立ちならび、竹林のなかでは臺所かたが玉盤を洗うてゐる。かく節度使たる嚴武がたづねてくれたのは急に自分をめしださうといふ樣な事に關してではない、かれがここまできてくれるといふのはまつたく自分如き無作法ものを寬大にもてなしてくれるといふに外ならぬことを自分はしつてゐる。自分が生涯をおくるこの地はかたゐなかでわが柴門は城中からはかけはなれてをり、五月にあたつて江水ふかうして草堂も寒くおぼゆるのである。ここで武は釣網などをするのをみながらけふの日をしらぬまにすごしてくれた。このひやくしやうおやぢがなんで節度使たるものと十分のうれしさをかはしたといふほどのことがあらうぞ。

【餘論】此詩の後半の平側は正式に違へり。

嚴公廳宴同詠蜀道畫圖得空字

嚴公の廳宴に同じく蜀道の畫圖を詠ず、空の字を得たり

日臨公館靜。畫滿地圖雄。　日臨みて公館靜なり、畫滿ちて地圖雄なり。
劍閣星橋北。松州雪嶺東。　劍閣は星橋の北、松州雪嶺は東なり。
華夷山不斷。吳蜀水相通。　華夷、山斷えず、吳蜀、水相通ず。
興與煙霞會。清樽幸不空。　興、煙霞と會す、清樽幸に空しからず。

【字解】【一】廳宴　廳は成都城の府の公堂、卽ち詩中の「公館」、宴はそこでのさかもり。【二】蜀道　蜀の棧道、陝西漢中府より四川の成都府へ通ずる道路なり。【三】畫滿　滿といへば多くの畫をへやいつぱいにならべしこと。一に列に作る、列はならぶること。【四】劍閣　劍門なり。【五】星橋　李氷の造る所、成都にありと。【六】松州雪嶺東　此句は上句の例によれば、松州ハ雪嶺ノ東とよむ

べきに似たり、（趙注にてはしかよませたり）、しかるに仇氏は雪山（卽ち雪嶺）在二松州嘉城縣東八十里一といふを引き、劍橋在二星橋之北一、松州則雪嶺居レ東といへり、卽ち松州雪嶺ハ東ナリとよませたるなり、（余は「劍閣・星橋」ノ北、「松州・雪嶺」ノ東、とよますかとも疑ふし敢て愚見を守らず、）今かりに仇氏によりおく。【七】華夷　支那本土と夷狄の地と。【八】吳蜀　吳は江蘇・浙江の地方をさす。【九】與　詩興。【一〇】煙霞　圖中の山水に伴ふもの。【一一】空　酒のからなること。

【題義】嚴武の官邸の酒宴にて蜀道の畫圖を觀てともに詠じた詩。寶應元年成都にての作。

【詩意】日が官邸のうへにかかつてやかたが靜である。そのをりざしきぢう畫がならべられ蜀道の地圖のさまは最も雄大にみえる。星橋の北には劍閣があり、松州では雪嶺がその東に横はつてをる。中國の方から夷狄の地へかけて山はつづいて斷えぬし、吳の方まで蜀から江水が相通じてゐる。これをみるとわが詩興が煙霞の景と合致するものがある、幸に酒だるもからつぽでないからいよいよ興がつきぬ。

戲贈友二首

元年建巳月。郎有焦校書。
自誇足膂力。能騎生馬駒。
一朝被馬踏。脣裂板齒無。

戲れに友に贈る　二首

元年建巳の月、郎に焦校書有り。
自ら誇る膂力足り、能く生馬駒に騎ると。
一朝馬に踏まれ、脣裂けて板齒無し。

壯心不肯已。欲得東擒胡。

壯心肯て已まず、東のかた胡を擒にするを得むと欲す。

【字解】【一】元年　寶應元年。【二】建巳月　上元の末に建子月（十一月）を歲首とせしこと前に見えたり、子よりかぞへ來れば巳の月は四月にあたる。【三】郎　校書郎の官。【四】焦校書　校書郎焦某。【五】膂力　せぼねの力。【六】騎　のる。【七】生駒　馬または駒のならされてゐぬもの。【八】板齒　まへば。【九】東擒胡　東は東北をいふ、擒はいけどりにすること、胡は安・史の賊寇。

【題義】たはふれに友人に贈つた詩。いづれも馬から墜ちた人人なり。寶應元年四月成都にての作。

【詩意】元年の四月に校書郎に焦某といふものが有り、みづからせぼねの力が十分あつて、ならされてゐぬ馬にものれると誇つてゐた。ところが一朝馬にふまれて、脣は裂かれ前齒はなくなつてしまつた。それでも焦はその壯な心は已まうとはしない、まだいくさに出かけて東のかた胡賊をいけどりにしたいものだといつてをる。

〔二〕

元年建巳月。官有王司直。
馬驚折左臂。骨折面如墨。
駑駘漫深泥。何不避雨色。

〔二〕

元年建巳の月、官に王司直有り。
馬驚いて左臂を折る、骨折れて面墨の如し。
駑駘、深泥を漫にす、何ぞ雨色を避けざる。

勸君休嘆恨未必不爲福。　君に勸む嘆恨するを休めよ、未だ必ずしも福爲らずんば―あらず。

【字解】〔一〕王司直　東宮の官にも大理寺の官にも司直と稱するものあり、王はいづれに屬せしか不明、王は其名詳ならず、作者のちに王郎司直に贈れる歌あり、同人ならん。〔二〕如墨　蒼し泥土にけがされしならん。〔三〕驊騮　だうま。〔四〕漫　漫はみだりにす、どろかどろでないかなみきはめず、よいかげんにあるくないふ。漫一に慢に作る。〔五〕雨色　色の字深き義なし、あまげしきといふことなるも雨ないふなり。〔六〕未必一句　暗に塞翁が馬の故事を用ふ、塞翁の子馬よりおち腕を折りしため軍役にやられて死することなまぬかれたり。

【詩意】元年の四月に王司直といふ官員があり、そののれる馬がものに驚いて王は左の臂を折つた。骨は折れたし面はどろまみれで墨の様にくろくなつた。駄馬は深い泥みちでもよいかげんにあるくものだ、なんで雨模様のときを避けなかつたのだ。君にすすめるが、臂が折れてもなげきうらむなよ、塞翁の子の様にそれが幸福にならぬともかぎらぬから。（これはたはふれにいへるなり）

大雨

西蜀冬不雪。春農尙嗷嗷。
上天回哀眷。朱夏雲鬱陶。
執熱乃沸鼎。纖絺成縕袍。
風雷颯萬里。霈澤施蓬蒿。
敢辭茅葦漏。已喜黍豆高。
三日無行人。二江聲怒號。
流惡邑里淸。矧茲遠江皐。
荒庭步鸛鶴。隱几望波濤。
沈疴聚藥餌。頓忘所進勞。
則知潤物功。可以貸不毛。
陰色靜壠畝。勸耕自官曹。
四隣耒耜出。何必吾家操。

大雨

西蜀、冬、雪ふらず、春農尙嗷嗷たり。
上天、哀眷を回らす、朱夏、雲鬱陶たり。
執熱乃ち鼎を沸す、纖絺、縕袍と成る。
風雷、萬里に颯たり、霈澤、蓬蒿に施す。
敢て辭せむや茅葦の漏るるを、已に喜ぶ黍豆の高きを。
三日、行人無し、二江聲怒號す。
惡を流して邑里淸し、矧や茲の江皐遠きをや。
荒庭に鸛鶴歩す、几に隱りて波濤を望む。
沈疴、藥餌聚まる、頓に進むる所の勞するを忘る。
則ち知る物を潤すの功、以て不毛に貸す可きを。
陰色、壠畝靜なり、耕を勸むること官曹よりす。
四隣、耒耜出づ、何ぞ必ずしも吾が家の操のみならむ。

【字解】〔一〕冬不雪　上元二年の十月以來雨なかりしといふ。〔二〕春農　春のひやくしやう、實應元年に入りての農家をいふ。〔三〕嗷嗷　雨ほしと口やかましくいふ。〔四〕上天　天帝。〔五〕回哀眷　回とは眼をこちらへむけかへること、哀眷とは農家のなんぎをあはれみて眼をかけてやること。〔六〕朱夏　五行說により四時に色を配す、春は青、夏はあかにて朱なり。〔七〕鬱陶　いぶせくふさがるさま。〔八〕執熱　詩經の語、ここはただ熱の義に用ふ。〔九〕沸鼎　かなへのお湯をわかすごとし。〔一〇〕纖絺　ほ

そいいとすぢのくづぬの、かたびらをいふ。【二】成經袍　どてらの様になる、とは暑く感ずるをいふ。【三】颯　風の吹くさま。【四】霈澤　霈は雨の多きさま、澤はうるほひ。【五】施　施與の義。【六】蓬蒿　よもぎのくさ。【七】茅茨　かや、よし、草堂の屋根をいふ。【八】高　たけがのびしこと。【九】二江　李冰がひらきし内江・外江をいふと。【一〇】流惡　惡とは穢惡の物をいふ。【一一】邑里　縣や村。【一二】遠江皐　江皐遠とおなじ、江皐はかはぞひの岡、浣花溪の地をさす。【一三】隱几　脇息にもたれること。【一四】藥餌　藥物、滋養物の問屋となつてゐたといふこと。【一五】沈痾　ながながのやまひ。【一六】潤物功　雨の功。【一七】貨　施與の義。【一八】所逝　逝は逝御、服用することをいふ。【一九】埴蔵　なが、うれ。【二〇】官曹　官のつめしよ、官員をさす。【二一】不毛　草木の生ぜざる地をいふ。【二二】險色　あめのはれぬやうす。【二三】乘雘　雘は「すきかしち」。【二四】操　「とる」、すきをとり用ふるをいふ。

【題義】大雨のありしを喜びて作れる詩。寶應元年夏成都にての作。

【詩意】西方蜀の地では去年の冬、雪がふらなかつたのでことしの春になつて農家はまだ口やかましく雨がほしいというてゐる。天もそれをあはれとおぼしめしてなさけの眼をこちらへおむけかへくださつて、ま夏のそらに雲がふさがつた。あつさは鼎のお湯をわかす樣であり、かたびらもどてらの樣に感せらるるほどになつた。ところへ萬里の遠くまで風や雷がさつとやつてきて、多量の雨のうるほひがよもぎの草にまで施し與へらるるに至つた。』　自分は屋根にあまもりがするぐらゐのことは辭する所ではなくみるうちにはや黍や豆がせがたかくなつたのをうれしくおもふ。三日のあひだは途ゆく人さへなく、城邊の二つの江は水の聲が怒り號んでゐる。きたないものはみんな洗ひ流して縣や村も清らかになつた、ましてこの遠方の江ぞひのをかのあたりに於てをや。わが草むらの庭には鶴やつるがあるいてゐるし、自分は脇息によりながら波濤のさまをながめてをる。』　自分は長長の病氣で藥品と滋養物の問屋であつたが、この雨のおかげで急にせつせとそんな品物を用ふる御苦勞を忘れてしまつた。これでかんがへるとこの雨の物をうるほす功は草木のはえぬ地にまでも及ぼして施すことができるであらう。あまぐもりのうちにはたけのうねが靜に横はつてゐる。役所からはしきりに耕作をすすめる。それがためあたり近所からみんな耒をとるものが出だした。吾が家のものがそれを手にしだしたばかりではない。』

溪漲

當時浣花橋。溪水纔尺餘。
白石明可把。水中有行車。』
秋夏忽泛溢。豈惟入吾廬。
蛟龍亦狼狽。況是鼈與魚。
茲晨已半落。歸路跬步疎。
馬嘶未敢動。前有深塡淤。』

當時浣花橋、溪水纔に尺餘。
白石明にして把る可く、水中に行車有り。』
秋夏忽ち泛溢、豈に惟吾が廬に入るのみならむ。
蛟龍亦狼狽す、況や是れ鼈と魚とをや。
茲晨已に半ば落つ、歸路、跬步疎なり。
馬嘶いて未だ敢て動かず、前に深き塡淤有り。』

青青屋東麻。散亂床上書。
不知遠山雨。夜來復何如。
我遊都市間。晩憩必村墟。
乃知久行客。終日思其居。

青青たり屋東の麻、散亂す床上の書。
知らず遠山の雨、夜來復何如。
我都市の間に遊ぶ、晩に憩ふは必ず村墟なり。
乃ち知る久行の客、終日其の居を思ふことを。

【題義】浣花溪の水がみなぎりて。城からのかへりみちをくひとめられしことをのべたり。寶應元年成都にての作。

【詩意】いつもは浣花溪の橋のところは溪水がわづかに一尺あまりで、川底の白い石ははつきり見えて手にとることができ、水の中には車がとほるほどである。』しかるに夏秋にはこの水が忽ちあふれだして、自分のいほりにいりこんだばかりでなく、蛟龍さへうろたへだす、ましてただの鼈や魚はなほのことである。けふのあさは水は半はへつたのだが城からのかへりみちにはまだ人のあるきかたはまばらである。自分ののつた馬は嘶いて動かうとはせぬ、それは前に深いどろがあるからである。』おもふにわが家屋の東の麻は青青とのびたであらう。わが書齋のゆかのうへの書物は讀みさしたまま散亂してゐるであらう。(どれも自分がみまはらねばならぬものだ)遠山ではまた雨が夜にかけてふりだしはせぬか、ふればこの溪川の水がまたまして自分をさまたげるだらう。自分は市街へ遊びにでかけるが、晩にかへつてやすむのはいつも浣花の村墟なのだ、(それがけふはかへれぬのだ。)ながたびをしてをる旅客(自己をさしていふ。一說に一般旅人の情をいふとなす。)といふものはあさからばんまで自分の住居を思うてゐるものだといふことがこれで知らるる。

大麥行

大麥乾枯小麥黃。
婦女行泣夫走藏。
東至集壁西梁洋。
問誰腰鎌胡與羌。

大麥は乾枯し小麥は黃なり、
婦女は行くゆく泣き夫は走り藏る。
東は集壁に至り西は梁洋、
問ふ誰か鎌を腰にする胡と羌と。

【字解】【一】大麥行　大麥の枯れしころの兵亂についてつくれるうた、後漢の桓帝の時の童謠に曰く、小麥青青大麥枯。誰當收穫者劉與姑。丈夫何在西擊胡。と。作者之にならひて此詩をつくる。【二】行泣　ゆく

【字解】【一】當時　平時をいふ。【二】浣花橋　浣花溪に架したる橋、萬里橋をいふ。【三】茲晨　作者のかへらんとしたあさなり、歩とは兩たび足をあぐるをいふ、六尺なり、支那の歩とは甲の足があがりてから地につくまでの距離をいふ、我我の一歩は支那の半歩(即ち跬)なり。【四】疎　人どほりまばら。【五】馬　作者自己の乘馬。【六】壍淤　うづまれるどろ。【七】青青二句　作者意中にて想像していふ。【八】復何如　遠山に夜雨がふりはせぬか、若し果して雨あればこの江水がますであらうと案ずるなり。【九】都市間　成都の市街をいふ。【一〇】村墟　村のあれあと、浣花村をさす、すなはち草堂をいふ。【一一】復何如　遠山に夜雨がふりはせぬか、若し果して雨あればこの江水がますであらうと案ずるなり。【一二】都市間　成都の市街をいふ。【一三】村墟　村のあれあと、浣花村をさす、すなはち草堂をいふ。

豈無蜀兵三千人。　豈に蜀兵三千人無からむや、
簿領辛苦江山長。　簿領辛苦、江山長し。
安得如鳥有羽翅。　安んぞ得む鳥の如く羽翅有るを、
託身白雲歸故鄉。　身を白雲に託して故鄉に歸らむ。

【題義】麥のみのるころ胡羌の侵入ありしことについてつくれるうた。寶應元年夏の作。

【詩意】大麥はひて枯れ小麥は黃ばんで熟した。このとき婦女はゆくゆく泣き夫は走りかくれる。その地方は東は集・壁の二州に至り、西は梁・洋の二州へかけてである。だれがその麥を刈りに侵入してきたのかと問へば、それは胡と羌のえびすだとのことだ。胡羌をおひはらふには蜀の兵が三千人無いわけではないが、その部隊を引きつれて征伐にでかけることはなんぎなことであり途中の江山も長くとほい。こんな兵亂をみるより自分は鳥の樣に羽やつばさがありたいとおもふ、つばさがあればおのがからだを白雲に託して故鄉へとんでかへらうものを。

奉送嚴公入朝十韻

嚴公が入朝するを送り奉る十韻

鼎湖瞻望遠。　鼎湖、瞻望遠く、
象闕憲章新。　象闕、憲章新なり。
四海猶多難。　四海猶多難、
中原憶舊臣。　中原、舊臣を憶ふ。
與時安反側。　時の與に反側を安んず、
自昔有經綸。　昔より經綸有り。
感激張天步。　感激、天步を張り、
從容靜塞塵。　從容、塞塵を靜にす。
南圖迴羽翮。　南圖、羽翮を迴らし、
北極捧星辰。　北極、星辰を捧ず。
漏鼓還思晝。　漏鼓還晝を思ふ、
宮鶯罷囀春。　宮鶯春に囀るを罷む。
空留玉帳術。　空しく留む玉帳の術、
愁殺錦城人。　愁殺す錦城の人。
閣道通丹地。　閣道、丹地に通ず、
江潭隱白蘋。　江潭、白蘋に隱る。
此生那老蜀。　此の生那ぞ蜀に老いむ、
不死會歸秦。　死せずんば會ず秦に歸らむ。
公若登台輔。　公若し台輔に登らば、
臨危莫愛身。　危きに臨みて身を愛すること莫れ。

【字解】【一】嚴公入朝　寶應元年四月十八日丁卯肅宗長生殿に崩ず、是の月二十八日己巳、代宗位に即く、嚴武を召して構遣使（山陵をつくる長官）となす、武の蜀を出發せるは夏にあり。【二】鼎湖　黃帝が死せし故事、已に前に見ゆ、肅宗の崩をいふ。【三】瞻望　こちらから升天した天子をながめること。【四】象闕　象は象魏といふ、象は法令なり、魏は闕に當りて高くそびゆるをいふ、古は宮門の闕に法令を掲示せり、その門を象魏といへり。【五】憲章　法令をいふ、此句は代宗の即位をいふ、即位の初は法令新にい

ゆく泣く。【三】集壁　梁洋四州の名有り、今の陝西漢中府、四川保寧府にわたる地。【四】簿錄　事を刈りにきたことをいふ。【五】胡羌　これは答への辭、刈りにきたものは胡と羌とである。朱氏の說に胡羌は漢奴則・寫項羌をいふとなせり。【六】簿領　簿領とは記錄の帳面をつかさどることなり、兵とは關係なし、簿一に部に作る、從ふべし、部領は軍隊の部曲を領することなり。【七】江山長　胡羌のところまでの距離とほし。【八】安得　希望のことば。【九】翅　つばさ。

づ。【六】多蘿　蔬徒史朝義未だ平がず。【七】中原　都の地方、その地方の官民をさす。【八】書臣　嚴武をさす。【九】興時　時世のために。【一〇】反側　反逆の徒をさす。【一一】綸綸　政治上のきりもりをすること。【一二】感激　國恩にはげしく感ずる。【一三】要天步　天步の二字は詩經にいづ、國運の進行をいふ、張るとは長安を賊の手からとりかへせしをいふ。【一四】從容　ゆったり。【一五】靜塞鹽　とりでのちりをしづかならしめる。成都に來任して其土をしづめしをいふ。【一六】南圖退羽翮　南圖の羽翮をかへすといふこと、南圖は「莊子」に鵬といふ大鳥が九萬里につばさをうちて南せんとはかるといへるはなしあり、嚴武南方に事功をたてんとせしに怨ち都へかへるを鵬に比していへり。【一七】北極捧星辰　北極にて星辰をささぐ、中央にかへりて天子をうやまひ之に仕ふるをいふ。【一八】漏鼓　宮中にある水時計。【一九】思蓋　天子の朝に侍ることの久しきをいふ、思とは作者が之をおもふをいふならん、蓋し作者の蓋蒲結聞高閣報のことなどを遠想していふなるべし。【二〇】韜鞠春　嚴武の入京のときの夏にして春すでにすぐるをいふ。【二一】玉帳術　玉帳は兵家の厭勝の方位にして、主將もしその方位に軍帳を置くときは堅くして犯す可らざること玉帳のごとく然りといへり、これは羌胡に對する方略をさすならん。【二二】錦城人　錦官城中の人、蜀民をいふ。【二三】閣道　棧道をいふ。【二四】丹墀　丹墀ともいふ、宮殿の階下の土壇、そこには丹を以て地を塗るゆゑ丹墀といふ。【二五】江潭　錦江の百花潭。【二六】陸白蘋　白蘋は白き花さくよもぎ、水草なり、江邊にかくるるを白蘋にかくるといへり。【二七】那老蜀　どうして蜀にて老いをすごさうや、すごさぬ。【二八】會　必ず。【二九】秦　長安。【三〇】公　嚴武をさす。【三一】台輔　宰相の地位。【三二】愛　愛惜する。

【題義】嚴武が成都から中央朝廷へかへるのを送つた詩。寶應元年夏の作。

【詩意】肅宗皇帝が黃帝のやうに鼎湖でおかくれになり升天されたためこちらからいくらながめても遠くてみえぬ樣になつてしまはれた。それとともに新天子代宗皇帝が御卽位になつて御所の御門には法令が新にかかげられるに至つた。いま天下はまだ難儀なことが多いので、中原の地では君の如き舊臣をおもうて、之を迎へ用ふることになつた。』君は昔から經綸の才があつて、かつては時世のために反逆の徒を安んじた、また感激して國運の艱難を救うてその威力を張り、出でては從容として塞の塵をしづかならしめた。それがこんど圖南のつばさをむけかへて、北極に於て星辰をささぐることになつた。君のゆくころは宮中の鶯も春にさへづることをやめ夏になつてゐるし、參朝久しきにわたつてはいつしか晝になるだらうが、自分も水時計がかつては晝の刻を報じたのをきいたことを思ふ。』君はいたづらに兵法の術をとどめて蜀を去るにより、錦城の蜀民はみな非常に愁ひをふくんでゐる。君のゆく棧道は宮殿の丹地の方へと通じてゐるが、自分は江潭で白蘋のそばにかくれてゐる。自分の生涯はどうしてこんな蜀に老いはてることができよう、死なずにいのちさへあるなら自分はきつと長安へかへるつもりだ。君は若し中央で宰相の位にでもものぼつたなら、決して危難にさしかかつても一身を愛惜することなかれ、身命をなげだして國家のためにつくすがよい。』

【餘論】嚴武の此の行、作者送りて綿州に至りて別る。武作者にむくいて別るる詩あり、此に併記す。

酬別杜二

獨逢堯典日。　再覩漢官儀。
夜鐘清萬戶。　曙漏拂千旗。
未效風霜勁。　空慙雨露私。
竝向殊庭謁。　俱承別館追。

斗城憐舊路。　涪水惜歸期。　峰樹還相伴。　江雲更對誰。
試回滄海棹。　莫妬敬亭詩。　秪是書應寄。　無忘酒共持。
但令心事在。　未肯鬢毛衰。　最悵巴山裏。　清猿惱夢思。

杜二に酬い別る　嚴武

獨り逢ふ堯典の日、再び覩る漢官の儀。未だ效さず風霜の勁、空しく慙づ雨露の私。夜鐘、萬戸清く、曙漏、千旗拂ふ。竝に殊庭に向つて謁す、俱に承く別館の追。斗城、舊路を憐み、涪水、歸期を惜しむ。峰樹還相伴ふ、江雲更に誰にか對す。試に滄海の棹を回せ、妬む莫れ敬亭の詩。秪是れ書應に寄すべし、忘るる無れ酒共に持せしことを。但心事をして在らしめば、未だ肯て鬢毛衰へたりとせず。最も悵む巴山の裏、清猿、夢思を惱ますことを。

送嚴侍郎到綿州同登杜使君江樓宴。得心字

嚴侍郎を送りて綿州に到り同じく杜使君が江樓に登りて宴す。心の字を得たり

野興每難盡。江樓延賞心。　野興毎に盡き難し、江樓、賞心を延く。
歸朝送使節。落景惜登臨。　歸朝、使節を送る、落景惜しみて登臨す。

稍稍煙集渚。微微風動襟。　稍稍、煙、渚に集まり、微微、風、襟を動かす。
重船依淺瀨。輕鳥度曾陰。　重船、淺瀨に依り、輕鳥、曾陰を度る。
檻峻背幽谷。牕虛交茂林。　檻、峻にして幽谷に背く、牕、虛にして茂林に交はる。
燈光散遠近。月彩靜高深。　燈光、遠近に散じ、月彩、高深に靜かなり。
城擁朝來客。天橫醉後參。　城は擁す朝來の客、天には橫はる醉後の參。
窮途衰謝意。苦調短長吟。　窮途、衰謝の意、苦調、短長の吟。
此會共能幾。諸孫賢至今。　此の會共にすること能く幾たびぞ、諸孫、賢今に至る。
不勞朱戸閉。自待白河沈。　勞せず朱戸を閉づるを、自ら待つ白河の沈むを。

【字解】〔一〕嚴侍郎　嚴武をいふ、このとき嚴武が兵部侍郎なりしや黃門侍郎なりしや吏部侍郎なりしや明確ならざるも、「通鑑」によれば兵部侍郎なり。〔二〕綿州　成都の東北にあり。〔三〕杜使君　使君は刺史の敬稱、杜は綿州の刺史なり、名は詳ならず、詩によれば蓋し作者の從孫にあたるものなり。江樓　涪江のほとりの樓。〔四〕野興　田野の風景をながめる興味。〔五〕延　我が心を引くといふ。〔六〕賞心　佳景を賞愛する心。〔七〕歸朝　朝廷へかへる。〔八〕使節　使者、嚴武をさす。〔九〕落景　ゆふ日のかげ。〔一〇〕惜　この字は落景へかかる。〔一一〕稍稍　しだいに。〔一二〕重船　おもきふね、即ち大船。〔一三〕輕鳥　みがるくとぶとり。〔一四〕度　とびてゆく。〔一五〕曾陰　曾層通ず、かさなりたるくもり。〔一六〕樓　樓のてすり。〔一七〕背　背面にしてたる。〔一八〕交茂林　しげつた林の影がいりまじる。〔一九〕燈光　人家のともしび。〔二〇〕高深　高は山峰をいひ、深は溪

巻をいふ。【三一】城　綿州城。【三二】掛　かかへる、大切に迎へたこと。【三三】客　嚴武の一行をさす。【三四】參　星の名、みつぼし、月没してあらはる。【三五】窮途　逆境をいふ。【三六】襄謝　謝し「おとろへる」なり。【三七】苦調　くるしげな音調。【三八】短長吟　みじかくながくこゑをひきてうたふうた、作者の詩をいふ。【三九】幾　幾回の義。【三〇】諸孫　羣衆孫、杜使君をさす。【三一】賢　杜使君をほめていふ。【三二】勞　わづらはす義。【三三】朱戸　りつぱな戸。【三四】白河　あまのがは。【三五】沈　あまのがはしづむは夜明けなり。

【題義】兵部侍郎嚴武を送りて綿州までゆき、そこでいつしよに刺史杜某が江樓にのぼつてさかもりをしたことをのべたる詩なり。寶應元年六月綿州にての作。

【詩意】田野の景に對する興味はいつも盡きがないがここでは江ぞひの樓のながめがさらに我我の賞愛の心をひく。それで朝廷へかへる使者を送りながら、いり日のかげを惜しみつつここに登臨してみるのである。』　みるとしだいに煙が渚に集まり、そよそよと風がえりもとをうごかす、おもたげな船は淺瀨に依つてゐるし、身輕の鳥はいくへのくもれるそらをわたつてゆく。幽邃な谷を背にしてすりかけはしくそびえ、からりとしたまどにはしげつた林樹の影がまじはつてゐる。遠近には人家の燈火がちらほらみえ、月のひかりも高山深谷に靜にてりこんでゐる。』　ここの城では朝からかけてのお客を迎へてをるが、醉のまはるにつけて、はや參星が天に横はつてゐる。このとき逆境にありてかつ老衰しゆく自分のこころもち、くるしげな音調をもつ自分の短吟長吟それはいかなるものであるか。ともどもこの樣な會合をするのも幾たびできるか、恐らくたびたびはできまい。幸にして今日に於て我が羣從孫中に賢なること杜使君のごときものを見るのである。使君よ、どうぞこの江樓の朱戸をわざわざおしめくださるな、わたしはひとりでにあまのがはが沈んでよあけになるのを待たうとおもふのである。』

奉濟驛重送嚴公四韻　奉濟驛にて重ねて嚴公を送る四韻

遠送從此別。青山空復情。
幾時盃重把。昨夜月同行。
列郡謳歌惜。三朝出入榮。
江村獨歸處。寂寞養殘生。

【字解】【一】奉濟驛　綿州の東三十里にありといふ。【二】嚴公　嚴武。【三】此　此地、驛をさす。【四】青山　附近の山をいふ。【五】空復情　情とはこちらが悲しみの情をもつをいふ。【六】幾時　何時におなじ。【七】列郡　東川・西川の地方。【八】謳歌　歌。嚴武の政治上の德をうたひたたへる。【九】惜　武の去るををしむ。【一〇】三朝　玄宗肅宗代宗の三代。【一一】出入　出でて濟となり、入りて相となる。【一二】榮　榮譽をになふ。【一三】江村　浣花村。

【題義】綿州の城外の奉濟驛といふところで、いよいよ嚴武と別れるときに、重ねて之を送るために作つた詩。

【詩意】自分ははるばる送つてきたがここでお別れをする。別れるとなると附近の青山を見てもいたづらにわが悲しみの情をいだかせるばかりだ。いつ君とふたたび盃を手にしようか、ゆうべは明月のもとにいつしよにあるいたものを。君は三朝に歴事して出入ともに榮譽をになうてをり、その去るにあたつては列郡は君の德をたたへてこれを惜しんでゐる。自分はこれから浣花の江村へひとりでもどつて、そこでさびしく老いさきを養ひゆくであらう。

送梓州李使君之任

【原注】故陳拾遺射洪人也。篇末有云。

梓州の李使君が任に之くを送る　【原注】故の陳拾遺は射洪の人なり、篇末に云ふこと有り。

籍甚黄丞相。能名自潁川。　籍甚なり黄丞相、能名、潁川よりす。
近看除刺史。還喜得吾賢。　近看る刺史に除せらるるを、還喜ぶ吾が賢を得たるを。
五馬何時到。雙魚會早傳。　五馬何の時か到らむ、雙魚會ず早く傳へむ。
老思筇竹杖。冬要錦衾眠。　老いて思ふ筇竹を杖かむことを、冬は要す錦衾の眠り。
不作臨岐恨。惟聽舉最先。　臨岐の恨を作さず、惟聽く舉最の先なるを。
火雲揮汗日。山驛醒心泉。　火雲、揮汗の日、山驛、醒心の泉。

遇害陳公殞。于今蜀道憐。　害に遇うて陳公殞ちぬ、今に于て蜀道憐む。
君行射洪縣。爲我一潸然。　君射洪縣に行かば、我が爲に一たび潸然たれ。

【字解】〔一〕梓州　唐にては東川節度使の治所なり、綿州の南にあたる、今の四川省瀘川府これなり。〔二〕李使君　名は詳ならず、梓州の刺史なり。〔三〕之任　任地梓州へゆくなり。〔四〕故陳拾遺　已になくなつた拾遺の官陳子昂、子昂は初唐の武后時代に文名ありし人。〔五〕射洪　縣の名、瀘川府三臺縣の東南にあり。〔六〕有云　本篇の末の四句をさす。〔七〕籍甚　名聲のかまびすしきこと。〔八〕黄丞相　漢の黄霸が亭、霸は潁川太守となり神明と稱せらる、のちめされて入りて丞相となれり、いま李使君を之に比す。〔九〕潁川　郡の名、亭は上にみゆ、蓋し李の前任地にあてていへるならん。〔一〇〕除　任命さるること、舊官を除きて新官に拜する義なりと。〔一一〕吾賢　賢とは李をほめていふ、吾とは親しむことばなり。〔一二〕五馬　太守の用ふる車の馬かず、已に前にみゆ。〔一三〕到　任地に到著するをいふ。〔一四〕雙魚　雙鯉魚なり、手紙のむすびかたなりといふ、手紙の義に用ふ。〔一五〕傳　先方よりこちらへ傳へくるるならんといふなり。〔一六〕筇竹　邛州より產するふしだかの竹なり。〔一七〕杖　動詞として用ふ。〔一八〕錦衾　うつくしきかいまき。〔一九〕臨岐恨　岐はまたになりたるみち。〔二〇〕舉最先　最とは殿最の最、考課の成績の優等なるを最、劣等なるを殿といふ、李が刺史に任ぜられしは最にあげらるること他人よりも先なるなり。〔二一〕火雲二句　節候をいふ、火雲はあかやけのくも。〔二二〕揮汗日　汗をふるふ日とはあつきときをいふ。〔二三〕山驛　李の通過する驛をいふ。〔二四〕醒心泉　つめたくて人の情心をよびさますいづみ。〔二五〕遇害陳公殞　陳子昂の父、射洪に在り、縣令段簡に辱しめらる、子昂之をきさて鄉にかへりしに、簡、事に因りて子昂を獄中に收繫す、子昂憂憤して卒せり、これ遇害の事實なり、殞は死ぬこと。〔二六〕蜀道憐　蜀道の人人。〔二七〕潸然　さめざめとなく貌。

【題義】梓州の刺史李某が任地へゆくのを送る詩。梓州の管内には射洪縣があり、縣からは陳拾遺が出て非命にたふれてゐる、だから篇末にその事にいひおよんでおいた。寶應元年夏、綿州にての作。

【詩意】漢の黄霸にも比すべき君の評判はやかましいもので有能の名が潁川からつたはつてをる。ちかごろみると君は刺史に任命されてゐる。君のやうな賢者を得たことはよろこばしいことだ。」いつになつたら君の馬車はあちらへ到著するだらうか、到著したらきつと手紙を早くよこしてくれることとおもうてゐる。またこのおやぢは年がよつて筇竹のつゑをつきたいともおもふし、冬になれば錦のかいまきで眠りたいともおもうてゐる。（そのことも君はかんがへてくれるであらう、の意ならん）」自分はわかれぢに臨んでの恨みをもつことはせぬ、ただ君が成績優等として抜擢されたのをきいてよろこぶ。いまやひでりぐもがあかくでて人人が汗をふるふのとき、君は山驛をへて醒心のしみづを汲みつつゆく。」彼の陳拾遺は人のために殺害されてなくなられた。蜀道の人人はそれを今でもきのどくにおもうてをる。君が管内をめぐつて射洪縣をとほられたなら、わたしのために之を弔うて一掬同情の涙をそそいでやつてくだされ。」

觀打魚歌

打魚を觀る歌

綿州江水之東津。
魴魚鱍鱍色勝銀。

綿州江水の東津、
魴魚鱍鱍として色銀に勝る。

漁人漾舟沈大網。
截江一擁數百鱗。
衆魚常才盡却棄。
赤鯉騰出如有神。
潛龍無聲老蛟怒。
迴風颯颯吹沙塵。
饔子左右揮霜刀。
鱠飛金盤白雪高。
徐州禿尾不足憶。
漢陰槎頭遠遁逃。
魴魚肥美知第一。
既飽驩娛亦蕭瑟。
君不見朝來割素鬐。

漁人舟を漾はして大網を沈む、
江を截りて一擁す數百鱗。
衆魚は常才なり　盡く却棄す、
赤鯉は騰出す、神有るが如し。
潛龍聲無く老蛟怒る、
迴風颯颯として沙塵を吹く。」
饔子左右に霜刀を揮ふ、
鱠飛んで金盤に白雪高し。
徐州の禿尾は憶ふに足らず、
漢陰の槎頭遠く遁逃す。
魴魚の肥美知る第一、
既に飽きては驩娛も亦蕭瑟たり。
君見ずや朝來、素鬐を割く、

【字解】〔一〕打魚　「打」の字は俗語になんでもはたらくことばに通用させてつかふ字なり、ここは「網もて取る」義に用ふ。〔二〕江水　江は浙江。〔三〕東津　ひがしのわたりば。〔四〕魴魚　魚の名、鯛といふ魚と同種なりといへり。〔五〕鱍鱍　はねる貌。〔六〕截江　江水をよこ一文字にたちきろ、網をひきはへるさま。〔七〕一擁　一べんでなかへかかへこむ。〔八〕鱗　魴魚をさす。〔九〕衆魚　魴以外の多くのうを。〔一〇〕常才　平凡なやつ。〔一一〕却棄　しりぞけすてる。〔一二〕赤鯉　まごひ。〔一三〕饔田　あみからなどつててしまふ。〔一四〕無聲　機を知りて害をうけぬ樣に聲なださぬ。〔一五〕怒　同類の魚がとられることを怒るなり。〔一六〕迴風　吹さまはすかぜ。〔一七〕颯颯　風の吹くさま。〔一八〕饔子　料理人。〔一九〕霜刀　とぎすまし

咫尺波濤永相失。

咫尺波濤永く相失す。

容。【三三】徐州禿尾　徐州に鰣または鱸といへる魚あり、禿尾とはそれならんかといへり、其地の名物にてうまきものなるべし。【三三】漢陰槎頭　漢陰は漢水のほとりの地名、柴木を水中に積み中に魚を養ふ、その柴木のことを槎といふ、襄陽にては槎をなまりて槎といふ、槎頭とは槎頭なりと、ただし襄陽にては養魚のためでなく水を隔つために槎を用ふといへり、槎頭は槎のほとりでとりたる魚のこと、魚の名は鯛といふ、この魚あたまがつぶれた様なるものと見え縮頂鯛の名あり。孟浩然が詩句に、試垂竹竿釣果得槎頭鯛などあり。【三四】逢迎　競爭できぬゆゑにげだす。【三五】肥美　ふとりてうまし。【三六】飽　十分滿腹するまでたべあきては。【三七】鱗鬣　さびしきさま。【三八】剡素雪　魴魚のしろきひれをさく、鱠をつくるため之を殺すをいふ。【三九】咫尺　八寸一尺のまちかで。

【題義】綿州の涪江の東津で魴魚の網打ちを觀てつくつたうた。寶應元年綿州にての作。

【詩意】綿州の涪江の東津。そこでは魴魚がぴちぴちとはね色は銀よりも白い。れふしが舟をただよはせて大きな網を沈める、さうしてよこ一文字に江水をたたきつてあみをひくと一ぺんに數百匹の魴がだきこまれる。平凡なおほくのさかなはみんなのけてすててしまふ。まごひは神力あるかの如くあみからをどりだしてでていつてしまふ。穴に潛んでゐる龍は聲をたてずひつこんでゐるし、としふけた蛟は同類が害せらるるのを見て怒つてゐる、吹きまはす風が颯颯として沙や塵をとばしてゐる。料理人が霜の如くとぎすました庖刀をふるふと、鱠の肉は飛ぶがごとく黃金の盤上に白雪のやうに高くもりあげられる。魴の味にくらべると徐州の禿尾魚はおもふにも足らぬし、漢陰の槎頭の鯛もはだた白刃の庖刀。【三〇】鱠　なます、いきづくり。【三一】白雪　肉の形

しでとほくにげだしてしまふ。ふとつてうまいのは魴魚が第一だといふことがわかる。が既にその味に飽いてしまふとたのしみもさびしくなる感じがある。なぜかといふと諸君見られよ、朝からかけて我我はやたらに魴魚の白きひれを割いたが、彼等は咫尺の間にこの江上の波濤と永久に別れてしまつたのである。（氣の毒にたへぬ。）」

又觀打魚。

又打魚を觀る

蒼江漁子清晨集。
設網提綱取魚急。
能者操舟疾若風。
撐突波濤挺叉入。
小魚脫漏不可記。
半死半生猶戢戢。
大魚傷損皆垂頭。

蒼江漁子、清晨に集る、
網を設け綱を提げて魚を取ること急なり。
能者は舟を操る疾きこと風の若く、
波濤に撐突して叉を挺して入る。
小魚の脫漏、記す可からず、
半死半生猶戢戢たり。
大魚は傷損皆頭を垂る、

【字解】【一】蒼江　あをき水色の江、涪江をいふ。【二】漁子　れふし。【三】清晨　はれたあした。【四】網　あみの大づな。【五】取　魚。取の字は一に萬に作る、萬の字に從へば、設網提網萬魚急　とよみ、急の字は魚の逃げださんと爭ふさまとなる。取魚急は魚のとりかたが急なるなり。【六】能者　舟を操るにたくみなもの。【七】撐突　撐

屈強(一五)泥沙有時立。』
東津觀(一六)魚已再來。
主人罷(一七)鱠還傾盃。
日暮蛟龍改(一八)窟穴。
山根鱣鮪隨(一九)雲雷。
干戈格鬬尚未已。
鳳凰麒麟安在哉。
吾徒胡爲縱此樂。
暴殄(二一)天物聖(二二)所哀。』

泥沙に屈強して時有りてか立つ。
東津魚を觀て已に再び來る、
主人、鱠を罷めて還盃を傾く、
日暮れて蛟龍、窟穴を改む、
山根の鱣鮪、雲雷に隨ふ。
干戈格鬬尚未だ已まず、
鳳凰麒麟安に在りや。
吾が徒胡爲れぞ此の樂みを縱にする、
天物を暴殄するは聖の哀む所なり。』

【語義】 また魚をとるのを觀てよめるうた。前詩と殆ど同時の作ならん。

【詩意】 きれいな江にれふしどもがあさから集り、網を設け大綱をひつさげてせつせと魚を取る。舟をあやつるにたくみなものは船を風のごとくはやくあやつり、さすまたをぬきんでながら波にぶつつかつてのりこんでゆく。小さな魚はあみからどれほどぬけでたか記したてることもできぬが、それでよわりこんでゐるが、時としては泥沙のうへにしやちよこばつてつつたちあがることもある。』 自分は東津へ魚を觀るためにはこれで二度きてゐるのだ。主人は鱠をやめてもまだ酒盃を傾けてもてなしてくれる。日ぐれになると蛟龍も不安を感じてかその穴をうつし、山のふもとにすむ鱣や鮪も雲雷の起るにつれてどこへかひきうつつてしまふ。（魚も身の安全をはかりつつある。）今や天下は干戈を用ひて人間どうしがうちあひたたかふことがまだやまぬ。鳳凰だの麒麟だのの瑞鳥瑞獣はいつたいどこにか在るのか。このときにあたつて我我はなんでこんなすなどりなどの樂みをほしいままにするのであるか、天の生じたものをむやみに殺すことはむかしの聖人もかなしとせられたことである。』

越王樓歌

綿州州府何磊落(三)、
顯慶年中越王作。

越王樓の歌

綿州の州府何ぞ磊落なる、
顯慶年中、越王の作。

【字解】 〔一〕 越王樓　越王がたてた樓、越王、名は貞といひ、唐の太宗の第八子なり、蓋し嘗て綿州の刺

はささへる義なるも、撐突はぶつかる意とみゆ。〔八〕 挺又　挺は「ぬきんづる」、又は魚を刺す「さすまた」。〔九〕 入　舟をのりいれること。〔一〇〕 駛瀾　あみからもれること。〔一一〕 記　かぞへてしるしたてる。〔一二〕 戢戢　あつまる貌。〔一三〕 屈强　しひて立ちあがらんとするさま。〔一四〕 觀魚　すなどりをみんがためにの意。〔一五〕 主人　蓋し綿州の刺史杜使君なり。〔一六〕 罷鱠　鱠を初には作つてたべたのだがたべあきてからそれをやめて。鱠のことは前詩にのべたれば簡略にし。〔一七〕 隨雲雷　雲雷の起るにつれてどこへ。〔一八〕 鱣鮪　みなうなの名。〔一九〕 暴殄天物　「書經」の語、天の生じたものを

孤城西北起高樓。
碧瓦朱甍照城郭。
樓下長江百丈清。
山頭落日半輪明。
君王舊跡今人賞。
轉見千秋萬古情。

孤城の西北に高樓を起す、
碧瓦朱甍、城郭を照す。
樓下の長江、百丈清し、
山頭の落日、半輪明なり。
君王の舊跡、今人賞す、
轉た見る千秋萬古の情。

【題義】越王貞が建てた綿州の城外の樓にのぼりてつくれる歌。寶應元年綿州にての作。

【詩意】綿州の府治はなんでこんなに壯大であるか、それは顯慶年間に越王貞がおたてになつたのである。その城の西北にあたつてもまた高い樓を起された。その樓の碧色の瓦、朱色の蒼瓦ははるかに城郭を照らしてゐる。」　この樓にのぼつてみると樓の下には涪江が百丈の水を清らかにたたへ、附近の山のほとには半輪の夕日があかるくかがやいてゐる。むかしの王のたてられた舊迹をいま我我が見て之を賞するのであるが、之によつてさらに今後千年萬年の後の人人のこころもまた我我とおなじく王の舊跡を賞しなつかしむであらうことが知らるるのである。」

史たりしならんといふ、綿州城外西北に臺あり、高さ百尺、上に樓あり、州城を下瞰す、高宗の顯慶中の作なり。【三】州府　府の治所をいふ。【四】壯偉　壯大なるさま。【五】顯慶　高宗の年號、西紀六五六至六六〇。【六】甍　蒼にあたるかはら。【七】長江　涪江。【八】君王　越王をさす。【九】千秋萬古情　後世

海棕行

左綿公館清江濆。
海棕一株高入雲。
龍鱗犀甲相錯落。
蒼稜白皮十抱文。
自是衆木亂紛紛。
海棕焉知身出羣。
移栽北辰不可得。
時有西域胡僧識。

左綿の公館、清江の濆、
海棕一株高く雲に入る。
龍鱗犀甲相錯落す、
蒼稜白皮、十抱の文。
自ら是れ衆木亂れて紛紛たり、
海棕焉んぞ知らむ身の羣を出づるを。
北辰に移栽するは得べからず、
時に西域胡僧の識る有り。

移栽北辰　北極星のある地方（都をさす）へうつしうゑる。【一】西域胡僧　西域地方の外國僧。

【題義】海棕といふ樹をみてよめるうた。寶應元年綿州にての作。

【詩意】綿州の刺史の官邸の江のほとりに、一本の海棕があつて、その高いこと雲にまではひつてを

【字解】【一】海棕　海外より齎された棕といふ木、波斯産の木といふものとおなじとの說あれども明ならず。【二】左綿　涪江の左にあるゆゑに左綿といふとの說あるも、蓋らくは成都の東にあるを以て左綿といふならん、綿州のこと。【三】公館　刺史の官邸。【四】濆　ほとり。【五】犀甲　さいの皮のよろひ。【六】錯落　いりまじる。【七】蒼稜　あをきふし。【八】十抱　とかかへ。【九】文　あやもやう。【一〇】

る。幹をみると十かかへもある大木の蒼きふし、白き皮があや模様をなしてちやうど龍の鱗や、犀の皮の甲がいりみだれてをるごとくみえる。もとより他の多くの木はやたらにたくさんあるから、海棕はどうして自分のからだが他の羣を拔いてゐるものだといふことがわからうぞ。このめづらしい木を北方へ移しうゑたくおもふがそんなことはできぬ、ただ時として西域の外國僧がみてこれは海棕といふ木だといつて識つてくれるくらゐのことにすぎぬ。

姜楚公畫角鷹歌

姜楚公の畫ける角鷹の歌

楚公畫鷹鷹戴角。
楚公の畫鷹は鷹角を戴く、

殺氣森森到幽朔。
殺氣森森として幽朔より到る。

觀者貪愁掣臂飛。
觀るもの貪愁す臂を掣して飛ぶかと、

畫師不是無心學。
畫師も是れ學ぶに心無くんばあらず。

此鷹寫眞在左綿。
此鷹眞を寫して左綿に在り、

却嗟眞骨遂虛傳。
却て嗟す眞骨の遂に虛しく傳らるる

梁間燕雀休驚怕。
梁間の燕雀、驚怕するを休めよ、

亦未搏空上九天。
亦未だ空に搏つて九天に上らず。

【字解】〔一〕姜楚公　姜皎ないふ、皎は上邦の人、善く鷹をふがく、玄宗の朝に累官して太常卿に至り、楚國公に封ぜらる。〔二〕戴角　角のごとき毛のふさを頭上に戴だける鷹なり。〔三〕殺氣　殺伐の氣。〔四〕森森　しづかにつらなるさま。〔五〕到幽朔　幽朔の地方より來到するをいふ、幽朔は北方。〔六〕貪愁　この二字は其義詳ならず、仇氏は二義ありとし、貪＝其能飛、又愁＝其飛去、といへる

が同時にこんな矛盾した語を用ふるはす無し。或は太愁（はなはだしく愁ふる）といふにあたる當時の俗語なるやも知れず、かりに太愁の義とみておく。〔七〕掣臂飛　臂衣から一文字をひいて飛び去る。〔八〕不是無心學　非レ無＝學ブ之心＝の義、學びたいとの心はあるがまるでまなべぬ、といふなり。〔九〕眞骨　まことの「たか」。〔一〇〕虛傳　「たか」の名のみありてつたへられ其の實を知らざるをいふ。〔一一〕梁　はりの木。〔一二〕怕　おそれる。〔一三〕亦　壹は妙は妙なれどもまたの義。〔一四〕搏空　そらに羽をうちつける。〔一五〕九天　九重の天。

【題義】姜楚公がゐがいた角毛をいただいてゐる鷹をみてよめるうた。寶應元年綿州にての作。

【詩意】楚公がゐがいた鷹は角毛をいただいてゐるたかだ、これをみると北方から殺氣がしづかにつらなつてやつてくる樣な感じがする。之を觀るものはもしや鷹が臂衣から一文字に飛びだしはすまいかとひどく心配するし、ゐかきはできるなら自分もこの樣なたかをかきたいと之を學ぶの念が無いでもないらしい。この鷹が鷹の眞をうつしてこの綿州にあるために却つて眞の鷹は畫に壓倒されて名ばかり傳へられるといふなげかはしいことになつてゐる。がはりのあたりの燕や雀どもよ、驚きおそれることなかれ、いくらうまい畫だとてもまさか空にはねうつて天までまひあがりはせぬから。

東津送韋諷攝閬州錄事

東津にて韋諷が閬州の錄事を攝するを送る

聞說江山好。憐君吏隱兼。聞說らく江山好しと、憐む君が吏隱を兼ぬるを。
寵行舟遠泛。惜別酒頻添。寵行舟遠く泛ぶ、惜別酒頻りに添ふ。
推薦非承乏。操持必去嫌。推薦、承乏に非ず、操持必ず嫌を去れ。
他時如按縣。不得慢陶潛。他時如し縣を按ぜば、陶潛を慢にするを得ず。

【字解】〔一〕東津　駙打魚歌にみえたり。〔二〕韋諷　人名。〔三〕掾　人の代理をつとめる。〔四〕閬州　四川省保寧府なり。〔五〕錄事　官名。〔六〕江山　閬州の江山。〔七〕吏隱兼　吏にして隱者をかぬ。〔八〕寵行　官の舟にて特別に見送るとみゆ、故に行くが寵すといふ。〔九〕推薦　他人のすすめによる。〔一〇〕承乏　不才を以て其の任を承くるなり。〔一一〕操持　身のおこなひかた。〔一二〕去嫌　嫌疑を去る、人からうたがひをうくるごときことをせぬこと。〔一三〕按縣　州内の屬縣の樣子をしらべにあるく。〔一四〕慢　なほざりにする、あなどる。〔一五〕陶潛　縣内の賢人にあてて用ふ。

【題義】韋諷といふものが綿州から閬州の錄事代理として赴任するので、之を東津で送つた詩。寶應元年綿州にての作。

【詩意】きくところによると閬州は江山の景色がいいとのことだが、君が吏にして隱者をかぬるは愛すべきことである。君が遠方へゆくについてそれをみ送るため遠くまで舟を泛べ、別れを惜んでは酒をしきりに添へる。このたびの赴任は君の賢なるが故に推薦されたに由るものであつて不才なものがまがりなりに職を承くるのとはわけがちがふ、君は著任後身の行ひに於ては必ず人から嫌疑をうけるような事をさけねばならぬ。それから他日管内の縣を巡視するときに陶淵明の樣な賢人が縣の屬官にあるかも知れぬからそんな人物をあなどつてはならぬ。

光祿坂行

山行落日下絕壁。
南望千山萬山赤。
樹枝有鳥亂鳴時。
暝色無人獨歸客。
馬驚不憂深谷墜。
草動只怕長弓射。
安得更似開元中。
道路卽今多擁隔。

山行して落日に絕壁より下り、
南望すれば千山萬山赤し。
樹枝鳥有り亂れ鳴く時、
暝色人無く獨歸の客あり。
馬驚くも憂へず深谷に墜つるを、
草動いて只怕る長弓の射むことを。
安んぞ得む更に開元の中に似むことを、
道路卽今、擁隔多し。

【字解】〔一〕光祿坂　梓州綿山縣（今の潼川府中江縣）にあり、綿州より梓州へいるときに通過せしとみゆ。〔二〕山行　山みちをゆく。〔三〕落日　日のおちかかるとき。〔四〕下　作者がくだるなり。〔五〕絕壁　きつたてのがけ、卽ち光祿坂をいふ。〔六〕南望　梓州の方をながめる。〔七〕長弓射　盜賊が旅客をめがけて長い弓にて射殺するをいふ。〔八〕安得　希望のことば。〔九〕開元　玄宗の朝太平の時代。〔一〇〕卽今　ただいま。〔一一〕擁隔　まへをふさぎへだてられる。

【題義】光祿坂をとほりしときのうた。寶應元年梓州にての作。

【詩意】自分は日の落ちかかるとき山みちをあるいて絶壁からくだりかける。このとき南の方をながめると千山萬山みなまつかに見える。樹の枝には鳥が居て鳴いてゐる。くらがりの色があたりをとざしてだれもとほる人もなくただひとりかへる自分といふものがあるばかり。自分は馬がものに驚いてそのため深い谷におちても心配はせぬが、ただ草むらがうごいてそこから盗賊があらはれ長い弓で射はせぬかとおそれるものである。どうしたならばもいちど開元年間のやうな太平の時期になることができるであらうか、ただいまは道路がふさがれてとほれぬことが多いのでこまるのである。

苦戰行

苦戰身死馬將軍。
自云伏波之子孫。
干戈未定失壯士。
使我嘆恨傷精魂。
去年南行討狂賊。
臨江把臂難再得。

苦戰行

苦戰身死す馬將軍、
自ら云ふ伏波の子孫なりと。
干戈未だ定まらず壯士を失ふ、
我をして嘆恨、精魂を傷ましむ。
去年南行、狂賊を討つ、
江に臨み臂を把ること再び得難し。

【字解】【一】苦戰　馬將軍なる者が苦戰して死せしことを惜しみてよめるうた。其の事實が何年の事なるや諸家異說あり、上元二年段子璋の反して遂州綿州を陷れし時なりとする者多きも疑ふべき點もあり、今決する能はず、しばらく上元二年說に從ふ。【二】馬將軍　名は詳ならず。【三】伏波　後漢の伏波將軍馬援。【四】壯士　馬將軍をさす。【五】去年　戰死の事實が上元二年にありとするものは此語によりて此詩を寶應元年とす、而して寶應元年から前年上元二年をさして去年といひしものとみる。【六】南行　遂州の方へゆきしこと、唐の遂州は今の潼川府遂寧縣なり、一に南行を江南に作る、江南は浩江の南の義。【七】狂賊　段子璋。【八】臨江把臂　此の臨江の江がどこなるかは疑問なり、上文を讀むとき江は浩江なりとみること至當なるも上元二年に作者は浩江には居らず成都にありしなり、因つて浦氏の如きは馬將軍を賊を討ちにゆくとき成都からでかけしものにてこの江は錦江なりとさへいへり、或は作者漫然とかつて錦江にてかたりあひしことをさしていへるか、把臂はひぢをとりてしたしくかたる。

別時孤雲今不飛。
時獨看雲淚橫臆。

別時の孤雲今飛ばず、
時に獨り雲を看て淚臆に橫はる。

【題義】馬將軍が賊を討ち苦戰して死せしことを惜しみてよめるうた。作時は未詳。かりに寶應元年とす。

【詩意】苦戰をして死んでしまつた馬將軍。彼自らのいふ所によると彼は伏波將軍の子孫だといふことだ。世の兵亂がまだ定まらぬのに彼の如き壯士を失うたについては自分はなげきうらんでひどくこころをいためさせられるのである。彼が去年南方へ賊をうちにでかけたとき江にのぞみ臂をとつてしたしく物語りをして別れたが、それはまたと爲すことはできぬ。あのときみた天上の孤雲は今は飛ばない。自分は時時ひとりで別な雲をみてはむねに涙をながしてゐる。

去秋行

去秋涪江木落時。
臂槍走馬誰家兒。
到今不知白骨處。
部曲有去皆無歸。
遂州城中漢節在。
遂州城外巴人稀。
戰場冤魂毎夜哭。
空令野營猛士悲。

去秋涪江木落ちし時、
槍を臂にし馬を走らせしは誰家の兒ぞ。
今に到つて知らず白骨の處、
部曲去る有りて皆歸る無し。
遂州城中、漢節在り、
遂州城外、巴人稀なり。
戰場の冤魂、毎夜哭す、
空しく野營の猛士をして悲ましむ。

【字解】〔一〕「去秋」詩中の初の二字をきりとりてうたの題とせしのみ。〔二〕去秋　此詩前の「苦戰行」とおなじことをいへる詩なり、前詩の事と時と不明なるごとく此篇も不明なり、しばらく上元二年段子璋の反の時の事とみなしおく、子璋は二年四月に反し五月には誅に伏したれば秋とは關係なし、故に注家秋に至りて寇が全く平ぎしならんといへり。〔三〕涪江　これは遂州の方面の涪江をさす。〔四〕木落　木の葉のおつること。〔五〕臂槍走馬　槍を臂にでかけしこと。〔六〕去　征伐にでかけしこと。〔七〕部曲　部隊。〔八〕漢節在　漢節とは漢の天子の使者のはたの義、ここは遂州の劍南の官兵。〔九〕冤魂　無實の罪に死したたましひ、不幸な戰死者を

餘を征伐にゆきし官軍のさま。〔六〕白骨處　官軍戰死者の白骨の横はれるところ。〔七〕部曲　部隊。〔八〕去　征伐にでかけしこと。〔九〕遂州　遂川府遂寧縣涪。〔一〇〕漢節在　漢節とは漢の天子の使者のはたの義、ここは遂州の劍南の官兵。〔一一〕巴人　即ち上の部曲、討賊の官兵。〔一二〕冤魂　無實の罪に死したたましひ、不幸な戰死者をいふ。〔一三〕野營猛士　營中の生存の兵をいふ。

【題義】去年の秋のできごとについてのべたるうた。作時未詳。かりに寶應元年とす。

【詩意】去年の秋、涪江のほとりで木の葉のおちたころ、槍を臂にし馬を走らせていつた人人はどこの家のものたちであつたか。その人たちは今は白骨になつてしまつたにその所在がわからぬ。あのときの部隊はいつたものはあるがかへつたものはない。遂州には天子の使者がをられたが立派に戰死された。さうして官軍には利あらず部曲となつていつた巴地の人人もいきのこつたものは稀である。戰場の不幸の死鬼はまいばん哭してをる、之をきいては野營の猛士もいたづらに悲しみをもよほすばかりである。

廣州段功曹到得楊五長史譚書功曹却歸聊寄此詩

廣州の段功曹到る。楊五長史譚が書を得たり。功曹却歸す。聊か此の詩を寄す

衛青開幕府。楊僕將樓船。
漢節梅花外。春城海水邊。
銅梁書遠及。珠浦使將旋。
貧病他鄉老。煩君萬里傳。

衛青、幕府を開く、楊僕、樓船に將たり。
漢節、梅花の外、春城、海水の邊。
銅梁、書遠く及ばる、珠浦、使將に旋らむとす。
貧病、他鄉に老ゆ、君を煩はして萬里に傳へしむ。

【字解】〔一〕廣州　廣東にあり。〔二〕段功曹　功曹参軍段某。〔三〕到　梓州へきたこと。〔四〕楊五長史譚　楊はさきに桂州にありしが桂州より廣東へ轉任せしとみゆるなり、長史は官名。〔五〕却歸　もどる。〔六〕衛青　漢の武帝の時の武將、今かりて廣州の都督をさす、楊譚が長官たるもののことないふ。〔七〕楊僕　漢の時樓船將軍となり豫章より出で横浦に下れり、楊譚に比す。〔八〕梅花　廣東の北の大庾嶺は梅花を以て名あり。〔九〕春城　廣州の城をさす、時に春なるを以て春城といふ。〔一〇〕遠及　わざわざここまでよこしてくれたといふこと。〔一一〕銅梁　山の名、梓州にあり、作者自己の居處ないふ。〔一二〕珠浦　合浦のこと、廣東廉州にあり、眞珠を以て名あり、名所をあげたるのみ。〔一三〕使者　段功曹をさす。〔一四〕貧病　作者の況。〔一五〕蜀郷　蜀地をさす。〔一六〕君　段。〔一七〕萬里　廣州。

【題義】廣州の段功曹がきてくれたので自分は廣州の都督府の長史楊譚が手紙を得た。段がもどるといふので自分は此詩を楊に寄せた。寶應元年梓州にての作。

【詩意】衛青に比すべき君の長官が廣州に幕府を開いてゐる。楊僕に比すべき君はその部下として樓船をひきゐてゐる。都督は梅花の名所のさらに遠くに使節を持してをるし、その城は海水のほとりにある。そんな遠方の地からこんな銅梁山のある所までわざわざ手紙をよこしてくれられた。その手紙をもつてきてくれた使者段君はいま合浦の方へかへらうとする。それで段君よ、君を煩はしてわたしが貧しくかつ病んで他郷に老いつつあるといふことを傳言してもらふのである。

送段功曹歸廣州

段功曹が廣州に歸るを送る

南海春天外。功曹幾月程。
峽雲籠樹小。湖日蕩船明。
交趾丹砂重。韶州白葛輕。
幸君因旅客。時寄錦官城。

【字解】〔一〕南海　廣東の海。〔二〕春天　時春なるゆゑ春天といふ、一に青天に作る。〔三〕功曹　段をさす。〔四〕幾月程　いくつきのみちのりぞ。〔五〕峽雲籠樹小　上三字下二字の句法なり、籠ゲ樹小とよみては雲が小なることになりて不都合なり。〔六〕湖日蕩船明　これも上三字下二字によむべし、湖とは洞庭湖などをさす、蕩とは水面の日光がうごくこと。〔七〕交趾　嶺東よりさらに南にあり、丹砂をいだす、葛洪、丹砂いづときき、勾漏の令たらんと欲せしこと前にみゆ。〔八〕韶州　廣東にあり。〔九〕白葛　白いくづのかたびら。〔一〇〕君　段をさす。〔一一〕錦官城　成都の西城、じつは浣花草堂をさす、此句あるにより此詩を成都にての作とするものあるも、段功曹は梓州へ手紙をもち來りしものなれば此詩も梓州にての作なるべし、錦官城といへるはそこに草堂ありて弟をるすにおいてあるゆゑそこを假りの根據地としてのべしなるべし。

【題義】段功曹が廣州へもどるのを送る詩。寶應元年春梓州にての作か。

【詩意】南海は春天の外のとほくにある、功曹はそこへゆきつくにいく月のみちのりを要するのか。君の通過するところ、或は峽雲にこめられて樹木が小さくみえたり、或は湖上の落日波上にうごいて船の窓明なるをみることであらう。廣州へいつたなら交趾には貴重すべき丹砂があるし、韶州には

輕らかな白い葛のかたびらがある。どうか君はたびびとにあつらへて時としてはそれを錦官城のわたしの方へよこしてもらひたい。

題玄武禪師屋壁。

玄武の禪師が屋壁に題す

何年顧虎頭。滿壁畫滄洲。
何の年か顧虎頭、滿壁、滄洲を畫ける。

赤日石林氣。青天江海流。
赤日、石林の氣、青天、江海の流れ。

錫飛常近鶴。杯渡不驚鷗。
錫飛びて常に鶴に近く、杯渡、鷗を驚かさず。

似得廬山路。眞隨惠遠遊。
廬山の路、眞に惠遠に隨つて遊ぶを得るに似たり。

【字解】【一】玄武　山の名にして又縣の名、潼川府中江縣これなり。【二】禪師　名は詳ならず。【三】顧虎頭　晉の顧愷之、小字を虎頭といふ、畫の名人なり。【四】滄洲　仙境なり。【五】錫飛　梁の時、寶誌上人と白鶴道人と舒州の潛山に之くことを爭ひ、上人は錫を飛ばし道人は鶴をつかはし各一その往きつきし處をしるさしめしとの話あり。【六】杯渡　木杯にて河をわたることなり、これも仙人のすることなり。【七】鶴　畫中の石林に屬するもの。【八】鷗　畫中の江海に屬するものなり、「列子」に道を得て機を忘れしものは鷗にまじりても鷗は之になれて驚かぬといふ話あり。【九】廬山　山の名、江西九江府にあり、晉の僧惠遠その山麓に東林寺を建て白蓮社を結ぶ、十八人の賢人相會す。

【題義】玄武山の或る禪師の屋壁にかきつけた詩。寶應元年梓州にての作。

【詩意】いつのとしにか顧虎頭がここの壁ぢうに滄洲の仙境をえがいた。赤日照らして石林の氣うかぶさま、青天たかくして江海の水流るるさま。仙境のすがたである。之に對して禪師は常に圖中の鶴にちかく錫を飛ばし、或は古仙のやうに木杯をうかべて鷗にちかづくとも鷗を驚かすことなく、この畫境としたしんでをられる。自分も禪師のところでこの圖を見るとなんだか廬山のやまみちで惠遠法師にしたがうて遊ぶことができたかの樣なここちがする。

悲秋

涼風動萬里。羣盜尙縱橫。
涼風、萬里に動く、羣盜尙縱橫。

家遠傳書日。秋來爲客情。
家は遠し傳書の日、秋來、客と爲るの情。

愁窺高鳥過。老逐衆人行。
愁へて高鳥の過ぐるを窺ひ、老いて衆人の行くを逐ふ。

始欲投三峽。何由見兩京。
始めて三峽に投せむと欲す、何に由りてか兩京を見む。

【字解】【一】悲秋　かなしむべきあき。【二】羣盜　史朝義、吐蕃未だ平がず、成都には徐知道が亂あり。【三】傳書　留守宅から手紙がこちらへつたへらるる。【四】窺高鳥過　自己も飛びたしとおもふなり。【五】投三峽　身を三峽の地に投ずること。作者は蜀を出づるには先づ三峽に至りて、そこより郷へかへるを便利とかんがへしなり、是、後年夔州に至りし所以なり。【六】何由　いか

なる方法によりてか。(三峽に投ずるに非れば)。【七】 兩京　長安、洛陽。

【題義】 かなしき秋のをりのこころをよめり。寶應元年の秋梓州にありて作る、時に家族は成都に在り。

【詩意】 すずかせが萬里の地に吹きそめた。それだのにさまざまの盜賊どもがまた縱横にはびこつてゐる。家が遠くて手紙が容易にこぬとき、秋からかけて異郷にひとりたびの身となつてゐる自分のこころもち、(それはどんなであるか)自分は愁へては高くとぶ鳥のすぎるのをのぞいては自分もあんなになりたいなあとかんがへ、老いては多くの人人のあるくあとからくつついてゆくばかりである。自分は今はじめて身を三峽の地に投じようとおもふのだ、それがいちばん都合がいい。それでなければいかなる方法によつて兩京を見ることができようぞ。

客夜

客睡何曾著。秋天不肯明。
入簾殘月影。高枕遠江聲。
計拙無衣食。途窮仗友生。
老妻書數紙。應悉未歸情。

客夜

客睡何ぞ曾て著せむ、秋天肯て明ならず。
簾に入る殘月の影あり、高枕、遠江聲あり。
計拙にして衣食無し、途窮して友生に仗る。
老妻書數紙。應に未歸の情を悉すなるべし。

【字解】 【一】 客夜　たびのよる。【二】 客睡何曾著　睡著の二字をきりはなして用ひたり、客何曾睡著と同意、睡著はねむりつづけること。【三】 不肯明　意地わるくあけようとせぬといふこと、れむれぬものは早く夜のあけんことを欲す、欲すれば欲するほど夜はあけぬ、それをかくいへり。【四】 仗　よる。【五】 友生　ともだち、梓州の武官章彝をさすかとの說あり。【六】 老妻書　仇氏は書乃寄妻之書と注して妻へあてる手紙ときたるも、恐くは妻からの手紙なるべし、前詩の家遺傳書日の書はこの妻の手紙を持ちしものなるべく、前詩の書と本詩の書とは同じからん。【七】 數紙　三四枚。【八】 悉　妻が知りつくす。【九】 未歸情　梓州に居て成都へかへらぬ作者のこころ。作者の歸らざるは衣食のためと、三峽へ出ようとの考との二つによる。

【題義】 梓州にありてのたびの夜のこころもちをのぶ。蓋し妻の手紙を得し夜のことなり。寶應元年秋、梓州にての作。

【詩意】 たびのねむりはねむらうとしたところでどうしてねむりつづけることができるものか、とてもねつかれぬ。それにあきのそらが意地わるくよあけになつてくれようとせぬ。すだれのなかへは殘月のかげがさしこむし、枕を高くしてねてゐると遠くの方で江の流れのなるおとがする。自分は世わたりの計がまづくて衣食をもたぬので、逆境にこまつてここの友だちにたよつてをるのである。老妻からちかごろ三四枚の手紙がきた。それによれば妻もわしのかへらずにゐるこころもちをよく知つてくれたこととおもはれる。

客亭(一)

秋窓猶曙色。落木更高風。　秋窓猶曙色、落木更に高風。
日出寒山外。江流宿霧中。　日は出づ寒山の外、江は流る宿霧の中。
聖朝無棄物。衰病已成翁。　聖朝、棄物無し、衰病已に翁と成る。
多少殘生事。飄零任轉蓬。　多少殘生の事、飄零、轉蓬に任す。

【字解】〔一〕客亭　客居せる所の亭。

【題義】梓州の寓居の亭にてのさまをのべたり。前の「客夜」と同時の作なるべし。寶應元年梓州にての作。

【詩意】秋の部屋のまどがまだあけぼのの色をおびてゐる。そとでは木の葉が落ちつつあるのにさらに風がたかく吹いてゐる。さむぞらの山の外から太陽がでる、まだはれぬ霧のなかに江の水がながれてゐる。聖代にはうちすてられておかれるものとてはないのであるが、自分は老衰、疾病でなにごともなすことなくしてはやおぢいさんになつてしまうた。これからどれほどかの老いさきの事があらうが、それはおちぶれて蓬のころがりゆくにまかす樣な飄泊生活を爲すにとどまるのである。

九日登梓州城(一)

伊昔黃花酒。如今白髮翁。　伊昔黃花の酒、如今、白髮の翁。
追歡筋力異。望遠歲時同。　追歡、筋力異なり、望遠、歲時同じ。
弟妹悲歌裏。乾坤醉眼中。　弟妹、悲歌の裏、乾坤、醉眼の中。
兵戈與關塞。此日意無窮。　兵戈と關塞と、此の日意窮り無し。

【字解】〔一〕九日　陰曆九月九日、重陽菊酒をのみ祝する日なり。〔二〕梓州　今四川省瀘川府三臺縣治。〔三〕伊　これ、ことばなり。〔四〕黃花酒　菊花をうかべたるさけ。〔五〕如今　いま。〔六〕白髮翁　自己をいふ。〔七〕追歡　むかしのおもしろさを今日よりさかのぼつてかんがへる。〔八〕筋力異　昔は壯年にして今は老年となりたれば筋力の强弱ことなれり。〔九〕望遠　遠地を望むこと、遠地とは弟妹等の居る地方をいふ。〔一〇〕歲時同　歲は一歲、時は四時、歲時にて一年中をいふも意味する所は九日にあり。同じとは遠きを望むはいつもこの祝日に於てし、すこしもかはらぬをいふ。〔一一〕醉眼中　醉ひのまなこにてながめてなる。〔一二〕兵戈　兵亂をいふ。〔一三〕關塞　これは弟妹等と關塞をへだててなるをいふ、望遠の遠の字をうけて距離のうへよりいひし辭なり。仇注に兵戈阻二於關塞一とときたるは兵戈と關塞とを同じ樣に見たるものにて、それならば「與」の字を以て對等に結びつける要なきなり。〔一四〕意無窮　意は悲哀のこころをいふ。

【題義】菊花酒をのみ重陽の日に梓州の城にのぼりて感をのぶ。寶應元年秋、梓州にての作。

【詩意】むかしわかいころ菊酒をのんだが今や自分はしらがのおやぢとなつた。むかしのおもしろさ

をさかのぼつてかんがへるとむかしとは筋力がちがつてきた、ただ遠地の様子如何とながめることはいつもこの祝日であつてかはらず、同じことである。卽ち弟妹のことはいつも悲歌のうちに之をおもひ、この天地のさまもただ醉の眼からながめてゐる、醉によらざればみてをれぬのである。どうしていま兵亂のさわぎと關塞のへだたりとが我我近親の會合をさまたげてゐるのか、けふに於ける自分の悲哀のこころもちははてしないものである。

九日奉寄嚴大夫

九日嚴大夫に寄せ奉る

九日應愁思。經時冒險難。
不眠持漢節。何路出巴山。
小驛香醪嫩。重巖細菊斑。
遙知簇鞍馬。回首白雲間。

眠らずして漢節を持す、何の路か巴山を出でむ。
小驛、香醪嫩に、重巖、細菊斑なり。
遙に知る鞍馬を簇らして、首を白雲の間に回らさむことを。

【字解】【一】嚴大夫　嚴武なり、武は歸朝を命ぜられ御史中丞より御史大夫に進められたり。武は六月朝廷へかへりかけしが途知道の偶ありて九月になほ巴の地方を出でざりしなり。【二】應愁思　武のことを想像していふ、愁思とは武が愁思するなり。【三】經時　時をへて、ながき時をいふ。【四】險難　道路のなんぎ。【五】漢節　漢の天子の使者のもつ「はた」、武が唐の天子より軍務の重任を委任せられゐるをいふ。【六】巴山　大巴山、四川省保寧府南江縣にあり。【七】香醪　かんばしきにごりさけ。【八】嫩　やはらか、できたてなるをいふ。【九】重巖　かさなれるいはほ。【一〇】細菊　小花の「きく」。【一一】簇鞍馬　嚴武一行の鞍馬が多くなる。【一二】回首　杜甫の方へかうべをむけてながめる。【一三】白雲　山中のことゆゑ白雲といふ。

【題義】九日の祝日にあたり御史大夫嚴武に寄せた詩。寶應元年重陽に梓州にありて、梓州より寄せたる作なり。

【詩意】あなたはいまごろは愁へて思ひつつあるであらう、それはながらく道路のなんぎををかしてゐられるからである。すなはち夜もろくろく眠らずに使者の節を持ち、朝威をはづしめぬ樣にしてをられるが、どの路から巴山を出ようとされるのであるか。あなたのとほられる小驛には香しきにごりさけがやはらかな味をもち、かさなれる巖にはこまかい菊の花がまだらにさいてゐるであらう。自分がここからはるかに想像すると、あなたはそこに鞍馬をむらがらせてをりながら、白雲のあひだに首をめぐらしてわたしのゐるこちらをながめてをられることであらう。

【餘論】杜甫の此篇に對して嚴武が答へたる詩あり。左の如し。

巴嶺答杜二見憶　嚴武

臥向巴山落月時。　兩鄉千里夢相思。

可レ但歩兵偏愛レ酒。　也知光祿最能レ詩。
江頭赤葉楓愁レ客。　籬外黄花菊對レ誰。
跋レ馬望レ君非二一度一。　冷猿愁雁不レ勝レ悲。

嚴　武

巴嶺にて杜二が憶はるるに答ふ

臥して向ふ巴山落月の時、兩郷千里夢相思ふ。但歩兵の偏に酒を愛するのみなるべけんや、也知る光祿が最も詩を能くするを。江頭の赤葉楓客を愁へしむ、籬外の黄花菊誰にか對す。馬を跋し君を望む一度に非ず、冷猿愁雁悲みに勝へず。

秋盡

秋盡東行且未レ迴。　茅齋寄在二少城隈一。
籬邊老却陶潛菊。　江上徒逢袁紹杯。

秋盡

秋盡きて東行且未だ迴らず、茅齋寄せて少城の隈に在り。
籬邊老却す陶潛が菊、江上徒らに逢ふ袁紹が杯。

【字解】〔一〕秋盡　題の二字は詩の首句の二字を取る。〔二〕秋盡　秋のをはりしこと。〔三〕東行　梓州は成都より東にあり。〔四〕且　秋盡きて尚且の意。〔五〕迴　成都へもどること。〔六〕茅齋　かやぶきの書齋、草堂のそれをいふ。〔七〕寄　依託の意。〔八〕少城　成都の西城、張儀が作る所といひ、錦官城と名くるものとおなじ。〔九〕隈　水の回るところをいふ、「くま」。〔一〇〕老却　却はつけ字なり、老いてしまふこと。〔一一〕陶潛菊　陶潛の書齋、草堂のそれをいふ。〔一二〕袁紹　これは梓州の涪江をさす。〔一三〕江上　袁紹が杯。

雪嶺獨看西日落。　劍門猶阻北人來。
不レ辭萬里長爲レ客。　懷抱何時好一開。

雪嶺獨り看る西日の落つるを、劍門猶阻つ北人の來るを。
辭せず萬里長く客と爲るを、懷抱何の時か好し一たび開かむ。

〔一四〕雪嶺　雪山なり、梓州にあたる。〔一五〕劍門　梓州よりいへば北にあたる。〔一六〕阻　じやましてへだてること。〔一七〕北人　長安方面よりくる人。〔一八〕懷抱　むねにいだくものおもひ。〔一九〕開　懷抱を開くなり。

【題義】秋の末になりてまだ他郷に居ることをのべたり。寶應元年秋、梓州にありての作。

【詩意】自分は東の方へでかけてゐてはや秋が終りかけたにかかはらずまだ家へかへらず、書齋は成都の少城の水のくまに寄託してある。家をあけてあるから草堂の籬のほとりには淵明の愛した菊が老いぼれてゐるであらうし、ここの江のほとりでは徒らに土地の主人袁紹の酒杯をうけてをる。家を思ふからただひとりで雪嶺の方に夕日の落つるのをながめやるし、さらに兩都の消息如何と案ずるに依

然として劍門は北方から人のくるのをじやましてをる。萬里の遠くにあつていつまで旅客の身となつてをることはいとはぬが、いつたいいつになつたらこのふさがつたむねのおもひをからりとさせることができるのであらうか。

戲題寄上漢中王三首

戲れに題して漢中王に寄せ上る三首

西漢親王子。成都老客星。　西漢の親王子、成都の老客星。
百年雙白鬢。一別五秋螢。　百年、雙白鬢、一別、五秋螢。
忍斷杯中物。祇看座右銘。　杯中の物を斷ちて、祇座右の銘を看るに忍びむや。
不能隨皂蓋。自醉逐流萍。　皂蓋に隨ふこと能はず、自ら醉ひて流萍を逐ふ。

【字解】【一】戲題　たはむれにかきつける、諸篇に王に酒をれだる意をのべたり、是れ戲れといふ所以なり。【二】寄上　寄せて獻上する。【三】漢中王　名を瑀といひ讓皇帝(睿王)の第六子にして汝陽王璡が弟なり。玄宗が蜀に幸せしとき之に從て漢中に至り、漢中王に封ぜられ銀青光祿大夫・漢中郡太守を加へらる。肅宗のとき之を譴めしによりて帝の怒りにふれ遂州の刺史に貶せらる。ここには漢中王と稱したるも遂州の刺史として何かの事により梓州に來るにより作者之とあひたるものとおもはる。【四】西漢　前漢、唐のことなれど漢をかりていふ。【五】親王子　天子の近親なる王子。【六】老客星　星の名、已にみゆ、自らを比す。【七】百年　生涯をいふ。【八】雙白鬢　左右の白いびんのけ。【九】五秋螢　五年をへしこと、乾元元年長安より鄜州へ出でしとき王と別れ、今寶應元年に至りて五年となる。【一〇】斷杯中物　酒を禁ずること、王は時に禁酒してゐたるものとみゆ。【一一】座右銘　後漢の崔瑗が作る所なり、銘は人の戒めとなることなのべたり。【一二】皂蓋　黑色の車蓋、地方官の用ふるもの。王は刺史なれば皂蓋を用ふ。【一三】自醉　じぶんひとりでゑふ。【一四】逐流萍　うきくさなまれてながれあるく。

【題義】漢中王李瑀にであうたところ酒を禁じてをられるので戲れにかきつけて之にたてまつた詩。寶應元年梓州にての作。

【詩意】漢中王は漢の皇室御近親の王子であられる。自分は成都の年とつた客星である。自分の生涯ははや左右に白い鬢の毛がはえる樣になつたが、王とお別れして以來はや五箇年となりまする。久しぶりでおあひしたのだから一杯やりたいものではござりませぬか。酒を斷つてただまじめくさつて座右の銘などばかりごらんになつてゐるにたへられませうや。ただ御禁酒とあつてはいたしかたもござらぬ。おのりもののあとにおともするわけにはまゐらず、うきくさの流れをおうて自力で醉うてゐるよりほかはござりませぬ。

〔二〕

策杖時能出。王門異昔遊。　策を杖つきて時に能く出づ、王門、昔遊に異なり。
已知嗟不起。未許醉相留。　已に知る嗟して起たざるを、未だ許さず醉ひて相留むるを。